

## **Oracle® Developer Suite**

インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Solaris Operating System (SPARC),  
Microsoft Windows and Linux x86

**部品番号 : B25104-03**

2007 年 4 月

Oracle Developer Suite インストレーション・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2) for Solaris Operating System (SPARC), Microsoft Windows and Linux x86

部品番号 : B25104-03

原本名: Oracle Developer Suite Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2) for Solaris, Windows and Linux x86

原本部品番号 : B16012-04

原本著者 : Orlando Cordero

原本協力者 : Mahasweta Dey, Nick Fry, Panna Hegde, Christine Jacobs, Andy Page, Ingrid Snedecor

Copyright © 2003, 2006, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありえます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

|                                                        |      |
|--------------------------------------------------------|------|
| はじめに .....                                             | vii  |
| 対象読者 .....                                             | viii |
| ドキュメントのアクセシビリティについて .....                              | viii |
| 関連ドキュメント .....                                         | viii |
| 表記規則 .....                                             | viii |
| サポートおよびサービス .....                                      | ix   |
| <br>                                                   |      |
| <b>1 インストールの概要</b>                                     |      |
| Oracle Developer Suite インストール手順の概要 .....               | 1-2  |
| インストール手順について .....                                     | 1-3  |
| Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて .....        | 1-3  |
| 他のリリースとの互換性 .....                                      | 1-3  |
| インストール時の新機能 .....                                      | 1-4  |
| DVD からのインストール .....                                    | 1-4  |
| Solaris 8 および 9 のサポート .....                            | 1-4  |
| オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ .....                        | 1-4  |
| インストール時の /var/tmp 領域の不要化 (Linux および Solaris のみ) .....  | 1-4  |
| 前提条件の確認項目の追加 .....                                     | 1-4  |
| Configuration Assistant の機能拡張 .....                    | 1-5  |
| 制限事項の廃止 .....                                          | 1-5  |
| <br>                                                   |      |
| <b>2 インストールする前に</b>                                    |      |
| ハードウェア要件 .....                                         | 2-2  |
| サポートされるオペレーティング・システム .....                             | 2-3  |
| オペレーティング・システムのソフトウェア要件 .....                           | 2-3  |
| Windows オペレーティング・システム .....                            | 2-3  |
| Sun SPARC ワークステーション用の Solaris オペレーティング・システム .....      | 2-4  |
| Linux オペレーティング・システム .....                              | 2-5  |
| Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件 ..... | 2-6  |
| Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件 ..... | 2-7  |
| Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件 ..... | 2-9  |
| SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件 .....     | 2-11 |
| SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件 .....     | 2-13 |
| 認定ソフトウェア .....                                         | 2-15 |
| オンライン・ドキュメンテーションの要件 .....                              | 2-15 |
| 1 つの Oracle ホームでの共存 .....                              | 2-15 |
| Oracle ホームに関する注意事項 .....                               | 2-15 |

|                                                     |             |
|-----------------------------------------------------|-------------|
| Oracle Developer Suite の複数インストールの実行 .....           | 2-16        |
| Oracle Developer Suite のインストールと Oracle データベース ..... | 2-16        |
| <b>インストーラによって使用されるディレクトリ .....</b>                  | <b>2-17</b> |
| <b>インストールの準備 .....</b>                              | <b>2-17</b> |
| 全般的なチェックリスト .....                                   | 2-18        |
| ロケールの設定 .....                                       | 2-18        |
| ユーザー補助機能の使用 (Windows のみ) .....                      | 2-18        |
| Java Access Bridge のインストール (Windows のみ) .....       | 2-19        |
| 環境変数の設定 (Linux および Solaris のみ) .....                | 2-19        |
| DevSuiteHome .....                                  | 2-19        |
| DISPLAY .....                                       | 2-20        |
| TMP .....                                           | 2-20        |
| TNS_ADMIN .....                                     | 2-20        |
| Linux および Solaris のアカウントおよびグループの作成 .....            | 2-21        |
| インストーラのインベントリのグループ名 .....                           | 2-21        |
| Oracle ソフトウェアのユーザー .....                            | 2-21        |
| インストール中に必要な情報 .....                                 | 2-22        |
| 移行またはアップグレード .....                                  | 2-22        |
| <b>コンポーネント固有のインストールの準備作業 .....</b>                  | <b>2-22</b> |
| OracleBI Beans .....                                | 2-22        |
| <b>インストーラを起動する前の準備 .....</b>                        | <b>2-23</b> |
| Oracle Universal Installer について .....               | 2-23        |
| インストーラによる前提条件の確認 .....                              | 2-23        |
| インストーラのインベントリ・ディレクトリ .....                          | 2-24        |
| インストーラの起動 .....                                     | 2-25        |
| Windows の場合 .....                                   | 2-25        |
| Linux および Solaris の場合 .....                         | 2-26        |
| サイレント・モードおよび非インタラクティブ・モードでのインストーラの実行 .....          | 2-28        |

### 3 インストール手順

|                                                                   |             |
|-------------------------------------------------------------------|-------------|
| <b>Oracle Developer Suite のインストール .....</b>                       | <b>3-2</b>  |
| <b>インストール完了後の作業 .....</b>                                         | <b>3-7</b>  |
| 全般的なチェックリスト .....                                                 | 3-7         |
| 更新 .....                                                          | 3-7         |
| NLS .....                                                         | 3-7         |
| TNS 名 .....                                                       | 3-8         |
| ポート番号 .....                                                       | 3-9         |
| Oracle Developer Suite 用の OC4J インスタンス .....                       | 3-9         |
| ユーザー補助機能 (Windows のみ) .....                                       | 3-10        |
| 各コンポーネントのインストール完了後の作業 .....                                       | 3-10        |
| Oracle JDeveloper 10g リリース 2 (10.1.2) .....                       | 3-10        |
| OracleBI Beans .....                                              | 3-16        |
| データベースに関する注意事項 .....                                              | 3-16        |
| その他の作業 .....                                                      | 3-18        |
| Oracle Reports Developer .....                                    | 3-18        |
| Oracle Forms Developer .....                                      | 3-19        |
| <b>コンポーネントの起動 .....</b>                                           | <b>3-20</b> |
| Oracle10g JDeveloper および Oracle Business Intelligence Beans ..... | 3-20        |
| Oracle Reports Developer .....                                    | 3-20        |

|                                                        |      |
|--------------------------------------------------------|------|
| Oracle Forms Developer .....                           | 3-21 |
| Oracle Designer .....                                  | 3-21 |
| <b>4 アンインストールと再インストール</b>                              |      |
| アンインストール .....                                         | 4-2  |
| インストーラを使用したアンインストール手順 .....                            | 4-2  |
| 再インストール .....                                          | 4-4  |
| <b>A アップグレードに関する注意</b>                                 |      |
| Oracle Developer Suite .....                           | A-2  |
| Oracle10g JDeveloper .....                             | A-2  |
| リリース 9.0.2 からリリース 10.1.2 への JDeveloper ユーザー設定の移行 ..... | A-2  |
| 移行に関するその他の注意事項 .....                                   | A-3  |
| Oracle Business Intelligence Beans .....               | A-3  |
| Oracle Reports Developer .....                         | A-3  |
| Oracle Business Intelligence Discoverer .....          | A-4  |
| Oracle Forms Developer .....                           | A-4  |
| Oracle SCM Repository .....                            | A-4  |
| その他のドキュメント .....                                       | A-4  |
| <b>B コンポーネント</b>                                       |      |
| Oracle10g JDeveloper .....                             | B-2  |
| 対応するデプロイ環境 .....                                       | B-2  |
| Oracle Business Intelligence Beans .....               | B-3  |
| UIX .....                                              | B-4  |
| Bali .....                                             | B-4  |
| Oracle Reports Developer .....                         | B-4  |
| Oracle Business Intelligence Tools .....               | B-4  |
| Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件 .....     | B-5  |
| 最新の OLAP パッチのダウンロード .....                              | B-5  |
| Oracle Forms Developer .....                           | B-5  |
| その他のドキュメント .....                                       | B-6  |
| オラクルの Web サイト .....                                    | B-6  |
| <b>C ドキュメント・ライブラリのインストール</b>                           |      |
| ドキュメント・ライブラリのタイトル .....                                | C-2  |
| ドキュメント・ライブラリのインストール .....                              | C-3  |
| ファイルをコピーするインストール方法 .....                               | C-3  |
| インストーラを使用する方法 .....                                    | C-4  |
| ドキュメント・ライブラリの表示 .....                                  | C-5  |
| ディスクからのリリース・ノートを表示 .....                               | C-5  |
| <b>D サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール</b>               |      |
| 概要 .....                                               | D-2  |
| サイレント・インストール .....                                     | D-2  |
| 非インタラクティブ・インストール .....                                 | D-2  |

|                                                          |     |
|----------------------------------------------------------|-----|
| 要件 .....                                                 | D-2 |
| インストールの準備 .....                                          | D-2 |
| レスポンス・ファイルの操作 .....                                      | D-3 |
| Oracle Developer Suite のインストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプル ..... | D-4 |
| 完全インストール (Windows) .....                                 | D-4 |
| 完全インストール (Linux および Solaris) .....                       | D-4 |
| インストールの開始 .....                                          | D-5 |
| サイレント・インストールでのインストーラの起動 .....                            | D-5 |
| 非インタラクティブ・インストールでのインストーラの起動 .....                        | D-5 |
| インストール完了後の作業 .....                                       | D-6 |

## E 既存の BI Beans プロジェクトの移行

|                                                               |      |
|---------------------------------------------------------------|------|
| Oracle OLAP インスタンスの移行 (オプション) .....                           | E-2  |
| BI Beans カタログの移行 .....                                        | E-2  |
| Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 への移行の追加手順 ..... | E-2  |
| 旧リリースからのユーザー設定の移行 .....                                       | E-3  |
| BI Beans 作業領域の移行 .....                                        | E-3  |
| BI Beans JSP アプリケーションの手動による移行手順 .....                         | E-4  |
| ネームスペースの更新 .....                                              | E-4  |
| 新規の BI JSP タグ機能へのアクセス .....                                   | E-4  |
| <body> タグの更新 .....                                            | E-5  |
| プレゼンテーションにアクセスするコードの更新 .....                                  | E-5  |
| SaveButton JSP タグの更新 .....                                    | E-6  |
| BI Beans UIX アプリケーションの手動による移行手順 .....                         | E-6  |
| イメージのパスの更新 .....                                              | E-6  |
| エラー・ページの更新 .....                                              | E-6  |
| 部分ページ・レンダリングのための要素の追加 .....                                   | E-7  |
| dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加 .....                               | E-7  |
| プレゼンテーションにアクセスするコードの更新 .....                                  | E-7  |
| SaveDef UIX タグの更新 .....                                       | E-8  |
| BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動による移行手順 .....             | E-8  |
| グラフ・コード変更 .....                                               | E-8  |
| BI Beans Java サブレット・アプリケーションの手動による移行手順 .....                  | E-8  |
| Cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルをサブレット・アプリケーション用に更新 .....            | E-9  |
| サブレット・アプリケーションのサンプルの参照 .....                                  | E-9  |
| BI Beans カタログの移行後の作業 (オプション) .....                            | E-9  |
| カタログの移行後の作業が有益になる条件 .....                                     | E-9  |
| BIB-9549 メッセージの理由 .....                                       | E-10 |
| 移行後の作業 .....                                                  | E-10 |

## F トラブルシューティング

|                                                                   |     |
|-------------------------------------------------------------------|-----|
| 始める前に .....                                                       | F-2 |
| ハードウェアおよびインストール前の要件の確認 .....                                      | F-2 |
| リリース・ノートの確認 .....                                                 | F-2 |
| インストールに関するトラブルシューティング .....                                       | F-2 |
| Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング ..... | F-3 |
| Configuration Assistant の実行状態の判別 .....                            | F-3 |
| Configuration Assistant のエラーの修正 .....                             | F-4 |

|                                                          |     |
|----------------------------------------------------------|-----|
| 致命的エラーへの対応 .....                                         | F-4 |
| Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明 ..... | F-5 |

## 索引



---

---

# はじめに

このマニュアルは、Windows、Linux および Solaris プラットフォームに Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) をインストールする手順について説明します。

ここで説明する項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

## 対象読者

このマニュアルは、開発者、データベース管理者、および Oracle 製品のインストール作業を担当する方を対象としています。クライアントとサーバーから成るアーキテクチャや両者の関係、データベースの概念についての知識があるものとして解説しています。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## 関連ドキュメント

詳細は、次のドキュメント用メディアを参照してください。

- Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリ
- Start Here CD-ROM にある Oracle Developer Suite プラットフォーム固有のドキュメント、Oracle Developer Suite JP Documentation Library または Oracle Developer Suite の DVD

## 表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

| 規則      | 意味                                                                      |
|---------|-------------------------------------------------------------------------|
| 太字      | 太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。 |
| イタリック   | イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。                                         |
| 固定幅フォント | 固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。    |

# サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

## オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

## 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

## 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

## その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

---

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---



---

## インストールの概要

この章では、Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) のインストール手順の概要を説明します。用途に応じて、いくつかのインストール方法から選択できます。説明する項目は次のとおりです。

- 第 1.1 項「Oracle Developer Suite インストール手順の概要」
- 第 1.2 項「インストール手順について」
- 第 1.3 項「Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて」
- 第 1.4 項「インストール時の新機能」

## 1.1 Oracle Developer Suite インストール手順の概要

Oracle Developer Suite 製品のインストールには、次のようなオプションが用意されています。

- **J2EE Development:** Java、HTML、XML、および SQL を使用した Java 2 Platform Enterprise Edition (J2EE) アプリケーションの開発に必要なコンポーネントがインストールされます。また、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) によるテスト機能も含まれます。Oracle Business Intelligence Beans (「OracleBI Beans」とも呼ばれる) を使用して、ビジネス・インテリジェンスを活用したアプリケーションの拡張が可能になります。
- **完全:** このオプションを選択すると、Oracle Forms Developer、Oracle Designer、Oracle Reports Developer、および Oracle10g JDeveloper がインストールされます。このオプションでは、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) および関連する Oracle Application Server ランタイム・サービス (Oracle Application Server Forms Services と Oracle Application Server Reports Services) がインストールされ、OC4J がテスト用のデフォルトのリスナーとして構成されます。

UNIX の場合は、Oracle10g JDeveloper、Oracle Forms Developer および Oracle Reports Developer のみを使用できます。また、このオプションでは、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) および関連する Oracle Application Server ランタイム・サービス (Oracle Application Server Forms Services と Oracle Application Server Reports Services) がインストールされ、OC4J がテスト用のデフォルトのリスナーとして構成されます。

第 2 章「インストールする前に」では、Oracle Developer Suite に必要なハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。

第 3 章「インストール手順」では、インストール手順について説明します。

付録 B「コンポーネント」では、Oracle Developer Suite の個々のコンポーネントについて説明します。

次に示す 2 つの表に、Oracle Developer Suite のインストール・オプション、および各オプションによってインストールされるコンポーネントを示します (Windows は表 1-1、Linux および Solaris は表 1-2 を参照してください)。

**表 1-1 Oracle Developer Suite のインストール・オプションとコンポーネント (Windows)**

| コンポーネント                                                                                | J2EE Development | 完全 |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------|----|
| Oracle10g JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む) | ○                | ○  |
| Oracle Reports Developer                                                               | ×                | ○  |
| Oracle Forms Developer                                                                 | ×                | ○  |
| Oracle Designer                                                                        | ×                | ○  |

**表 1-2 Oracle Developer Suite のインストール・オプションとコンポーネント (Linux および Solaris)**

| コンポーネント <sup>1</sup>                                                                   | J2EE Development | 完全 |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------|----|
| Oracle10g JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む) | ○                | ○  |
| Oracle Reports                                                                         | ×                | ○  |
| Oracle Forms                                                                           | ×                | ○  |

<sup>1</sup> Oracle Developer Suite の全機能を利用できるように、Linux および Solaris 版には Windows 版のコンポーネントも同梱されています。

## 1.2 インストール手順について

Oracle Developer Suite のインストール手順は、次の 3 段階に分かれています。

- **インストールの準備**: Oracle Developer Suite をインストールする前の準備作業を行い、Oracle Universal Installer を起動してインストールを開始します。詳細は、[第 2.8 項「インストールの準備」](#) および [第 2.10 項「インストーラを起動する前の準備」](#) を参照してください。
- **インストール**: インストーラの指示に従って、Oracle Developer Suite をインストールします。詳細は、[第 3 章「インストール手順」](#) を参照してください。
- **インストール後**: Oracle Developer Suite のインストール後に必要な作業と構成を行います。詳細は、[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#) を参照してください。

---

**注意:** 旧バージョンから移行またはアップグレードする場合は、インストールを開始する前に必ず [付録 A「アップグレードに関する注意」](#) をお読みください。

---

## 1.3 Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて

Oracle Universal Installer によって、Oracle Developer Suite のコンポーネントがデフォルトの構成値でインストールされます。また、ローカルまたはリモート・サーバー製品にアクセスするために必要な、基本的なネットワーク要素も構成されます。

Oracle Developer Suite をインストールすれば、アプリケーションを実行またはテストするために、Oracle Application Server (OracleAS) を別にインストールする必要はありません。選択したインストール・オプションによっては、Oracle Developer Suite をインストールすると、関連する OracleAS ランタイム・サービス (OC4J、Oracle Application Server Forms Services および Oracle Application Server Reports Services) がアプリケーションのテスト用にインストールされます。ただし、実際のデプロイ環境においても、アプリケーションをテストすることをお勧めします。

一部の Oracle Developer Suite コンポーネント機能を使用するには、特定の OracleAS コンポーネントが必要です。各コンポーネントの要件の詳細は、[付録 B「コンポーネント」](#) で該当するコンポーネントの章を参照してください。

インストール中に、Oracle ホームの名前とパスを指定するように指示されます。1 つの Oracle ホーム・ディレクトリに複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法については、[第 2.6 項「1 つの Oracle ホームでの共存」](#) を参照してください。

### 1.3.1 他のリリースとの互換性

Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、次の製品の 10.1.2.0.2 バージョンのみ、同じ ORACLE\_HOME にインストールできます。

- Oracle Application Server
- Oracle Developer Suite
- Oracle Business Intelligence
- Oracle Business Intelligence Tools
- Oracle Application Server Forms and Reports Services

## 1.4 インストール時の新機能

この項では、インストール時の新機能について説明します。

この製品の新機能の一覧は、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology/products/ids/>) をご覧ください。

説明する項目は次のとおりです。

- [第 1.4.1 項「DVD からのインストール」](#)
- [第 1.4.2 項「Solaris 8 および 9 のサポート」](#)
- [第 1.4.3 項「オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ」](#)
- [第 1.4.4 項「インストール時の /var/tmp 領域の不要化（Linux および Solaris のみ）」](#)
- [第 1.4.5 項「前提条件の確認項目の追加」](#)
- [第 1.4.6 項「Configuration Assistant の機能拡張」](#)
- [第 1.4.7 項「制限事項の廃止」](#)

### 1.4.1 DVD からのインストール

Oracle Developer Suite と Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリは、DVD-ROM ディスクにも用意しました。また、従来の CD-ROM ディスクも利用できます。DVD ディスクを使用すると、CD-ROM ディスクのようにインストールの途中でディスクを交換する必要がなくなります。

### 1.4.2 Solaris 8 および 9 のサポート

Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、Solaris 8 (2.8) および Solaris 9 (2.9) で実行できることが保証されています。

Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、以前のバージョンの Solaris オペレーティング・システムをサポートしません。

### 1.4.3 オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ

Oracle Developer Suite には、Java SDK 1.4.2 が含まれています。

これらの新バージョンの Java SDK には、サポート対象のオペレーティング・システム用に、パッチの追加または更新が必要になる場合があります。必要なパッチの一覧は、[第 2.3 項「オペレーティング・システムのソフトウェア要件」](#)を参照してください。

### 1.4.4 インストール時の /var/tmp 領域の不要化（Linux および Solaris のみ）

Linux および Solaris 版の Oracle Developer Suite では、インストール時に /var/tmp ディレクトリのディスク領域は不要です。一部のコンポーネントでは、実行時に /var/tmp に書き込む場合があります。

### 1.4.5 前提条件の確認項目の追加

Oracle Developer Suite のインストーラでは、コンピュータが最低限の要件を確実に満たしていることを確認するために、従来に比べてより多くの前提条件の確認が実行されます。確認項目の一覧は、[第 2.10.2 項「インストーラによる前提条件の確認」](#)を参照してください。

## 1.4.6 Configuration Assistant の機能拡張

Configuration Assistant の新機能は次のとおりです。

- ログ・ファイルが中央の 1 箇所に書き込まれるようになりました。
- ログ・ファイルに書き込まれるメッセージが、従来よりわかりやすくなりました。

これらの機能の詳細は、[第 E.3 項「Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング」](#)を参照してください。

## 1.4.7 制限事項の廃止

Oracle Developer Suite に存在した制限事項がいくつか廃止され、次のようになりました。

- サイレント・インストールや非インタラクティブ・インストールで X Window が不要になりました。X Window はインタラクティブ・インストールには必要です (Linux および Solaris のみ)。



---

## インストールする前に

この章では、Oracle Developer Suite および Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリのハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 第 2.1 項「ハードウェア要件」
- 第 2.2 項「サポートされるオペレーティング・システム」
- 第 2.3 項「オペレーティング・システムのソフトウェア要件」
- 第 2.4 項「認定ソフトウェア」
- 第 2.5 項「オンライン・ドキュメンテーションの要件」
- 第 2.6 項「1 つの Oracle ホームでの共存」
- 第 2.7 項「インストーラによって使用されるディレクトリ」
- 第 2.8 項「インストールの準備」
- 第 2.9 項「コンポーネント固有のインストールの準備作業」
- 第 2.10 項「インストーラを起動する前の準備」

## 2.1 ハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle Developer Suite の基本的なハードウェア要件を示します。

**表 2-1 Oracle Developer Suite のハードウェア要件**

| ハードウェア構成要素                                | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| CPU                                       | 次のいずれか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Pentium またはその互換プロセッサ（500 MHz 以上を推奨）</li> <li>■ SPARC プロセッサ（200 MHz 以上を推奨）</li> </ul>                                                                                                                               |
| メモリー領域                                    | 128 MB <sup>1</sup>                                                                                                                                                                                                                                                 |
| ディスク領域 <sup>2</sup>                       | J2EE Development <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows: 508 MB</li> <li>■ Solaris: 528 MB</li> <li>■ Linux: 700 MB</li> </ul> 完全 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows: 943 MB</li> <li>■ Solaris: 865 MB</li> <li>■ Linux: 920 MB</li> </ul> |
| ページファイル・サイズ、TMP、またはスワップ領域の合計 <sup>3</sup> | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows: 384 MB</li> <li>■ Linux および Solaris: 500 MB</li> </ul>                                                                                                                                                            |
| ディスプレイ                                    | 256 色以上の表示が可能であること。                                                                                                                                                                                                                                                 |

<sup>1</sup> インストールに必要な最小のメモリー領域です。Oracle Developer Suite のコンポーネントをすべてインストールする場合は、これ以上のメモリー領域が必要です。各コンポーネントに必要なメモリー領域については、表 2-2 を参照してください。

<sup>2</sup> 英語のみのインストールに必要なディスク領域です。実際に必要なディスク領域は、インストール時に選択した言語によります。ただしその場合、通常は C ドライブに、さらに 50 MB の一時ディスク領域が必要になります。

<sup>3</sup> マルチユーザーの Linux または Solaris 環境で Oracle JDeveloper 10g を使用する場合は、1 GB のスワップ領域を使用してください。

表 2-2 に、Oracle Developer Suite の各コンポーネントに必要なメモリー領域を示します。

**表 2-2 Oracle Developer Suite のコンポーネントに必要なメモリー領域**

| コンポーネント                                                                               | メモリー領域                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle10g JDeveloper（Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む） | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最小：256 MB</li> <li>■ 推奨：512 MB</li> </ul> |
| Oracle Reports Developer                                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最小：128 MB</li> <li>■ 推奨：256 MB</li> </ul> |
| Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最小：128 MB</li> <li>■ 推奨：256 MB</li> </ul> |
| Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop                                       | 128 MB                                                                             |
| Oracle Forms Developer                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最小：128 MB</li> <li>■ 推奨：256 MB</li> </ul> |
| Oracle Designer                                                                       | 256 MB                                                                             |

## 2.2 サポートされるオペレーティング・システム

Oracle Developer Suite は、Microsoft Windows 2000/XP Professional、Sun Solaris、および Linux x86 の各オペレーティング・システムで使用できます。表 2-3 に、オペレーティング・システムと、各オペレーティング・システムにおいてサポートされる Oracle Developer Suite コンポーネントを示します。

**注意：** このドキュメントでは、「Linux」は Linux x86 オペレーティング・システムを指します。

表 2-3 オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント

| コンポーネント                                                                                                                                               | 2000/XP Professional | Solaris | Linux |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|---------|-------|
| Oracle10g JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む)                                                                | ○                    | ○       | ○     |
| Oracle Reports Developer                                                                                                                              | ○                    | ○       | ○     |
| Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当)、Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop を含む | ○                    | ×       | ×     |
| Oracle Forms Developer                                                                                                                                | ○                    | ○       | ○     |
| Oracle Designer                                                                                                                                       | ○                    | ×       | ×     |

Linux および Solaris に関する注意：

- JDeveloper では、次の Linux および Solaris デスクトップが動作確認されています。
  - Solaris/CDE
  - Linux/GNOME
  - Linux/KDE2

## 2.3 オペレーティング・システムのソフトウェア要件

この項では、Windows、Linux および Solaris の各オペレーティング・システム要件について説明します。

### 2.3.1 Windows オペレーティング・システム

表 2-4 に、Windows オペレーティング・システムに Oracle Developer Suite をインストールするためのソフトウェア要件を示します。

表 2-4 Oracle Developer Suite の Windows ソフトウェア要件

| ソフトウェア構成要素            | 要件                                                                                                                                                                  |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Windows オペレーティング・システム | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Microsoft Windows 2000 Service Pack 3 以降</li> <li>■ Microsoft Windows XP Professional Edition Service Pack 2 以降</li> </ul> |

**注意：** Windows の新しいバージョンでは、**C** 以外のドライブをシステム・ドライブとして使用できます。このマニュアルでは、システム・ドライブを「デフォルトのシステム・ドライブ」と記載しています。そのため、デフォルトのシステム・ドライブには **C** 以外のドライブも使用できます。

ただし、このマニュアルに含まれるほとんどの例では、デフォルトのシステム・ドライブに **C** が使用されています。

## 2.3.2 Sun SPARC ワークステーション用の Solaris オペレーティング・システム

Sun SPARC ワークステーションで実行される Solaris に Oracle Developer Suite をインストールする場合は、Solaris 8 (2.8) または Solaris 9 (2.9) のいずれかである必要があります。表 2-5 に、Oracle Developer Suite をインストールするための Solaris のパッチセット要件を示します。パッチは次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/J2SE>

**注意：** Solaris で実行される Oracle10g JDeveloper には、CDE Windows Manager が必要です。

表 2-5 Solaris オペレーティング・システムのパッチセット要件

| ソフトウェア構成要素      | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Solaris 8 (2.8) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 108652-82: X11 6.4.1: Xsun</li> <li>■ 108921-21: CDE 1.4: dtwm</li> <li>■ 108940-62: Motif 1.2.7 および 2.1.1: ランタイム・ライブラリ・パッチ</li> <li>■ 112003-03: 64 ビット Solaris 8 の iso-1 または iso-15 では、フォントセットのロードは不可</li> <li>■ 108773-18: IIIM および X の入出力メソッド</li> <li>■ 112138-01: usr/bin/domainname パッチ</li> <li>■ 111310-01: /usr/lib/libdhcagent.so.1</li> <li>■ 109147-28: リンカー</li> <li>■ 111308-04: /usr/lib/libmtmalloc.so.1</li> <li>■ 112438-03: /kernel/drv/random</li> <li>■ 108434-17: C++ 用の共有ライブラリのパッチ (32 ビット)</li> <li>■ 111111-04: /usr/bin/nawk</li> <li>■ 112396-02: /usr/bin/fgrep</li> <li>■ 110386-03: RBAC 機能</li> <li>■ 111023-03: /kernel/fs/mntfs、/kernel/fs/sparcv9/mntfs</li> <li>■ 108987-13: patchadd および patchrm のパッチ</li> <li>■ 108528-29: カーネルの更新</li> <li>■ 108989-02: /usr/kernel/sys/acctctl、/usr/kernel/sys/exacctsys</li> <li>■ 108993-36: LDAP2 クライアント、libc、libthread および libnsl ライブラリ</li> </ul> |
| Solaris 9 (2.9) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 113096-03: X11 6.6.1: OWconfig</li> <li>■ 112785-35: X11 6.6.1: Xsun</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

表 2-6 に、Oracle Developer Suite をインストールする場合の、Solaris 8 (2.8) および Solaris 9 (2.9) のパッケージの要件を示します。コンピュータにオペレーティング・システムのパッケージがインストールされていることを確認するには、そのパッケージ名を指定して `pkginfo` コマンドを実行します。このコマンドは、記載されているパッケージごとに実行してください。`pkginfo` の構文は次のとおりです。

```
pkginfo package_name
```

次に例を示します。

```
prompt>pkginfo SUNWarc
```

コンピュータにパッケージがインストールされていない場合は、システム管理者に連絡してください。

**表 2-6 Solaris オペレーティング・システムのパッケージ要件**

| ソフトウェア構成要素      | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Solaris 8 (2.8) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SUNWarc</li> <li>■ SUNWbtool</li> <li>■ SUNWhea</li> <li>■ SUNWlibm</li> <li>■ SUNWlibms</li> <li>■ SUNWsprot</li> <li>■ SUNWsprox</li> <li>■ SUNWtoo</li> <li>■ SUNWi1of</li> <li>■ SUNWxwfont</li> <li>■ SUNWi1cs</li> <li>■ SUNWi15cs</li> </ul> |
| Solaris 9 (2.9) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SUNWarc</li> <li>■ SUNWbtool</li> <li>■ SUNWhea</li> <li>■ SUNWlibm</li> <li>■ SUNWlibms</li> <li>■ SUNWsprot</li> <li>■ SUNWsprox</li> <li>■ SUNWtoo</li> <li>■ SUNWi1of</li> <li>■ SUNWxwfont</li> <li>■ SUNWi1cs</li> <li>■ SUNWi15cs</li> </ul> |

### 2.3.3 Linux オペレーティング・システム

Linux のソフトウェア要件を確認するには、お使いの Linux ディストリビューションに応じて、次の該当する項を参照してください。

- 第 2.3.3.1 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件」
- 第 2.3.3.2 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件」
- 第 2.3.3.3 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件」
- 第 2.3.3.4 項「SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件」
- 第 2.3.3.5 項「SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件」

カスタマイズされたカーネルや、Linux ベンダーでサポートされていないモジュールはサポートされません。

Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、ネットワーク接続されていない Linux システムにもインストールできます。

### 2.3.3.1 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件

表 2-7 に、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件を示します。また、表の後には、これらのシステム要件を満たす手順と、Oracle Developer Suite をインストールするために他の要件が必要になる場合はその要件を満たす手順も説明します。

**注意：** Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアで動作確認されています。JDK バージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされるオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新情報については、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

表 2-7 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件

| 項目                                                        | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オペレーティング・システム                                             | Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1<br>Red Hat の詳細は、次を参照してください。<br><a href="http://www.redhat.com">http://www.redhat.com</a>                                                                                                                                                                                                                              |
| Red Hat Update                                            | Update 5                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| Red Hat のパッチ                                              | errata 49 カーネルまたはそれ以上の Red Hat で承認されている errata パッチ<br>たとえば、Red Hat インストールのタイプに応じて次のいずれかを適用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-2.4.9-e.49</li> <li>■ kernel-smp-2.4.9-e.49</li> <li>■ kernel-enterprise-2.4.9-e.49</li> </ul>                                                                                                           |
| ソフトウェア・パッケージ<br>(これらのバージョンまたはそれ以上のバージョンがインストールされていることを確認) | glibc-2.2.4-32.17<br>glibc-common-2.2.4-32.17<br>gcc-2.96-128.7.2<br>gcc-c++-2.96-128.7.2<br>pdksh-5.2.14-22<br>openmotif-2.1.30-12<br>sysstat-4.0.1-15.2.1as<br>compat-glibc-6.2-2.1.3.2<br>compat-libstdc++-6.2-2.9.0.16<br>libstdc++-2.96-128.7.2<br>gnome-libs-1.2.13-16<br>binutils-2.11.90.0.8-12.4<br>make-3.79.1-8<br>db1-1.85-7<br>db3-3.3.11-5 |

システムがすべての要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Red Hat Linux Advanced Server release 2.1AS/¥m (Pensacola)
```

---

**注意：** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、4.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

---

3. Update 5 がインストールされていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/redhat-release
Red Hat Linux Advanced Server release 2.1AS/¥m (Pensacola Update 5)
```

Update 5 がインストールされている場合は、errata 49 とすべての必要なソフトウェア・パッケージがインストールされています。

4. インストールされている Linux カーネルのバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
kernel-smp-2.4.9-e.49
```

この例では、バージョンが 2.4.9、errata が 49 であることを示しています。カーネルのアップグレードの詳細は、必要に応じて、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

Red Hat のパッチの詳細は、次を参照してください。

<http://www.redhat.com>

5. インストールされているその他のパッケージを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージをダウンロードしてインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージのインストール時には、正しいアーキテクチャと最適化 rpm ファイルを使用してください。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}¥n"
```

次の例は、glibc rpm ファイルが Intel アーキテクチャに適していることを示しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}¥n"
i686
```

### 2.3.3.2 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

表 2-8 に、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件を示します。また、表の後には、これらのシステム要件を満たす手順と、Oracle Developer Suite をインストールするために他の要件が必要になる場合はその要件を満たす手順も説明します。

---

**注意：** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、4.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

---

表 2-8 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

| 項目                                                        | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オペレーティング・システム                                             | <p>Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0</p> <p>Red Hat の詳細は、次を参照してください。</p> <p><a href="http://www.redhat.com">http://www.redhat.com</a></p> <p>サポートされるカーネルの最小バージョンは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-2.4.21-20.EL</li> <li>■ kernel-smp-2.4.21-20.EL</li> <li>■ kernel-hugemem-2.4.21-20.EL</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| Red Hat Update                                            | Update 3                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| ソフトウェア・パッケージ<br>(これらのバージョンまたはそれ以上のバージョンがインストールされていることを確認) | <p>glibc-2.3.2-95.27</p> <p>glibc-common-2.3.2-95.27</p> <p>binutils-2.14.90.0.4-35</p> <p>compat-glibc-7.x-2.2.4.32.6</p> <p>compat-libstdc++-7.3-2.96.128</p> <p>compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128</p> <p>gcc-3.2.3-42</p> <p>gcc-c++-3.2.3-42</p> <p>libstdc++-3.2.3-42</p> <p>libstdc++-devel-3.2.3-42</p> <p>openmotif21-2.1.30-8</p> <p>pdksh-5.2.14-21</p> <p>setarch-1.3-1</p> <p>make-3.79.1-17</p> <p>gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1</p> <p>sysstat-4.0.7-4.EL3.3</p> <p>compat-dlb-4.0.14-5</p> <p><b>注意:</b> Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 の場合、openmotif 2.1.30-8 に相当するバージョンは openmotif21-2.1.30-8 です。openmotif21-2.1.30-8 パッケージを Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 ディストリビューションのディスク 3 からインストールするには、次のコマンドを入力します。</p> <p>\$ rpm -ivh openmotif21-2.1.30-8</p> |

システムがすべての要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon)
```

---

**注意:** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、Oracle *MetaLink* (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

---

3. Update 3 がインストールされていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/redhat-release
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 3)
```

4. インストールされているその他のパッケージを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージをダウンロードしてインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージのインストール時には、正しいアーキテクチャと最適化 rpm ファイルを使用してください。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}\n"
```

次の例は、glibc rpm ファイルが Intel アーキテクチャに適していることを示しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}\n"
i686
```

5. hugemem カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
prompt> setarch i386
```

### 2.3.3.3 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件

Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 のソフトウェア要件を示します。また、表の後には、これらのシステム要件を満たす手順と、Oracle Application Server をインストールするために他の要件が必要になる場合はその要件を満たす手順も説明します。

---

---

**注意：** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、4.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com/>) で確認してください。

---

---

表 2-9 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件

| 項目             | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オペレーティング・システム  | <p>Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0</p> <p>Red Hat の詳細は、<a href="http://www.redhat.com">http://www.redhat.com</a> を参照してください。</p> <p>サポートされるカーネルの最小バージョンは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-2.6.9-11.EL</li> <li>■ kernel-smp-2.6.9-11.EL</li> <li>■ kernel-hugemem-2.6.9-11.EL</li> </ul> |
| Red Hat Update | Update 1                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

表 2-9 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件（続き）

| 項目                                                    | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ソフトウェア・パッケージ（これらのバージョンまたはそれ以上のバージョンがインストールされていることを確認） | glibc-2.3.4-2.9<br>glibc-common-2.3.4-2.9<br>binutils-2.15.92.0.2-13<br>compat-libstdc++-296-2.96-132.7.2<br>gcc-3.4.3-22.1<br>gcc-c++-3.4.3-22.1<br>libstdc++-3.4.3-22.1<br>libstdc++-devel-3.4.3-22.1<br>openmotif21-2.1.30-11.RHEL4.4<br>pdksh-5.2.14-30<br>setarch-1.6-1<br>make-3.80-5<br>gnome-libs-1.4.1.2.90-44.1<br>sysstat-5.0.5-1<br>compat-db-4.1.25-9<br>control-center-2.8.0-12<br>xscreensaver-4.18-5.rhel4.2 |
| 64 ビットの動作保証                                           | AMD64 および Intel EM64T における Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0（64 ビット）の動作保証の最新情報については、Oracle <i>MetaLink</i> （ <a href="http://metalink.oracle.com/">http://metalink.oracle.com/</a> ）で確認してください。                                                                                                                                                                                                                              |

システムがすべての要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Red Hat Enterprise Linux AS release 4 (Nahant Update 1)
```

3. Update 1 がインストールされていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/redhat-release
Red Hat Enterprise Linux AS release 4 (Nahant Update 1)
```

4. インストールされているその他のパッケージを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージをダウンロードしてインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージのインストール時には、正しいアーキテクチャと最適化 rpm ファイルを使用してください。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例は、glibc rpm ファイルが Intel アーキテクチャに適していることを示しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}¥n"
i686
```

5. hugemem カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
prompt> setarch i386
```

### 2.3.3.4 SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件

表 2-10 に、SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件を示します。また、表の後には、これらのシステム要件を満たす手順と、Oracle Developer Suite をインストールするために他の要件が必要になる場合はその要件を満たす手順も説明します。

---

**注意：** Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアで動作確認されています。JDK バージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされるオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新情報については、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

---

表 2-10 SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件

| 項目                                                        | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オペレーティング・システム                                             | <p>SUSE Linux Enterprise Server 8</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server の詳細は、次を参照してください。</p> <p><a href="http://www.suse.com/">http://www.suse.com/</a></p> <p>SP3 は、Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) で動作保証されています。</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server 8 SP3 の場合、サポートされるカーネルの最小バージョンは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ k_smp-2.4.21-138</li> <li>■ k_deflt-2.4.21-138</li> <li>■ k_psmp-2.4.21-138</li> </ul> |
| ソフトウェア・パッケージ<br>(これらのバージョンまたはそれ以上のバージョンがインストールされていることを確認) | <p>glibc-2.2.2-124</p> <p>gcc-3.2.2-38</p> <p>gcc-c++-3.2.2-38</p> <p>pdcksh-5.2.14</p> <p>openmotif-2.1.30MLI4</p> <p>sysstat-4.0.3</p> <p>libstdc++-3.2.2</p> <p>make-3.79.1-407</p> <p>binutils-2.12.90.0.15-50</p> <p>compat-2003.1.10-0</p>                                                                                                                                                                                               |

システムがすべての要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to SUSE Linux Enterprise Server 8 (i586) - Kernel ¥r (¥l)
```

---

**注意：** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

---

3. サービス・パックのバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
k_smp-2.4.21-138
```

カーネルのバージョンに 2.4.21 の文字列が含まれている場合、SP3 はインストールされています。SP3 は、Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) で動作保証されています。

4. インストールされているその他のパッケージを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージをダウンロードしてインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージのインストール時には、正しいアーキテクチャと最適化 rpm ファイルを使用してください。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例は、glibc rpm ファイルが Intel アーキテクチャに適していることを示しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"
i686
```

5. 次の Perl 実行可能ファイルのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. 次の fuser 実行可能ファイルのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. orarun パッケージが SUSE Linux Enterprise Server システムにインストールされている場合は、次の手順を oracle として実行して環境をリセットします。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /etc/profile.d
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. 任意のテキスト・エディタを使用して、\$HOME/.profile ファイルの次の行をコメント・アウトします。

```
. ./oracle
```

- c. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。

- d. oracle ユーザー・アカウントにログインして変更を反映させます。

8. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、JAVA\_HOME などの Java の環境変数を設定解除します。

---

**注意：** SUSE Linux Enterprise Server のディストリビューションで提供されている Java パッケージは、インストールしないことをお勧めします。

---

### 2.3.3.5 SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件

表 2-11 に、SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件を示します。また、表の後には、これらのシステム要件を満たす手順と、Oracle Developer Suite をインストールするために他の要件が必要になる場合はその要件を満たす手順も説明します。

---

**注意：** Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアで動作確認されています。JDK バージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされるオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新情報については、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com/>) で確認してください。

---

**表 2-11 SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件**

| 項目                                                        | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オペレーティング・システム                                             | <p>SUSE Linux Enterprise Server 9</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server の詳細は、次を参照してください。</p> <p><a href="http://www.suse.com/">http://www.suse.com/</a></p> <p>SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合、サポートされるカーネルの最小バージョンは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-bigsmp-2.6.5-7.97</li> <li>■ kernel-default-2.6.5-7.97</li> <li>■ kernel-smp-2.6.5-7.97</li> </ul>                                    |
| ソフトウェア・パッケージ<br>(これらのバージョンまたはそれ以上のバージョンがインストールされていることを確認) | <p>glibc-2.3.3-98.28</p> <p>gcc-3.3.3-43.24</p> <p>gcc-c++-3.3.3-43.24</p> <p>libstdc++-3.3.3-43.24</p> <p>libstdc++-devel-3.3.3-43.24</p> <p>openmotif21-libs-2.1.30MLI4-119.1</p> <p>pdksh-5.2.14-780.1</p> <p>make-3.80-184.1</p> <p>gnome-libs-1.4.1.7-671.1</p> <p>gnome-libs-devel-1.4.1.7-671.1</p> <p>sysstat-5.0.1-35.1</p> <p>binutils-2.15.90.0.1.1-32.5</p> <p>db1-1.85-85.1</p> <p>compat-2004.7.1-1.2</p> |

システムがすべての要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to SuSE Linux 9.0 (i686) - Kernel 2.6.5-7.97
```

---

**注意：** Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、3.0、および SUSE Linux Enterprise Server 8、9 は、動作保証およびサポートされています。サポートされる Linux オペレーティング・システムの最新情報については、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com/>) で確認してください。

---

3. カーネルのバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
kernel-bigsmpt-2.6.5-7.97
```

4. インストールされているその他のパッケージを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用してパッケージをダウンロードしてインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージのインストール時には、正しいアーキテクチャと最適化 rpm ファイルを使用してください。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例は、glibc rpm ファイルが Intel アーキテクチャに適していることを示しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"
i686
```

5. 次の Perl 実行可能ファイルのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. 次の fuser 実行可能ファイルのシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. orarun パッケージが SUSE Linux Enterprise Server システムにインストールされている場合は、次の手順を oracle として実行して環境をリセットします。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /etc/profile.d
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. 任意のテキスト・エディタを使用して、\$HOME/.profile ファイルの次の行をコメント・アウトします。

```
. ./oracle
```

- c. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。

- d. oracle ユーザー・アカウントにログインして変更を反映させます。

8. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、JAVA\_HOME などの Java の環境変数を設定解除します。

---

**注意：** SUSE Linux Enterprise Server のディストリビューションで提供されている Java パッケージは、インストールしないことをお勧めします。

---

## 2.4 認定ソフトウェア

Oracle Developer Suite 用認定ソフトウェアの一覧は、次の [OracleMetaLink](http://metalink.oracle.com/) サイトから入手できます。

<http://metalink.oracle.com/>

## 2.5 オンライン・ドキュメンテーションの要件

Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリには、HTML および Adobe PDF 形式のオンライン・マニュアルが含まれています。ドキュメント・ライブラリのコンテンツのインストールおよび表示手順については、[付録 C「ドキュメント・ライブラリのインストール」](#)を参照してください。

[表 2-12](#) に、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリのツールおよびディスク領域要件を示します。

表 2-12 オンライン・ドキュメンテーションの要件

| 項目         | 要件                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| オンライン・リーダー | 次のいずれかのソフトウェア<br>HTML <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Netscape 7.2</li> <li>■ Microsoft Internet Explorer 6.0 SP 2</li> <li>■ Mozilla 1.7</li> <li>■ Firefox 1.0.4</li> <li>■ Safari 1.2</li> </ul> PDF <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Acrobat Reader 3.0 以上</li> <li>■ Acrobat Reader+Search 3.0 以上</li> <li>■ Acrobat Exchange 3.0 以上</li> <li>■ PDFViewer Web ブラウザ・プラグイン 1.0 以上</li> </ul> |
| ディスクの空き容量  | 130 MB                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

## 2.6 1 つの Oracle ホームでの共存

この項では、1 つの Oracle ホームに複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法について説明します。

### 2.6.1 Oracle ホームに関する注意事項

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアのインストール先となる最上位ディレクトリです。

- Oracle Developer Suite は、旧バージョン（Oracle Developer Suite 10g（9.0.4）、Oracle9iDS リリース 2（9.0.2）または Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.x）とは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite は、Oracle Database 10g などの Oracle データベースとは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite は、Oracle Application Server Forms and Reports Services 10g のスタンドアロン・サーバー・インスタンスとは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite は、Oracle Application Server 10g リリース 2（10.1.2）（Oracle Application Server Infrastructure を除く）と同じ Oracle ホームに共存できます。

---

**注意：** 前述のバージョン以外の Oracle Application Server には、この注意事項は該当しません。

---

- **Linux および Solaris のみ：** Oracle Developer Suite をインストールしようとしているコンピュータに、すでに Oracle ホームが設定されている場合は、[第 2.8.5.1.1 項「他の Oracle ホームとの競合回避」](#)を参照してください。

このマニュアルで記載されているディレクトリ・パスには、実際の Developer Suite ディレクトリへのパスを表すプレースホルダ・テキスト DevSuiteHome が含まれています。

---

**注意：** Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) と Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) を同じ Oracle ホームにインストールする場合は、ORACLE\_HOME¥j2ee¥home からポート 8888 を使用して Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) を起動しないでください。このようにして起動すると、OC4J インスタンスは失敗します。

---

## 2.6.2 Oracle Developer Suite の複数インストールの実行

Oracle Developer Suite の複数のインスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、次のガイドラインに従ってください。また、Oracle9iDS または Oracle Internet Developer Suite がすでにインストールされているコンピュータに、Oracle Developer Suite をインストールする場合も、このガイドラインが適用されます。

1. Oracle Developer Suite を初めてインストールした後は、コンピュータを再起動してください。
2. すべてのインストールに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、[表 2-1](#) を参照してください。
3. 後からインストールするインスタンスは、その前のインスタンスとは異なる Oracle ホームにインストールします。
4. 最後のインストールが終わったら、コンピュータを再起動します (Windows のみ)。

## 2.6.3 Oracle Developer Suite のインストールと Oracle データベース

---

**注意：** Oracle Developer Suite は、Oracle データベースと同じ Oracle ホームにインストールできません。

---

Oracle Developer Suite をインストールするコンピュータに、すでに Oracle データベースがインストールされている場合、または後から Oracle データベースをインストールする予定がある場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 両方のインストールに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、該当する Oracle データベースのインストレーション・ガイドと、このガイドの[表 2-1](#)を参照してください。
- **Windows のみ：** Oracle データベースをまだインストールしていない場合は、Oracle データベースを先にインストールし、データベースのインストールが完了したらそのコンピュータを再起動します。
- Oracle Developer Suite は、Oracle データベースと異なる Oracle ホームにインストールします。
- **Windows のみ：** Oracle Developer Suite をインストールした後、コンピュータを再起動します。

## 2.7 インストーラによって使用されるディレクトリ

インストーラは次のディレクトリにファイルを書き込みます。

表 2-13 インストーラによって使用されるディレクトリ

| ディレクトリ                                                      | 説明                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle ホーム・ディレクトリ                                           | このディレクトリには、Oracle Developer Suite のファイルが格納されています。このディレクトリは、Oracle Developer Suite のインストール時に指定します。詳細は、 <a href="#">第 2.6.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」</a> を参照してください。                                      |
| インベントリ・ディレクトリ                                               | インストーラでは、このディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされている Oracle 製品が追跡されます。2 回目以降のインストールでは、同じインベントリ・ディレクトリが使用されます。詳細は、 <a href="#">第 2.10.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」</a> を参照してください。                                  |
| Linux および Solaris のみ：<br>/var/opt/oracle または<br>/etc ディレクトリ | このディレクトリには、使用している Linux または Solaris コンピュータの Oracle ホームの場所に関する情報が格納されています。詳細は、 <a href="#">第 2.10.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」</a> を参照してください。 <b>注意：</b> Windows コンピュータでは、この情報は Windows レジストリに格納されています。 |
| Linux および Solaris のみ：<br>/tmp ディレクトリ                        | インストーラは、インストール時にのみ必要なファイルを、一時ディレクトリに書き込みます。デフォルトでは、一時ディレクトリは /tmp です。他のディレクトリを指定するには、TMP 環境変数を設定します。                                                                                                |
| Windows のみ：<br>一時ディレクトリ                                     | インストーラは、インストール時にのみ必要なファイルを、一時ディレクトリに書き込みます。これには、%TEMP% システム環境変数で指定したディレクトリが使用されます。                                                                                                                  |

## 2.8 インストールの準備

Oracle Developer Suite をインストールする前に、Oracle Developer Suite のリリース・ノートをお読みください。このリリース・ノートは、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにあります。リリース・ノートを表示する方法については、[第 C.3.1 項「ディスクからのリリース・ノートの表示」](#)を参照してください。最新のリリース・ノートおよびリリース・ノートの補足は、次の Oracle Technology Network サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/products/ids/>

Oracle Developer Suite をインストールする前に、次の準備作業を行います。

- 全般的なチェックリスト
- ロケールの設定
- ユーザー補助機能の使用 (Windows のみ)
- Java Access Bridge のインストール (Windows のみ)
- 環境変数の設定 (Linux および Solaris のみ)
- Linux および Solaris のアカウントおよびグループの作成
- インストール中に必要な情報
- 移行またはアップグレード

## 2.8.1 全般的なチェックリスト

全般的な作業：

- Windows 2000 または XP Professional を使用している場合は、Administrators グループのメンバーとしてコンピュータにログインしてください。
- Linux または Solaris の場合、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインすると、インストーラを実行できません。詳細は第 2.8.6 項「Linux および Solaris のアカウントおよびグループの作成」を参照してください。
- 環境変数 PATH、CLASSPATH、LD\_LIBRARY\_PATH の値は、1,024 文字以内で指定します。これを超えると、インストール中に「Word too long」というエラーが発生する可能性があります。
- Oracle のサービスおよびプロセスをすべて停止し、その他の実行中のアプリケーションもすべて終了します。

## 2.8.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語には、Java Virtual Machine (JVM) のロケールの設定が反映されます。このロケール設定は、オペレーティング・システムのロケールに基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、Oracle Universal Installer を起動する前にオペレーティング・システムのロケールを設定します。

インストーラは表 2-14 に記載されているロケール言語をサポートしています。

表 2-14 インストーラで表示できる言語

| 言語            | ISO-639 言語コード |
|---------------|---------------|
| 英語            | en            |
| フランス語         | fr            |
| ドイツ語          | de            |
| イタリア語         | it            |
| 日本語           | ja            |
| 韓国語           | ko            |
| ポルトガル語 (ブラジル) | pt_BR         |
| 簡体字中国語        | zh_CN         |
| 繁体字中国語        | zh_TW         |

使用しているロケールがこの表に記載されていない場合は、インストーラは英語で表示されます。

## 2.8.3 ユーザー補助機能の使用 (Windows のみ)

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットを利用する場合は、事前に access\_setup.bat を実行しておいてください。

このファイル access\_setup.bat は、CD-ROM Disk 1 または DVD の次の場所にあります。

| メディア   | ファイルの場所                        |
|--------|--------------------------------|
| CD-ROM | ¥install¥win32                 |
| DVD    | ¥developer_suite¥install¥win32 |

## 2.8.4 Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle Developer Suite をインストールする Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun 社の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

ユーザー補助機能を使用する場合は、次のいずれかの手順を行います。

### ■ コンピュータに JDK/JRE 1.4.2 がインストールされていない場合

インストールを続行します。Oracle Developer Suite のインストール終了後、すべての JDK/JRE 環境に Java Access Bridge 1.2 がインストールされていることを確認します。これで、ユーザー補助機能を必要とするアプリケーションはすべて正しく動作します。

### ■ コンピュータに JDK/JRE 1.4.2 がインストールされている場合

Oracle Developer Suite をインストールする前に、JDK/JRE 1.4.2 のある場所に、Java Access Bridge 1.2 の製品版をインストールする必要があります。

**Java Access Bridge 1.2 をダウンロードしてインストールするには、次の手順を実行します。**

1. Java Access Bridge 1.2 の Zip ファイルを、次の場所からダウンロードします。

<http://java.sun.com/products/accessbridge/>

インストール手順などの詳細は、前述の Web サイトにある Java Access Bridge 関連ドキュメントを参照してください。

2. ダウンロードしたファイルを、accessbridge\_home などのフォルダに展開します。
3. accessbridge\_home¥installer フォルダにある install.exe を実行して、Java Access Bridge をインストールします。  
accessbridge\_home は、前述の手順で作成したフォルダです。
4. ダイアログ・ボックスに表示される各 Java 仮想マシンに、Java Access Bridge をインストールするかどうかを指定します。
5. 「Installation Completed」というメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。

## 2.8.5 環境変数の設定（Linux および Solaris のみ）

次の作業は Linux および Solaris プラットフォームにのみ必要です。

### 2.8.5.1 DevSuiteHome

DevSuiteHome は、Developer Suite がインストールされているディレクトリを示す環境変数（UNIX）またはレジストリ・キー（Windows）です。これは、ORACLE\_HOME と同じです。

#### 2.8.5.1.1 他の Oracle ホームとの競合回避

Oracle Developer Suite のインストール時に、既存の Oracle ホーム内のソフトウェアとの競合を避けるため、環境内の既存の ORACLE\_HOME への参照をすべて削除する必要があります。これらの参照を削除するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、既存の ORACLE\_HOME 変数の設定を解除します。

| C シェル                               | Bourne/Korn シェル                                 |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------|
| prompt> <b>unsetenv ORACLE_HOME</b> | prompt> <b>ORACLE_HOME=; export ORACLE_HOME</b> |

2. PATH、CLASSPATH、および LD\_LIBRARY\_PATH の各環境変数で、環境変数 ORACLE\_HOME への参照をすべて削除します。

### 2.8.5.2 DISPLAY

DISPLAY 環境変数を設定すると、ローカル・コンピュータからインストーラをリモートで実行し、インストーラのユーザー・インタフェースを表示できます。

リモート・コンピュータで、DISPLAY 環境変数にローカル・コンピュータのシステム名または IP アドレスを設定します。

**注意：** PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする場合、PC の X エミュレータを使用してインストールを実行することもできます。PC の X エミュレータで PseudoColor ビジュアルを使用できるように設定してから、インストーラを起動してください。カラー・モデルやビジュアル設定の変更方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

インストーラの起動時に、「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」などの Xlib エラー・メッセージが表示された場合は、ローカル・コンピュータで次のコマンドを実行してください。

| シェル・タイプ            | リモート・コンピュータ                                             | ローカル・コンピュータ                        |
|--------------------|---------------------------------------------------------|------------------------------------|
| C シェル              | prompt> <b>setenv DISPLAY<br/>hostname:0.0</b>          | prompt> <b>xhost + server_name</b> |
| Bourne/Korn<br>シェル | prompt> <b>DISPLAY=hostname:0.0;<br/>export DISPLAY</b> | prompt> <b>xhost + server_name</b> |

### 2.8.5.3 TMP

インストール中、スワップ用に一時ディレクトリが使用されます。インストールを開始する前に、一時ディレクトリが表 2-1 に示したハードウェア要件を満たしていることを確認する必要があります。十分な領域がないと、インストールに失敗することがあります。インストーラによって、TMP 環境変数が参照されて一時ディレクトリの場所が確認されます。この環境変数が設定されていない場合は、/tmp ディレクトリが使用されます。

TMP 環境変数を設定するには、次の手順を実行します。

| C シェル                               | Bourne/Korn シェル                          |
|-------------------------------------|------------------------------------------|
| prompt> <b>setenv TMP full_path</b> | prompt> <b>TMP=full_path; export TMP</b> |

### 2.8.5.4 TNS\_ADMIN

TNS\_ADMIN は、ネットワーク構成ファイルが格納されたディレクトリを指定する環境変数です。

コンピュータの既存のディレクトリに TNS\_ADMIN を設定した場合、そのディレクトリと Oracle Developer Suite のネットワーク構成ファイルが作成されたディレクトリとが競合します。また、構成ファイルが他の Oracle 製品の Oracle ホーム以外の共通ディレクトリ内にある場合も、競合する可能性があります。たとえば、データベースのエイリアス設定用に、/var/opt/oracle/tnsnames.ora を使用する場合があります。

他の Oracle 製品用のネットワーク構成ファイルとの競合を避けるため、既存の TNS\_ADMIN ディレクトリまたは共通ディレクトリにある既存の構成ファイルを、その製品の ORACLE\_HOME/network/admin にコピーし、次のコマンドを使用して TNS\_ADMIN 環境変数の設定を解除します。

| C シェル                             | Bourne/Korn シェル                            |
|-----------------------------------|--------------------------------------------|
| prompt> <b>unsetenv TNS_ADMIN</b> | prompt> <b>TNS_ADMIN=;export TNS_ADMIN</b> |

## 2.8.6 Linux および Solaris のアカウントおよびグループの作成

次の作業は Linux および Solaris プラットフォームにのみ必要です。

### 2.8.6.1 インストーラのインベントリのグループ名

oraInventory ディレクトリに対して読取りおよび書き込み権限を持つグループを作成します。インストーラでは、oraInventory ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされている Oracle 製品が追跡されます。ユーザーに oraInventory への書き込みアクセス権を付与すると、そのユーザーはコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようになります。したがって、そのようなユーザーはすべて同じグループのメンバーにしておきます。このマニュアルでは、このグループを `devsuitegrp` グループと呼びます。

オペレーティング・システムのユーティリティを使用して、このグループを作成します。次に例を示します。

- Solaris の場合は、`admintool` ユーティリティまたは `groupadd` ユーティリティを使用します。
- Linux x86 の場合は、`/usr/sbin/groupadd` および `/usr/sbin/useradd` を使用します。

これらのユーティリティについては、オペレーティング・システムのドキュメントに記載されています。

`devsuitegrp` グループは、インストーラの oraInventory ディレクトリを所有します。Oracle のインストールを実行するすべてのユーザー・アカウントは、`devsuitegrp` グループのメンバーである必要があります。

### 2.8.6.2 Oracle ソフトウェアのユーザー

このコンピュータに Oracle ソフトウェアを初めてインストールする場合は、最初に新規のユーザーを作成することをお勧めします。Oracle ソフトウェアのインストールと管理には、この新規のユーザーを使用してください。

表 2-15 に示すように、ユーザーの属性を指定します。

表 2-15 oracle アカウントの属性

| 変数         | 属性                                                                                                           |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 名前         | Oracle ユーザー名を指定します。このマニュアルでは、 <code>oracle</code> という名前を使用します。                                               |
| グループ識別子    | <code>devsuitegrp</code> グループを指定します。                                                                         |
| ホーム・ディレクトリ | 他のユーザー・ホーム・ディレクトリと同じホーム・ディレクトリを指定します。 <code>oracle</code> アカウントのホーム・ディレクトリは、Oracle ホームのディレクトリと同じである必要はありません。 |
| ログイン・シェル   | デフォルトのシェル (C、Bourne または Korn シェル) を指定します。                                                                    |

**注意：** このユーザーを使用するのは、Oracle ソフトウェアのインストールと管理だけです。インストーラと関係のない作業には使用しないでください。また、Oracle ユーザーに `root` を使用しないでください。

## 2.8.7 インストール中に必要な情報

インストーラによってインストール画面が表示されます。オペレーティング・システムや選択したインストール・オプションに応じて、[表 2-16](#) に示す情報が必要になります。

**表 2-16 インストール中に必要な情報**

| 項目                                                                           | インストール・タイプ                                                              | 例                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) の Oracle ホーム名とパス <sup>1</sup> | すべて (Windows、Linux および Solaris)                                         | 名前: DevSuiteHome<br>パス: C:\¥DevSuiteHome<br>または<br>/private/DevSuiteHome |
| Linux および Solaris グループ名                                                      | すべて (Linux および Solaris のみ)                                              | devsuitegrp                                                              |
| 送信メール・サーバー名                                                                  | 完全 (すべてのプラットフォーム)。Oracle Application Server Reports Services にのみ使用されます。 | mysmtp01.mycorp.com                                                      |

<sup>1</sup> 詳細は、[第 2.6.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」](#) を参照してください。

## 2.8.8 移行またはアップグレード

次のシステムから移行またはアップグレードする場合は、[付録 A「アップグレードに関する注意」](#) を参照してください。

- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4)  
Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2)
- Oracle Internet Developer Suite リリース 1 (Oracle9i Developer Suite の旧バージョン)
- Oracle Developer Suite コンポーネント (Oracle JDeveloper や Oracle Software Configuration Manager など) の 9.0.3 以前のバージョン

## 2.9 コンポーネント固有のインストールの準備作業

コンポーネント固有のインストールの準備作業は、次の項に記載しています。

- [第 2.9.1 項「OracleBI Beans」](#)

### 2.9.1 OracleBI Beans

OracleBI Beans は、Oracle Database に保存されたデータをサポートします。ただし、特定のリリースとパッチセットのみがサポートされます。データベースと必要なパッチセットは、インストールの準備作業かインストール完了後の作業のいずれかでインストールできます。手順の詳細は、インストール完了後の作業として[第 3.2.3.1 項「データベースに関する注意事項」](#)で説明しています。

## 2.10 インストーラを起動する前の準備

この項では、Oracle Universal Installer の概要と、インストールを開始する前に知っておくべきことについて説明します。

### 2.10.1 Oracle Universal Installer について

Oracle Developer Suite では、Oracle Universal Installer を使用してコンポーネントのインストールおよび環境変数の構成を行います。インストーラの指示に従ってインストールを行います。

Oracle Universal Installer により、次の作業が自動化されます。

- インストール先のコンピュータのオペレーティング・システムに基づき、製品のインストール・オプションを設定
- 既定の環境変数および構成設定の検出
- インストール中に環境変数および構成を設定
- 製品のアンインストール

### 2.10.2 インストーラによる前提条件の確認

インストールを開始する前に、インストーラによってコンピュータの前提条件が自動的に確認されます。次の表に、インストーラによって実行される前提条件の確認内容を示します。

表 2-17 に、Windows で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

**表 2-17 インストーラによる前提条件確認 (Windows)**

| 前提条件の確認                  | 関連項目                                                                                                                                                                   |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 256 色以上の表示が可能か           | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                               |
| 最低限の CPU 速度を満たしているか      | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                               |
| オペレーティング・システムの要件を満たしているか | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」</li> <li>■ 表 2-4 「Oracle Developer Suite の Windows ソフトウェア要件」</li> </ul> |

表 2-18 に、Sun SPARC コンピュータの Solaris で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

**表 2-18 インストーラによる前提条件確認 (Solaris)**

| 前提条件の確認                  | 関連項目                                                                                                                                                                                                         |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 256 色以上の表示が可能か           | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                                                                     |
| 最低限のスワップ領域があるか           | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                                                                     |
| 最低限の CPU 速度を満たしているか      | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                                                                     |
| オペレーティング・システムの要件を満たしているか | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」</li> <li>■ 表 2-5 「Solaris オペレーティング・システムのパッチセット要件」</li> <li>■ 表 2-6 「Solaris オペレーティング・システムのパッケージ要件」</li> </ul> |

表 2-19 に、Linux x86 で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

**表 2-19 インストーラによる前提条件確認 (Linux)**

| 前提条件の確認                  | 関連項目                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 最低限のスワップ領域があるか           | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 最低限の CPU 速度を満たしているか      | 表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| オペレーティング・システムの要件を満たしているか | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」</li> <li>■ 表 2-7 「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件」</li> <li>■ 表 2-8 「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件」</li> <li>■ 表 2-10 「SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件」</li> <li>■ 表 2-11 「SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件」</li> </ul> |

### 2.10.3 インストーラのインベントリ・ディレクトリ

コンピュータで最初にインストーラを実行したとき、インベントリ・ディレクトリが作成されます。インベントリ・ディレクトリには、インストーラによってインストールされた製品、およびその他のインストール情報が記録されます。以前にコンピュータに Oracle 製品をインストールしたことがある場合、インベントリ・ディレクトリがすでに存在する可能性があります。

インベントリ・ディレクトリについて、次の要点を理解しておいてください。

#### Windows の場合：

- インベントリ・ディレクトリやその内容を削除したり、変更したりしないでください。コンピュータにインストール済の製品の場所を、インストーラが認識できなくなることがあります。
- Windows の場合、最初にコンピュータに Oracle 製品をインストールしたときに、インストーラによってインベントリ・ディレクトリが、`system_default_drive:¥Program Files¥Oracle¥Inventory` として自動的に作成されます。`system_default_drive` の値は通常「C:」で、Windows レジストリに設定されています。

#### Linux および Solaris の場合：

- Linux および Solaris の場合、ディレクトリのデフォルトの場所は、Solaris では `/var/opt/oracle/oraInst.loc`、Linux では `/etc/oraInst.loc` ファイルに記述されています。コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、既存のディレクトリをインベントリ・ディレクトリとして使用するかどうかを尋ねられます。その後、インストーラによって `oraInst.loc` が作成され、そのファイルにインベントリ・ディレクトリが記述されます。
- インストール中に Linux または Solaris グループ名を指定すると、そのグループに属するすべてのユーザーに対して、`oraInventory` ディレクトリへの書き込み権限が付与されます。後で別のユーザーがインストーラを起動する場合、そのユーザーは、`oraInventory` ディレクトリに対してユーザーレベルの書き込み権限を持っているか、インストール中に指定したグループに属している必要があります。権限がなければインストール処理は失敗します。

この操作のログは、インストーラによって、`system_default_drive:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` ディレクトリ (Windows)、または `inventory_location/logs` ディレクトリ (Linux および Solaris) のファイルに格納されます。ログ・ファイルの名前は次の形式になります。

```
installActionsyear-date_time.log
```

## 2.10.4 インストーラの起動

インストーラを起動するには、次の手順を実行します。

### 2.10.4.1 Windows の場合

---

**注意：** インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、Windows システム・ファイルのインストールを実行してください（インストール方法については後述します）。

---

1. Oracle データベースなど、Oracle 関連のサービスをすべて停止します。
2. **CD-ROM の場合：**「Disk 1」のラベルが付いた Oracle Developer Suite CD-ROM を、コンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。  
**DVD の場合：**「Oracle Developer Suite and Documentation」のラベルの付いた Oracle Developer Suite DVD を、コンピュータの DVD ドライブに挿入します。
3. **CD-ROM の場合：**自動実行機能を使用していない場合は、CD-ROM のルート・ディレクトリでプログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。  
**DVD の場合：**自動実行機能を使用していない場合は、DVD のルート・ディレクトリの下にあるディレクトリ `¥developer_suite` で、プログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
4. 自動実行機能を使用している場合は、インストーラは自動的に起動します。**Oracle Developer Suite のインストール**をクリックして、インストールを開始します。
5. **Windows のユーザー補助機能を使用している場合：**CD-ROM または DVD を挿入した直後に [Shift] キーを押し、自動実行機能を使用不可にします。自動実行のウィンドウが開いた場合は、[ALT]+[F4] キーを押して閉じます。次のいずれかの操作を行います。
  - a. **CD-ROM の場合：**Oracle Developer Suite をインストールするには、CD-ROM のルート・ディレクトリでプログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。  
**DVD の場合：**Oracle Developer Suite をインストールするには、DVD のルート・ディレクトリの下にある `¥developer_suite` ディレクトリで、プログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
  - b. CD-ROM または DVD の内容を確認する場合は、Windows エクスプローラを使用します。
  - c. Oracle Developer Suite についての情報を得るには、CD-ROM の `¥doc¥welcome¥index.htm`、または DVD の `¥developer_suite¥doc¥welcome¥index.htm` ファイルを参照します。

第 3.1 項「Oracle Developer Suite のインストール」の手順に進んで続行します。

#### 2.10.4.1.1 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Developer Suite では、Windows システム・ディレクトリ内に必要なファイルがいくつかあります。Oracle Developer Suite のインストール中、コンピュータにすでに存在するファイルが、Oracle Developer Suite の要件を満たすかどうか確認されます。ファイルが存在しない場合や、存在しても要件を満たさない場合は、必要なファイルがインストールされます。

要件を満たさないファイルが、インストール時に他のプロセスで使用中の場合、インストーラが停止し、エラー・ダイアログ・ボックスが表示されます。これは、更新したファイルを有効にするために Windows を再起動する必要があるからです。インストーラは、自動的にシャットダウンしてシステムの再起動後に再び起動することはできません。

Oracle Developer Suite には、必要な Windows システム・ファイルの補足インストール機能も含まれています。インストールが終了すると、必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Developer Suite のインストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、次の手順に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle Developer Suite のインストールを続行できません。

**Windows システム・ファイルのインストールを開始するには、次の手順を実行します。**

1. 「終了」をクリックしてインストーラを終了します。
2. CD-ROM の場合はルート・ディレクトリに、DVD の場合はルート・ディレクトリの下にある `¥developer_suite` ディレクトリに移動します。
3. `wsf.exe` を実行します。

Windows システム・ファイル・インストーラは、既存の Oracle ホームを検索します。Oracle ホームが見つからない場合は、「**ファイルの場所**」ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスから、Oracle ホームを選択します。

必要に応じて自動的に Windows が再起動されます。または、インストール終了を表すダイアログ・ボックスが表示されないで、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows の再起動後、または Windows システム・ファイルのインストールが終了したら、Oracle Developer Suite のインストールを再開してください。

## 2.10.4.2 Linux および Solaris の場合

---

**注意：** root アカウントへのアクセスが必要です。

---

自動マウント機能をサポートしないオペレーティング・システムでは、インストール CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。CD-ROM または DVD のマウント / アンマウントには、root 権限が必要です。CD-ROM または DVD をドライブから取り出す前に、必ずアンマウントしてください。

---

**注意：** Oracle Developer Suite のインストール CD-ROM は、RockRidge 形式で作成されています。Oracle Developer Suite and Documentation DVD は、DVD-ROM 形式で作成されています。

---

インストール CD-ROM または DVD をマウントするには、次の手順を実行します。

1. Oracle データベースなど、Oracle 関連のプロセスをすべて停止します。
2. 次の該当するオペレーティング・システムの項に進み、マウントの説明をお読みください。
  - [第 2.10.4.2.1 項「CD-ROM および DVD のマウント手順 : Solaris の場合」](#)
  - [第 2.10.4.2.2 項「CD-ROM および DVD のマウント手順 : Linux の場合」](#)

### 2.10.4.2.1 CD-ROM および DVD のマウント手順 : Solaris の場合

コンピュータに自動マウントを設定している場合は、CD-ROM または DVD ディスクをドライブに挿入すると、そのディスクは、自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

コンピュータに自動マウントを設定していない場合は、CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。

CD-ROM または DVD を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD を、ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM または DVD のマウント・ポイント・ディレクトリを作成しておく必要があります。たとえば、ディレクトリ /cdrom を作成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mkdir /cdrom
```

4. 作成したマウント・ポイント・ディレクトリに、CD-ROM または DVD をマウントします。たとえば、マウント・ポイント・ディレクトリが /cdrom の場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. [第 2.10.4.2.3 項「インストーラの実行」](#) の手順に進みます。

#### 2.10.4.2.2 CD-ROM および DVD のマウント手順: Linux の場合

コンピュータに CD-ROM または DVD の自動マウントを設定している場合は、CD-ROM または DVD ディスクをドライブに挿入すると、そのディスクは、自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

コンピュータに自動マウントを設定していない場合は、CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。

CD-ROM または DVD を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD を、ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM または DVD のマウント・ポイント・ディレクトリを作成しておく必要があります。たとえば、ディレクトリ /mnt/cdrom を作成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mkdir /mnt/cdrom
```

4. /etc/fstab ファイルに、次の /dev/cdrom の行を必ず入れます。

```
/dev/cdrom /mnt/cdrom iso9660 noauto,owner,kudzu,ro 0 0
```

---

**注意：** ファイル /etc/fstab には、この行が本文の表示と同様に記述されている必要があります。これ以外の書式が使用されている行は、本文の行と置き換えます。

---

5. 次のコマンドを実行して、マウント・ポイント・ディレクトリに、CD-ROM または DVD をマウントします。

```
# /bin/mount /mnt/cdrom
```

このコマンドにより、マウント・ポイント・ディレクトリ /mnt/cdrom に、CD-ROM または DVD がマウントされます。

6. root ユーザーとしてログアウトします。
7. [第 2.10.4.2.3 項「インストーラの実行」](#) の手順に進みます。

#### 2.10.4.2.3 インストーラの実行

インストール CD-ROM または DVD をマウントしたら、インストーラを起動できます。

**CD-ROM または DVD からインストーラを起動するには、次の手順を実行します。**

---

**注意：** インストーラを起動するときには、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインすると、エラー・メッセージが表示され、インストーラが停止します。

---

1. Oracle 製品のインストール用に作成したユーザー（第 2.8.6.2 項「[Oracle ソフトウェアのユーザー](#)」を参照）でログインします。
2. マウント・ポイント・ディレクトリおよびそのサブディレクトリ以外のディレクトリに移動します。たとえば、マウント・ポイント・ディレクトリが /mnt/cdrom の場合は、/mnt/cdrom およびそのサブディレクトリ以外のディレクトリに移動します。
3. **CD-ROM の場合：** 次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
prompt> mount_point_directory/runInstaller
```

**DVD の場合：** 次のコマンドを入力してインストーラを起動します。

```
prompt> mount_point_directory/developer_suite/runInstaller
```

インストーラが起動します。第 3.1 項「[Oracle Developer Suite のインストール](#)」の手順に進みます。

#### 2.10.4.3 サイレント・モードおよび非インタラクティブ・モードでのインストーラの実行

付録 D「[サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール](#)」を参照してください。

---

## インストール手順

インストール手順に進む前に、[第2章「インストールする前に」](#)を参照し、インストール前の準備作業を完了しておいてください。

この章では、インストール処理およびその後の作業について、手順を追って説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [第3.1項「Oracle Developer Suite のインストール」](#)
- [第3.2項「インストール完了後の作業」](#)
- [第3.3項「コンポーネントの起動」](#)

## 3.1 Oracle Developer Suite のインストール

インストーラの起動方法については、[第 2.10.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

---

### 注意：

- **(Windows のみ)** インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、[第 2.10.4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」](#)の手順に従ってください。
  - インストーラの画面は、現在のロケールで指定された言語で表示されます。
- 

インストーラを起動すると、まず前提条件が自動的に確認されます。このような確認は、「ようこそ」画面の前に表示されるコマンドライン・ウィンドウで実行されます。前提条件の確認に失敗すると、エラー・メッセージが表示され、インストーラが停止します。インストーラによって自動的に実行される前提条件の確認については、[第 2.10.2 項「インストーラによる前提条件の確認」](#)を参照してください。

次に、インストーラの「ようこそ」画面が表示されます。

1. 「ようこそ」画面に表示された内容を確認し、「**次へ**」をクリックします。

「ようこそ」画面には、Oracle Universal Installer に関する情報が記載されています。

「ようこそ」画面および各インストール画面には、次のボタンが表示されます。

- **ヘルプ**: 各画面の機能についての説明が表示されます。
- **インストールされた製品**: 現在インストール済の製品の表示やアンインストールが実行されます。
- **戻る**: 前の画面に戻ります。このボタンは「ようこそ」画面では使用できません。
- **次へ**: 次の画面に進みます。このボタンは、一部の画面では使用できません。
- **インストール**: ファイルのインストールが開始されます。

---

**注意：** この「インストール」ボタンは、「サマリー」画面が表示されるまで使用できません。

---

- **取消**: インストール処理が停止し、インストーラが終了します。

「ようこそ」画面には、前述以外にも次の 2 つのボタンが表示されます。

- **製品の削除**: 個別の製品またはすべての製品がアンインストールされます。
- **バージョン情報**: インストーラのバージョン番号が表示されます。

「インストールされた製品」オプションおよび「製品の削除」オプションの詳細は、[第 4.1.1 項「インストーラを使用したアンインストール手順」](#)を参照してください。

2. コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インストール関連ファイル用のインベントリ・ディレクトリが作成されます（インベントリ・ディレクトリの詳細は、[第 2.10.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください）。作成プロセスは、Windows、Linux、Solaris で異なります。

- **Windows**: インストーラによってディレクトリ `system_default_drive\Program Files\Oracle\Inventory` が作成されます。この `system_default_drive` は Windows をインストールしているドライブ（通常は C）を示します。

- **Linux および Solaris:** 「インベントリ・ディレクトリの指定」画面が表示されます。インベントリ・ディレクトリの場所には既存のディレクトリを入力する必要があります。たとえば、次のようなディレクトリを使用できます。

```
/private1/oraInventory
```

ファイル・システムを参照してインベントリ・ディレクトリを選択する場合は、「参照」ボタンを使用します。

インストール処理を続行するには、「OK」をクリックします。

3. **Linux および Solaris のみ:** (最初のインストール時のみ) 「UNIX グループ名」画面で UNIX グループ名を入力します。

「UNIX グループ名」画面は、そのコンピュータで初めてインストーラを起動したときのみ表示されます。この画面を使用して、インベントリ・ディレクトリに対して読取りおよび書込みの権限を持つグループを指定します。詳細は、[第 2.8.6 項「Linux および Solaris のアカウントおよびグループの作成」](#)を参照してください。

**UNIX グループ名:** グループの名前を入力します。このグループは、インベントリ・ディレクトリに対して読取りおよび書込みのアクセス権を持つ必要があります。インストーラの起動に使用するユーザーは、このグループのメンバーである必要があります。

終了したら、「次へ」をクリックして続行します。

4. **Linux および Solaris のみ:** 画面が表示され、シェル・スクリプト `orainstRoot.sh` を実行するように要求されます。このスクリプトは、root 権限で実行する必要があります。シェル・スクリプトを実行するとき、`orainstRoot.sh` の前に「./」の入力が必要になる場合もあります。

画面にシェル・スクリプト・ファイルの場所が表示されます。以降のインストール処理でコンポーネントを識別できるように、このスクリプトによって、コンピュータにインストールされたコンポーネントへのポインタが作成されます。スクリプトによって、Solaris では `/var/opt/oracle/oraInst.loc`、Linux では `/etc/oraInst.loc` ファイルが生成されます。このファイルに、インベントリ・ディレクトリへのポインタが記録されます。

このスクリプトを実行した後は元の画面に戻り、「続行」をクリックして先に進みます。

5. 「ファイルの場所の指定」画面で、インストール元およびインストール先のパスを確認し、Oracle ホーム名を入力または選択します。

「ファイルの場所の指定」画面で、インストール元およびインストール先を絶対パスで入力します。

- **ソース:** `products.jar` ファイルの絶対パスで、この場所から製品のインストールが行われます。インストール・プログラムの `products.jar` ファイルのデフォルト値が検出されて使用されます。このパスは変更しないでください。
- **インストール先:** Oracle ホームの名前および絶対パスで、この場所に製品がインストールされます。

デフォルトの名前およびパスを使用しても、他の名前を選択してもかまいません。詳細は、[第 2.6.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」](#)を参照してください。

---

**注意:** Oracle ホームは、実在する絶対パスでなければなりません。環境変数名や空白を含むことはできません。

---

次の既存のディレクトリを、Oracle Developer Suite のインストール先として指定しないでください。

- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のホーム・ディレクトリ
- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) のホーム・ディレクトリ
- Oracle Internet Developer Suite のホーム・ディレクトリ (Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) の旧バージョン)
- すべての Oracle Database のホーム・ディレクトリ

Oracle ホームの詳細は、[第 2.6 項「1 つの Oracle ホームでの共存」](#)を参照してください。

- **参照:** ファイル・システムを参照してソースまたはインストール先のディレクトリを指定する場合は、「**参照**」ボタンをクリックします。

情報の入力が終わったら、「**次へ**」をクリックして続行します。

6. インストール先のコンピュータがハードウェア・クラスタの一部である場合は、「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面が表示される場合があります。その場合は、「**単一ノードまたはコールド・フェイルオーバー・クラスタのインストール**」オプションを選択すると、現行のインストール・ノードにのみインストールが実行されます (このリリースでは**アクティブ・フェイルオーバー・クラスタのインストール**・オプションはサポートされていません)。
7. インストール・タイプを選択する画面で、実行するインストールのタイプ、およびインストールする製品言語を選択します。使用可能なインストール・オプションは次のとおりです。
  - **J2EE Development:** Oracle10g JDeveloper およびそのサブコンポーネント (Oracle Business Intelligence Beans、UIX、Bali、XDK) と、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) をインストールします。OC4J は、テスト用のデフォルトのリスナーとして構成されます。

---

**注意:** OracleBI Beans は、JDeveloper のコンポーネントです。OracleBI Beans を使用するには、「J2EE Development」オプションも選択してインストールしてください。

---

- **完全:** Oracle Developer Suite のコンポーネントをすべてインストールします。このオプションでは、Oracle Forms Developer、Oracle Reports Developer、および Oracle10g JDeveloper をインストールします。また、OC4J、Oracle Application Server Reports Services、および Oracle Application Server Forms Services もインストールします。OC4J はテスト用のデフォルトのリスナーとして構成されます。

ただし、Linux および Solaris の場合、使用できないコンポーネントがあります。Linux および Solaris にインストールされる Oracle Developer Suite のコンポーネントについては、[表 2-3「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」](#)を参照してください。

- **製品の言語:** Oracle Developer Suite の実行時に表示される言語を選択するには、「**製品の言語**」ボタンをクリックして「言語の選択」画面を表示します。複数の言語をインストールし、NLS\_LANG 環境変数を変更して、言語を切り替えることもできます。実行時に、NLS\_LANG で指定された言語の翻訳ファイルが使用可能であれば、その製品は指定された言語で表示されます。使用可能でない場合は英語で表示されます。

「言語の選択」画面で、インストールした製品の実行時に表示する言語を選択します。英語を使用するロケールでインストーラを実行している場合は、英語しか選択されません。英語以外の言語を使用するロケールでインストーラを実行している場合は、英語とそのロケールのデフォルト言語が選択されます。

「言語の選択」画面で、インストールする言語を複数選択できます。選択するには、「**使用可能な言語**」リストから「**選択された言語**」リストへ言語を移動します。操作方は次のとおりです。

- 「**使用可能な言語**」リストから、1 つまたは複数の言語を選択します。複数の言語を選択する場合は、1 つの言語を選択し、[Ctrl] キーを押しながら別の言語を選択します。なお、ここで選択した言語は、インストール・プログラムの表示言語とは関係ありません。
- 言語を選択した後、「>」ボタンをクリックすると、選択した言語が「**選択された言語**」リストに移動します。
- すべての言語を選択する場合は、「>>」ボタンをクリックします。
- 選択を取り消したいときは、その言語をクリックして、「<」ボタンをクリックします。選択した言語が「**使用可能な言語**」リストに戻ります。すべての言語の選択を取り消す場合は、「<<」ボタンをクリックします。
- 言語の選択が終わったら、「OK」をクリックして続行します。

実行するインストール・タイプと表示する製品言語の選択が終了したら、「**次へ**」をクリックして続行します。

8. インストール・タイプが「完全」の場合は、「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。この画面には、Oracle Application Server Reports Services (Reports Services) が、電子メールで報告書の配布やジョブ完了通知の送信を行う場合に使用する送信メール・サーバーの名前を入力します。

たとえば、送信メール・サーバー名は、mysmtp01.mycorp.com のように指定します。

この機能を使用しない場合は、名前を空白にしておきます。後で変更または構成できます。

終了したら、「**次へ**」をクリックして続行します。

9. 「サマリー」画面の情報を確認し、「**インストール**」をクリックします。ファイルのインストールが開始されます。

実際のインストール処理を開始する前に、「サマリー」画面で設定した内容を確認できます。「サマリー」リストには、インストール元およびインストール先の場所、インストール・タイプ、製品言語のほか、必要なディスク領域や、インストールされるコンポーネントがまとめられています。

設定を変更するには、「**戻る**」をクリックして適切な画面に戻ります。

---

**注意：** ディスク容量が不足している場合、「**必要な領域**」に赤字で表示されます。

---

10. 「インストール」画面が表示され、必要な Oracle Developer Suite ファイルのコピーが開始されます。インストール処理には、ファイルのコピーやリンク、実行決定ポイント、計算などのアクションの実行が含まれます。この画面では次の操作を行います。

- インストール処理の進行を監視する。
- インストール・ログ・ファイルの完全パスを確認する。インストール・ログ・ファイルの詳細は、第 2.10.3 項「[インストーラのインベントリ・ディレクトリ](#)」を参照してください。
- 「**インストールの中止**」をクリックしてインストール処理を中断する。この場合、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのみのインストールを停止するかを選択できます。通常は、製品すべてのインストールを停止するようお勧めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止した場合、これに関連するコンポーネントが正常に動作しなくなることがあります。

11. Oracle Net Configuration Assistant の実行中に、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面が表示される場合があります。Oracle Net Configuration Assistant は、基本的なネットワーク・コンポーネントを構成し、tnsnames.ora および sqlnet.ora ファイルを作成します。Oracle Net Configuration Assistant ツールは、インストーラによって起動されます。Oracle Net Configuration Assistant の「ようこそ」画面にある「ヘルプ」をクリックすると、このツールの使用方法についての説明が表示されます。

この画面の操作が終わったら、「次へ」をクリックして続行します。

---

**注意：** コンフィギュレーション・アシスタントは、実行中にユーザー・インタフェースが表示されないサイレント・モードで実行される場合もあります。また、コンフィギュレーション・アシスタントが完了する前に短時間だけユーザー・インタフェースが表示される場合もあります。ユーザー・インタフェースが表示されてインストールが停止する場合は、コンフィギュレーション・アシスタントにエラーが発生しています。

---

「コンフィギュレーション・アシスタント」画面では次の操作を行います。

- 構成処理を監視する。
- 「中止」をクリックして構成ツールを終了する。
- 構成ツールによって指定された構成値を表示する。構成ツール名をクリックすると、構成値の詳細が表示されます。
- 構成が正常に完了しなかった場合、「再試行」をクリックして構成ツールを再度実行する。

**Windows のユーザー補助機能を使用している場合：**ユーザー補助機能を使用していて、スクリーン・リーダーに何か問題が発生した場合は、次の操作を行います。

- a. [ALT]+[F4] キーを押して Net Configuration Assistant の処理を中断し、インストーラを終了します。この操作は Oracle Developer Suite のインストール処理には影響ありません。Net Configuration Assistant ツールが終了するのみです。
- b. Java Access Bridge 1.2 を、JVM のある場所にインストールします。Java Access Bridge 1.2 のダウンロードやインストール手順については、[第 2.8.4 項「Java Access Bridge のインストール \(Windows のみ\)」](#)を参照してください。
- c. 次の環境変数を設定します。

```
ORACLE_OEM_CLASSPATH=program_drive:\Program Files\Oracle\jre\1.4.2\lib\access-bridge.jar;program_drive:\Program Files\Oracle\jre\1.4.2\lib\jaccess.jar
```

この `program_drive` は、ディレクトリ Program Files があるドライブを示します。

- d. スクリーン・リーダーを再起動します。
  - e. Windows の「スタート」メニューから、次の順に選択して Net Configuration Assistant ツールを再起動します。  
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - DevSuiteHome」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Configuration Assistant」
12. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面がまだ表示されている場合は、「次へ」をクリックして続行します。
13. 製品のインストールが終了すると、インストールの終了画面が表示されます。

インストール・プログラムを終了するには、「終了」をクリックします。インストール・プログラムの終了を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックして終了するか、「いいえ」をクリックしてインストール・プログラムを続行します。

製品のインストールに成功した場合は、[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#)を参照して次の手順に進んでください。

## 3.2 インストール完了後の作業

Oracle Developer Suite のインストール完了後に必要な作業を、次の項に分けて説明します。

- 第 3.2.1 項「全般的なチェックリスト」
- 第 3.2.2 項「各コンポーネントのインストール完了後の作業」
- 第 3.3 項「コンポーネントの起動」

---

**注意：** 特に指定がないかぎり、DevSuiteHome はインストール処理中に使用した Oracle Developer Suite のホーム・ディレクトリを表します。

---

### 3.2.1 全般的なチェックリスト

インストール完了後の全般的なチェックリストを確認し、インストール環境に当てはまる作業を行います。

#### 3.2.1.1 更新

インストールが完了したら、最新の動作保証とソフトウェアの更新を *OracleMetalink* (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。*OracleMetalink* では、オラクル社カスタマ・サポート・センターが提供する次のような技術情報やサポート情報を確認できます。

- 製品アベイラビリティ
- 動作保証
- 製品アラート
- バグ情報
- パッチ
- 技術ソリューション
- サービス・リクエストのログ

Oracle Technology Network の Web サイト (<http://www.oracle.com/technology/>) では、Oracle 製品と業界標準の技術を使用してアプリケーションの構築、テストおよびデプロイを行う開発者向けのサービスと技術資料を確認することができます。

#### 3.2.1.2 NLS

インストールしたコンポーネントの NLS サポートを有効にするために、インストール後に作業が必要になる場合があります。

##### 3.2.1.2.1 コンポーネントの言語

Oracle Developer Suite コンポーネント（BI Beans を除く）のユーザー・インタフェースは、インストール時に選択した言語で表示できます。その場合は、NLS\_LANG 環境変数を設定します。

NLS\_LANG は、コンポーネントで使用される言語、地域および文字セットを指定する環境変数です。NLS\_LANG を別の値に変更するまで、Oracle Developer Suite のすべてのコンポーネントで、最初の設定が使用されます。

NLS\_LANG には、言語、地域および文字セットの 3 つの要素があります。これらの要素は次の書式で設定されます。

```
<language>_<territory>.<character_set>
```

たとえば、NLS\_LANG に Japanese\_Japan.JA16EUC と設定すると、日本語環境でコンポーネントが実行されます。また、日本における表記法などの慣習に従い、データを操作する文字セットとしては EUC を使用することを表します。

NLS\_LANG の詳細は、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

### 3.2.1.2.2 追加フォント

インストール中に製品言語（複数可）を選択すると、JDK でその言語を正しく表示できるよう自動的にフォントがインストールされます。フォントは、ディレクトリ DevSuiteHome/jdk/jre/lib/fonts にインストールされます。

インストール後に、インストール時に選択しなかった言語でテキストを表示することが必要になる場合があります。Oracle JDeveloper、UIX、Oracle Reports Developer など、Java 依存コンポーネントを使用している場合には、Java で必要なフォントがインストールされていない場合があります。このような問題は、フォントを手動でインストールすることによって解決できます。

Oracle Developer Suite に付属するフォントを表 3-1 に示します。

**表 3-1 Oracle Developer Suite に付属する NLS フォント**

| ファイル名        | 説明                                  |
|--------------|-------------------------------------|
| ALBANWTJ.TTF | Albany WT 日本語フォント                   |
| ALBANWTK.TTF | Albany WT 韓国語フォント                   |
| ALBANWTS.TTF | Albany WT 簡体字中国語フォント                |
| ALBANWTT.TTF | Albany WT 繁体字中国語フォント                |
| ALBANYWT.TTF | 日本語、中国語、韓国語を除く、英語以外の Albany WT フォント |

フォントをインストールするには、表から該当するフォント名を選択し、次の手順を実行します。

1. **CD-ROM の場合：**「Disk 2」というラベルが付いた Oracle Developer Suite CD-ROM をマウントします。各プラットフォームに CD-ROM をマウントする方法については、[第 2.10.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

**DVD の場合：**「Oracle Developer Suite and Documentation」というラベルが付いた Oracle Developer Suite DVD をマウントします。各プラットフォームに DVD をマウントする方法については、[第 2.10.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

2. インストーラが起動した場合は、終了します。インストーラは、フォントのインストールには使用しません。
3. **CD-ROM の場合：**CD-ROM のルート・ディレクトリにいったん移動して、サブディレクトリ /extras/fonts に移動します。

**DVD の場合：**DVD のルート・ディレクトリにいったん移動して、サブディレクトリ /developer\_suite/extras/fonts に移動します。

4. フォント・ファイルを DevSuiteHome/jdk/jre/lib/fonts にコピーします。

### 3.2.1.3 TNS 名

選択したインストール・タイプにより、tnsnames.ora および sqlnet.ora ファイルが、DevSuiteHome¥network¥admin フォルダ（Windows の場合）または DevSuiteHome/network/admin ディレクトリ（Linux および Solaris の場合）にインストールされます。このファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新することも、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用することもできます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

### 3.2.1.4 ポート番号

インストーラにより、ポートを必要とする Oracle Developer Suite コンポーネントに、ポートが自動的に割り当てられます。コンポーネントのインストール時にポートの競合が検出されると、コンポーネントに割り当てられたポート番号の範囲内で、別のポート番号が選択されます。インストール後は、ポートの割当てを記述したファイルが作成されます。ポートの割当てが妥当かどうかを確認してください。

ポートの割当てを記述したこのファイルを `portlist.ini` といいます。このファイルは、`DevSuiteHome¥install` フォルダ (Windows) または `DevSuiteHome/install` ディレクトリ (Linux および Solaris) にあります。このファイルには、「ポート名 = ポート値」という形式で、コンポーネントごとのポート割当てが記述されています。次に例を示します。

```
Oracle Java Object Cache port = 7000
Oracle Intelligent Agent = 1748, 1754, 1808, 1809
```

表 3-2 に、各コンポーネントのデフォルトのポート番号と、競合が検出された場合に使用されるポート番号の範囲を示します。

表 3-2 ポート番号

| コンポーネント                                      | デフォルトのポート番号                                                                                                     | ポート番号の範囲                              |
|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| OC4J (Oracle Forms および Oracle Reports のテスト用) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ HTTP リスナー : 8888</li> <li>■ RMI: 23910</li> <li>■ JMS: 9240</li> </ul> | 8888-8907<br>23910-23929<br>9240-9259 |
| OC4J (JDeveloper のテスト用)                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ HTTP リスナー : 8888</li> </ul>                                            | 8888-8907                             |

OC4J の両方のインスタンスをインストールするタイプを選択すると、インスタンス間での競合や他のポート番号との競合が発生しないポート番号が設定されます。

### 3.2.1.5 Oracle Developer Suite 用の OC4J インスタンス

- Oracle Forms および Oracle Reports のテスト用の Oracle Developer Suite OC4J のインスタンスを起動または停止するには、次の手順を実行します。

- **Linux および Solaris:** `DevSuiteHome/j2ee/DevSuite` ディレクトリにある次のスクリプトを使用します。
  - `startinst.sh`
  - `stopinst.sh`
- **Windows:** `DevSuiteHome¥j2ee¥DevSuite` ディレクトリにある次のスクリプトを使用します。
  - `startinst.bat`
  - `stopinst.bat`

または、次のいずれかの方法で「スタート」メニューからスクリプトにアクセスします。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - *DevSuiteHome*」→「Forms Developer」

「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - *DevSuiteHome*」→「Reports Developer」

その後、次を選択します。

- OC4J インスタンスを起動するには、「Start OC4J Instance」を選択します。
- OC4J インスタンスを停止するには、「Shutdown OC4J Instance」を選択します。

### 3.2.1.6 ユーザー補助機能（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して、Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle Developer Suite をインストールした Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun 社の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

次の手順で Java Access Bridge のファイルが正しく設定されているかどうかを確認します。

#### Java Access Bridge のファイルがインストールされたことの確認：

次の手順は、Java Access Bridge 1.2 の ZIP ファイルをダウンロードし、accessbridge\_home という名前の一時ディレクトリに展開して、インストールが済んでいることを仮定しています。詳細は、[第 2.8.4 項「Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）」](#)を参照してください。

1. 次のファイルが <DevSuiteHome>%jdk%jre%lib%ext ディレクトリにインストールされていることを確認します。インストールされていない場合は、<accessbridge\_home>%installer%installerFiles からコピーします。
  - access-bridge.jar
  - jaccess-1\_3.jar
  - jaccess-1\_4.jar
  - JavaAccessBridge.dll
  - JAWTAccessBridge.dll
  - WindowsAccessBridge.dll
2. JavaAccessBridge.dll、JAWTAccessBridge.dll、および WindowsAccessBridge.dll が Windows\System32 フォルダに追加されていることを確認します。これで、前述のファイルが、システム・パスで参照される場所にあることが確認できます。
3. PATH 環境変数に、.DLL ファイルのインストール先ディレクトリである <DevSuiteHome>%jdk%jre%lib%ext が追加されたことを確認します。
4. ファイル accessibility.properties が、フォルダ <DevSuiteHome>%jdk%jre%lib にあることを確認します。このファイルがない場合は、次の場所からコピーします。  
accessbridge\_home%installer%installerFiles
5. accessibility.properties ファイルに、次のような記述があることを確認します。

```
assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge
AWT.EventQueueClass=com.sun.java.accessibility.util.EventQueueMonitor
AWT.assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge
```
6. スクリーン・リーダーを起動します。
7. Developer Suite コンポーネントを起動します。

## 3.2.2 各コンポーネントのインストール完了後の作業

各コンポーネントのインストール完了後のチェックリストを示します。確認の上、必要な作業を行ってください。

### 3.2.2.1 Oracle JDeveloper 10g リリース 2（10.1.2）

Oracle10g JDeveloper を有効に活用できるよう、次に説明する手順を実行してください。対応するデブレイ環境については、[第 B.1 項「Oracle10g JDeveloper」](#)を参照してください。

### 3.2.2.1.1 旧リリースからのユーザー設定の移行

JDeveloper (9.0.2) または JDeveloper (9.0.4) の製品版から JDeveloper (10.1.2) にユーザー設定を移行できます。手順については、第 A.2.1 項「リリース 9.0.2 からリリース 10.1.2 への JDeveloper ユーザー設定の移行」を参照してください。

Oracle JDeveloper リリース 3.2.3 から 9.0.4 または 10.1.2 への直接の移行はサポートされていません。

### 3.2.2.1.2 JDeveloper の拡張機能の有効化

JDeveloper の拡張機能を使用するには、まず Oracle Technology Network からファイルをダウンロードする必要があります。JDeveloper の拡張機能には、次のものがあります。

- JUnit
- WebDAV
- iSQL\*Plus

拡張機能を自動的にダウンロードおよびインストールするには、次の手順を実行します。

1. JDeveloper を起動します。
2. JDeveloper のメイン・メニューから、「ヘルプ」→「更新の確認」を選択します。

まだインストールしていない拡張機能や、インストールしてある拡張機能の新しいバージョンが表示されます。必要な拡張機能を選択して、インストールします。

拡張機能を手動でダウンロードするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Technology Network の JDeveloper 拡張機能のページ (<http://www.oracle.com/technology/software/products/jdev/>) を表示します。
2. 拡張機能を選択します。
3. 指示に従って Zip ファイルをダウンロードします。

拡張機能を手動でインストールするには、次の手順を実行します。

1. 使用しているコンピュータで稼働中の JDeveloper のインスタンスがあれば、すべて停止します。
2. 拡張機能のアーカイブで、インストールに関して他の指示がないか確認します。
3. ダウンロードした Zip ファイルを、ディレクトリ `DevSuiteHome\jdev\lib\ext` に展開します。
4. 拡張機能を使用するには、JDeveloper を再起動します。

JDeveloper の拡張機能の詳細は、JDeveloper のオンライン・ヘルプを参照してください。

### 3.2.2.1.3 ソース・コード管理の有効化 (Windows のみ)

JDeveloper 側から、Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM) を使用してソース・コードを管理するには、Oracle SCM リポジトリに接続する必要があります。リポジトリは、Oracle データベース内にあらかじめ作成しておいてください。データベース内にリポジトリを作成するには、「完全」オプションでインストールを行い、Oracle SCM に付属の Repository Administration Utility を使用します。リポジトリの作成手順については、Oracle Software Configuration Manager Repository のインストール・ガイドを参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。

#### 3.2.2.1.4 フォントの問題 (Linux および Solaris の場合)

UNIX 上で JDeveloper を起動すると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
Font specified in font.properties not found
[--symbol-medium-r-normal---%d-*-*p-*adobe-fontspecific]
```

これは、Linux および Solaris コンピュータで JDeveloper を起動した場合、必要なフォントが JDK から使用できるように構成されていないことを表します。JDeveloper はデフォルトで、各 JDK に含まれるファイル `font.properties` の記述に従います。しかし、ファイルに記述されたフォントがコンピュータで使用できないと、前述のようなエラー・メッセージが表示されます。これを解消するには、記述どおりにフォントをインストールするか、`font.properties` ファイルの記述を変更する必要があります。新しいフォントをインストールする手順については、各コンピュータの製造元にお問い合わせください。

`font.properties` ファイルの修正方法については、JDK の配布元が作成しているドキュメント、または次の Web サイトにある、Sun 社の『フォントの概要』ドキュメントを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.3/ja/docs/ja/guide/intl/addingfonts.html>

#### 3.2.2.1.5 ドキュメントのホスティング

ホストされたドキュメントを使用するように IDE オプションを設定した場合、JDeveloper は Oracle Technology Network でホストされるドキュメントを使用するよう、あらかじめ構成されます。ドキュメントには、次の URL でアクセスします。

[http://www.oracle.com/technology/products/hosted\\_doc/jdev/jdeveloper/](http://www.oracle.com/technology/products/hosted_doc/jdev/jdeveloper/)

ホストされたヘルプ・システムを初めて起動するときには、初期化のために数分かかる場合があります。

前述のサイト以外にも、独自にホストを設定してドキュメントのホスティングを行うことができます。ファイアウォールで保護されている場合、ネットワークの通信速度が遅い場合、または JDeveloper ドキュメントに情報を追加する場合などに、独自のホストを設定すると便利です。JDeveloper ドキュメントの拡張については、JDeveloper に付属している Oracle Help for Java (OHJ) に関するドキュメントを参照してください。

**JDeveloper ドキュメントをホストするには、次の手順を実行します。**

- DevSuiteHome/jdev/doc/ohj にある jar ファイルを解凍し、Web サーバーに置きます。基本インストールを行う場合、ドキュメントを Oracle Technology Network からダウンロードする必要があります。Jar ファイルは、それぞれ別のディレクトリに解凍します。
- `jdeveloper.hs` ファイルを修正して、サーバー上に置いた個々のヘルプ・ファイルの URL を正しく指すようにします。このファイルの構成例は、DevSuiteHome/jdev/doc/ohj/jdeveloper.jar 内の `jdeveloper-hosted-example.xml` を参照してください。

ファイルの修正後、各ユーザーは、JDeveloper が新しく指定したサーバーを使用するように設定する必要があります。操作方法は次のとおりです。

1. JDeveloper のメイン・メニューから、「ツール」→「設定」を選択します。
2. 「ドキュメント」を選択します。
3. 「ホストのドキュメントを使用」ラジオ・ボタンを選択します。
4. また、サーバー上にある `jdeveloper.hs` ファイルの URL を指定します。その URL では、デフォルトのポート (80) を使用している場合であっても、ポート番号を指定してください。

### 3.2.2.1.6 Terminal Server/ マルチユーザー環境での JDeveloper の使用法

JDeveloper を Microsoft Terminal Server または Citrix MetaFrame 環境にインストールして、1 つの JDeveloper を多数のクライアントがアクセスできるように設定できます。すべての場合において、プロジェクトをローカルに保存できます。

マルチユーザー環境に JDeveloper をインストールおよび構成するとき、最高の性能で運用できるように、ユーザー数やサーバーの処理能力などの利用状況やリソースを把握しておく必要があります。

#### Citrix MetaFrame Server または Microsoft Terminal Server への JDeveloper のインストール

JDeveloper をインストールするには管理者権限が必要です。

- Citrix または Microsoft Server に JDeveloper をインストールするには、次の手順を実行します。
  - J2EE Development インストール・タイプを選択し、JDeveloper をインストールします。
  - ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を、次のように定義します。

#### マルチユーザー環境におけるユーザー・ホーム・ディレクトリの構成

次の情報は Windows の場合の説明ですが、同じ構成が Linux および Solaris の場合にも適用されます。

Terminal Server 環境で JDeveloper を起動する前に、JDeveloper が個々のユーザーのホーム・ディレクトリを正しく識別できるように、ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を定義して、各ユーザーに対する値を設定する必要があります。変数の定義と設定を行わないと、DevSuiteHome¥jdev がすべてのユーザーのホーム・ディレクトリとして使用されます。すべてのユーザーにこのディレクトリを使用すると、動作が不安定になる可能性があります。

- ユーザー・ホーム環境変数名を定義するには、次の手順を実行します。
  1. テキスト・エディタで、ファイル DevSuiteHome¥jdev¥bin¥jdev.conf を開きます。ワードパッドなど、Linux および Solaris の改行文字を認識できるエディタを使用してください。
  2. 次のエントリを検索します。  
  
SetUserHomeVariable JDEV\_USER\_DIR  
  
これは、JDeveloper が起動時に検索する、デフォルトの環境変数名です。Terminal Server の管理者は、コンピュータの命名規則に従ってこの変数名を変更できます。
  3. ファイルを保存します。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視してもかまいません。
- 環境変数を設定するには、次の手順を実行します。

---

**注意：** マルチユーザー・コンピュータで JDeveloper を使用する場合、すべてのユーザーが次の操作を行う必要があります。

---

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「詳細設定」タブをクリックし、「環境変数」ボタンをクリックします。
3. 「ユーザー環境変数」セクションの「新規」をクリックします。
4. ユーザーレベルの環境変数に、JDEV\_USER\_DIR、または SetUserHomeVariable で選択した名前を追加します。
5. この値にホーム・ディレクトリ（たとえば N:¥users¥jdoe）を設定し、「OK」をクリックします。

6. コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定を確認します。

```
set
```

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=N:¥users¥jdoe
```

7. JDeveloper を起動します。

ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。

8. 「ヘルプ」→「バージョン情報」ボタンを選択して、`ide.user.dir` の値がユーザー・ホーム・ディレクトリに設定されていることを確認します。

### JDeveloper を稼動するための Terminal Server クライアントの構成

以下の説明は、Citrix MetaFrame または Microsoft Terminal Server のクライアントをローカルにすでにインストールし、システム管理者によって JDeveloper のインストールおよび構成が行われたと仮定しています。

JDeveloper 用に Terminal Server クライアントを構成するには、次の手順を実行します。

1. Terminal Server クライアントの画面は、256 色以上に設定する必要があります。これは JDK の要件によるものです。
2. Terminal Server にログインします。
3. ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数の名前が定義済であることを確認します。コンピュータで使用する命名規則については、システム管理者に問い合わせてください。デフォルト値は `JDEV_USER_DIR` です。
4. ユーザー・ホーム・ディレクトリを表す環境変数を設定するには、次の手順を実行します。

- Windows の「スタート」メニューから、「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。
- 「詳細設定」タブをクリックし、「環境変数」ボタンをクリックします。
- ユーザーの環境変数にホーム・ディレクトリを設定し、「OK」をクリックします。たとえば、ユーザーのホーム・ディレクトリへのパスを含む変数として `JDEV_USER_DIR` を定義できます。
- コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定が正しいことを確認します。

```
set
```

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=n:¥users¥jdoe
```

5. JDeveloper を起動します。
6. ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。
7. 「ヘルプ」→「バージョン情報」ボタンを選択して、`ide.user.dir` の値がユーザー・ホーム・ディレクトリに設定されていることを確認します。

マルチユーザー環境で JDeveloper を起動すると、次のようなエラーが発生することがあります。

```
The system DLL ole32.dll was relocated in memory. The application will
not run properly. The relocation occurred because the DLL Dynamically
Allocated Memory occupied an address range reserved for Windows NT
system DLLs. The vendor supplying the DLL should be contacted for a new
DLL.
```

この場合、`DevSuiteHome¥jdev¥bin¥jdev.conf` ファイルに次の行を追加してください。

```
AddVMOption -Xheapbase10000000
```

ワードパッドなど、Linux および Solaris の改行文字を認識できるエディタを使用してください。それでもまだエラーが発生する場合は、数を変更してみてください。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視してください。

さらに、プロジェクトの設定でも、同じ値でオプションを設定する必要があります。これには、「プロジェクト」メニューから「デフォルトのプロジェクト設定」→「実行」→「Java オプション」を選択してオプションを変更します。

すべてのユーザーがこの設定を使用できるように、JDeveloper を終了してから管理者としてログインし、次のファイル

```
DevSuiteHome¥jdev¥multi¥system¥DefaultWorkspace¥Project1.jpr
```

を次の場所にコピーしてください。

```
userhome¥system¥DefaultWorkspace¥Project1.jpr
```

### 3.2.2.1.7 JDeveloper で非埋込みモードの OC4J を使用

J2EE Development オプションでインストールを行った場合、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の機能をすべて利用できます。JDeveloper でアプリケーションのテストを行う場合、埋込みモードの OC4J を利用するので、構成を変更する必要はありません。サーバーでも同じ構成を使用する場合は、JDeveloper に付属のバージョンを使用できます。

**非埋込みモードの OC4J サーバーを構成するには、次の手順を実行します。**

1. `DevSuiteHome/j2ee/home` ディレクトリのコマンドラインで、次のコマンドを実行します。

```
java -jar oc4j.jar -install
```

複数の jar ファイルが解凍されます。ここで管理者のパスワードを入力するよう求められます。

2. パスワードを入力し、[Enter] キーを押します。パスワードをもう一度入力して [Enter] キーを押し、パスワードを確認します。

このパスワードは忘れないように書き留めておきます。OC4J サーバーの管理と停止には、このパスワードが必要になります。

OC4J サーバーのインストールと構成は、これで完了です。サーバーを起動します。

---

**注意：** 管理者ユーザー名は現在 admin です。管理者パスワードは、ユーザーが先に入力したパスワードです。OC4J サーバーの管理と停止には、このユーザー名とパスワードを使用してください。

---

**非埋込みモードの OC4J サーバーを起動するには、次の手順を実行します。**

- **Windows の場合：**ディレクトリ `DevSuiteHome¥jdev¥bin` に移動します。

- サーバーを起動する場合は、`start_oc4j.bat` を次のように実行します。

```
DevSuiteHome¥jdev¥bin¥start_oc4j.bat
```

- サーバーを停止する場合は、`stop_oc4j.bat` を次のように実行します。

```
DevSuiteHome¥jdev¥bin¥stop_oc4j.bat
```

- **Linux および Solaris の場合：**ディレクトリ `DevSuiteHome/jdev/bin` に移動します。

- サーバーを起動する場合は、`start_oc4j` を次のように実行します。

```
DevSuiteHome/jdev/bin/start_oc4j
```

- サーバーを停止する場合は、stop\_oc4j を次のように実行します。

**DevSuiteHome/jdev/bin/stop\_oc4j**

複数の jar ファイルが自動的にデプロイされ、サーバーに次の行が表示されます。

Oracle Application Server Containers for J2EE 10g (10.1.2.0.2) initialized

OC4J サーバーのインスタンスを調整する方法については、OC4J のドキュメントを参照してください。

---

**注意：** プロジェクトをデプロイするとき、サーバーが稼動している必要があります。

---

含まれるサーバーを使用しても、JDeveloper を使用してプロジェクトをテストしたり実行する妨げにはなりません。

#### 3.2.2.1.8 JDeveloper でのユーザー補助機能の使用法 (Windows のみ)

まず、第 3.2.1.6 項「ユーザー補助機能 (Windows のみ)」の手順に従って、Java Access Bridge のファイルを正しくインストールします。次に、以下の手順で、JDeveloper が Java Access Bridge とともに動作することを確認します。

1. スクリーン・リーダーを起動します。
2. JDeveloper を起動します。

JDeveloper を起動して、エラーが発生した場合は、まずエラー情報が含まれるコンソール・ウィンドウが表示され、次に JDeveloper のメイン・ウィンドウが表示されます。JDeveloper が起動すると、JDeveloper のメイン・ウィンドウが表示されます。表示されるメッセージは、JDeveloper の機能に影響しません。

### 3.2.3 OracleBI Beans

必要に応じて、インストール完了後の作業を行います。ただし、次の点に注意してください。

- OracleBI Beans カタログをインストールするには、DBA ロール権限を持つデータベース・ユーザーにアクセスできる必要があります。
- JDeveloper のデータに接続する前に、Oracle Database をインストールし、構成しておく必要があります。

#### 3.2.3.1 データベースに関する注意事項

BI Beans は、Oracle9i リリース 2 Database または Oracle Database 10g Enterprise Edition に保存されたデータをサポートします。ただし、第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」で説明されるように、特定のリリースとパッチセットのみがサポートされます。

BI Beans アプリケーションを接続するデータベース・バージョンに応じて、次の項を参照してください。

- 第 3.2.3.1.1 項「Oracle9i リリース 2 Database を BI Beans と併用するための準備」
- 第 3.2.3.1.2 項「Oracle Database 10g Enterprise Edition を BI Beans と併用するための準備」

**3.2.3.1.1 Oracle9i リリース 2 Database を BI Beans と併用するための準備** Oracle9i リリース 2 Database に対して BI Beans を実行するには、次の作業をすべて行います。

1. Oracle9i リリース 2 Database をインストールしていない場合は、インストールします。
  - 手順については、次の Oracle Technology Network のサイトから Oracle9i の該当するプラットフォームのインストール・ガイドをダウンロードしてください。

<http://www.oracle.com/technology/>

- サポートされているデータベースのバージョンについては、第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールするときには、個別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載の構成に従って、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチセット 2529822 をダウンロードしてください。BI Beans が正しく動作し、実行されるようにするには、これらの構成に従う必要があります。ドキュメントは随時更新されているため、新しいパッチセットをダウンロードしたときには、新しいバージョンを確認してください。
3. 『Oracle OLAP リファレンス』および『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network ( <http://www.oracle.com/technology>) で入手できます。適切なメタデータを定義しないと、OLAP 問合せを作成できなくなります。メタデータを定義するには、次のいずれかのツールを使用します。
  - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照してください。
  - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 3.2.3.1.2 Oracle Database 10g Enterprise Edition を BI Beans と併用するための準備 Oracle Database 10g Enterprise Edition に対して BI Beans を実行するには、次の作業を行います。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。
  - 手順については、次の Oracle Technology Network のサイトから該当するプラットフォームの Oracle Database 10g Enterprise Edition のインストレーション・ガイドをダウンロードしてください。  
  
<http://www.oracle.com/technology/>
  - サポートされているデータベースのバージョンについては、第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールするときには、個別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。
2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載の構成に従って、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチセット 3760779 をダウンロードしてください。BI Beans が正しく動作し、実行されるようにするには、これらの構成に従う必要があります。ドキュメントは随時更新されているため、新しいパッチセットをダウンロードしたときには、新しいバージョンを確認してください。
3. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) で入手できます。適切なメタデータを定義しないと、OLAP 問合せを作成できなくなります。メタデータを定義するには、次のいずれかのツールを使用します。
  - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照してください。
  - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
  - Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

### 3.2.3.2 その他の作業

データベースの準備のほかに、必要に応じて次の作業を行います。

- 詳細は、付録 E「既存の BI Beans プロジェクトの移行」を参照してください。
- JDeveloper ではデフォルトで、JDK は `..¥..¥jdk` ディレクトリにあると想定されています。JDK がこのデフォルトの場所でない場合は、`BIT_DevSuiteHome/jdev/bin/jdev.conf` を編集して、`SetJavaHome` オプションの設定を変更する必要があります。
- JDeveloper を使用した設計作業中に、分析結果がプロジェクト内に保存されます。ただし、開発者またはエンド・ユーザーが、他の開発者やエンド・ユーザーと分析結果やオブジェクトを共有できるようにするには、BI Beans カタログをインストールおよび構成する必要があります。詳細は、ヘルプ・トピック「Installing and Configuring the BI Beans Catalog」を参照してください。
- アプリケーションをテストするには、選択したデプロイ環境をインストールする必要があります。詳細は、ヘルプ・トピック「Requirements for the Deployment Environment」を参照してください。
- BI Beans には、クライアント環境の構成を検証し、レポートするユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、問題を診断できるように、構成に関する情報を収集することです。このユーティリティは、BI Beans、JDeveloper、および Oracle Database のリリース番号などの情報を表示し、OLAP カタログ・メタデータに対して診断テストを実行します。

詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの「Verifying a BI Beans Client Configuration」を参照してください。

## 3.2.4 Oracle Reports Developer

- Oracle Application Server Portal の統合手順については、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。
- Oracle OLAP Server の多次元データを基にレポートを作成する場合は、Oracle Reports Builder オンライン・ヘルプの Express データ・ソースの構成方法を参照してください。「Express データソースの構成」というトピックを検索します。Oracle Reports Developer のリリース・ノートにも、Oracle OLAP Server への接続準備に関する重要な情報が記載されています。

---

**注意：** Linux では、Oracle Reports から Oracle OLAP Server への接続はサポートされていません。

---

- Reports Services の起動および停止の手順については、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。
- 電子メールの送信に使用するサーバーは、Reports Server 構成ファイル、`reports_server_name.conf` で変更できます。このファイルは、`DevSuiteHome¥reports¥conf` ディレクトリ (Windows) または `DevSuiteHome/reports/conf` ディレクトリ (Linux および Solaris) にあります。
- Oracle Application Server に付属の Merant JDBC ドライバを使用するレポートは、Oracle Application Server のみでデプロイする必要があります。他のアプリケーション・サーバーに対する JDBC 問合せによりレポートをデプロイできるようにする場合は、Merant ドライバのライセンスを取得するか、開発およびデプロイ用に別の JDBC ドライバを使用する必要があります。

Oracle Application Server に付属の Merant JDBC ドライバを使用するには、Oracle Developer Suite をインストールしたときと同じ Oracle ホームに、Oracle Application Server をインストールします。このとき、インストール・オプションに J2EE and Web Cache を指定します。次に、DevSuiteHome¥reports¥conf¥jdbcpds.conf ファイル (Windows) または DevSuiteHome/reports/conf/jdbcpsds.conf ファイル (Linux および Solaris) で、Merant JDBC ドライバに関する情報を指定します。

ドライバに関する情報としては、通常、ドライバ名、接続文字列の書式、ドライバの Java クラスを指定します。

たとえば、Sybase を使用する場合、Merant ドライバに関する記述は次のようになります。

```
<driver name = "sybase-merant"
  sourceDatabase = "sybase"
  subProtocol = "merant:sybase"
  connectionString = "jdbc:subProtocol://databaseName"
  class = "com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver">
</driver>
```

ここで、

name は、Oracle Reports Developer で JDBC ドライバを特定するための一意な名前です。

sourceDatabase は、アクセスするデータベースの名前です。

subProtocol はドライバ固有の名前なので、該当するドライバのドキュメントを参照してください。たとえば、Merant ドライバを Sybase データベース用に使用する場合、subProtocol は merant:sybase となります。また、SQL Server データベース用の場合は、sqlserver となります。

connectionString は、ドライバの接続文字列の書式です。

上の例では、

jdbc:subProtocol://databaseName と指定しています。

class はドライバのメイン Java クラス・ファイル名です。この値はドライバによって異なるので、それぞれのドキュメントを参照してください。たとえば、Sybase データベース用 Merant ドライバの場合は com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver、SQL Server データベース用の場合は com.merant.datadirect.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver となります。

詳細は、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「JDBC PDS の構成と使用」を参照してください。DevSuiteHome¥reports¥conf¥jdbcpds.conf ファイル (Windows) または DevSuiteHome/reports/conf/jdbcpsds.conf ファイル (Linux および Solaris) にも、カスタム・ドライバの構成に関する説明があります。Oracle Reports Developer オンライン・ヘルプの「JDBC PDS」も参照してください。

### 3.2.5 Oracle Forms Developer

- Oracle Forms Developer 10g リリース 2 (10.1.2.0.2、Oracle Forms) でストアド Java オブジェクトを利用するには、必要な Java クラスおよび PL/SQL パッケージを Oracle10g データベースにインストールする必要があります。Oracle Forms Developer の Java Object サポートをインストールするには、次の手順を実行します。

1. DevSuiteHome¥dbs ディレクトリ (Windows) または DevSuiteHome/dbs ディレクトリ (Linux および Solaris) 内で、インストール・スクリプトを検索します。Java Object サポートをインストールするには、次のファイルが必要です。

```
dejavins.sql
dejavaux.sql
derefpls.plb
derefplb.plb
dedbjava.jar
```

2. スクリプトが格納されているディレクトリから、SQL\*Plus を起動します。

3. SYSTEM としてログインします。

インストールが正常に完了すれば、スキーマ SYSTEM の下に ORA\_DE\_REFLECTION パッケージ (deref1s.plb および dereflb.plb) が見つかります。

- Oracle Application Server を使用して Web に Oracle Forms Developer アプリケーションをデプロイする方法については、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド』を参照してください。
- Oracle Forms Developer アプリケーションを Forms6i から Oracle Forms Developer 10g に移行するために、開発者、システム管理者、データベース管理者が知っておくべき情報については、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Forms Developer and Forms Services: Forms アプリケーションの Forms6i からの移行』を参照してください。
- ソース管理やデバッガの機能を使用する場合の構成手順については、Oracle Forms Developer のオンライン・ヘルプを参照してください。
- TranslationHub 用にデータベースを構成するには、Schema Manager を使用します。Schema Manager の使用方法については、TranslationHub オンライン・ヘルプを参照してください。

### 3.3 コンポーネントの起動

Oracle Developer Suite のコンポーネントを起動する前に、前の項で説明したインストール完了後の全般的な作業およびコンポーネント固有の作業を完了しておいてください。また、コンポーネントの旧バージョンをアップグレードする場合は、アップグレードに必要な手順を必ず実行してください。各コンポーネントのアップグレード手順については、[付録 A「アップグレードに関する注意」](#)を参照してください。

Linux86-64 環境でコンポーネントを起動する場合は、Oracle Developer Suite のリリース・ノート の第 1 章「動作要件」を確認してください。

コンポーネントのインストール完了後の作業およびアップグレード作業が完了したら、次のようにコンポーネントを起動します。

#### 3.3.1 Oracle10g JDeveloper および Oracle Business Intelligence Beans

**Windows:** JDeveloper を起動するには、プログラム DevSuiteHome\jdev\bin\jdevw.exe を実行します。診断情報を表示するコンソール・ウィンドウを表示するには、プログラム DevSuiteHome\jdev\bin\jdev.exe を実行します。

**Linux および Solaris:** JDeveloper を起動するには、プログラム DevSuiteHome/jdev/bin/jdev を実行します。

Oracle Business Intelligence Beans は、JDeveloper の一部として使用できます。

#### 3.3.2 Oracle Reports Developer

**Windows:** Reports Builder を起動するには、タスクバーから「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - DevSuiteHome」→「Oracle Reports Developer」→「Reports Builder」を選択します。

**Linux および Solaris:** Oracle Reports Developer を起動するには、DevSuiteHome/bin ディレクトリに移動し、rwbuilder.sh を実行します。

### 3.3.3 Oracle Forms Developer

**Windows:** Forms Builder を起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - *DevSuiteHome*」→「Oracle Forms Developer」→「Forms Builder」を選択します。

**Linux および Solaris:** Oracle Forms Builder を起動するには、*DevSuiteHome/bin* ディレクトリに移動し、*frmblld.sh* を実行します。

### 3.3.4 Oracle Designer

**Windows:** Oracle Designer を起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - *DevSuiteHome*」→「Designer」→「Oracle Designer」を選択します。



---

## アンインストールと再インストール

この章では、Oracle Developer Suite のアンインストールと再インストールの手順について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [第 4.1 項「アンインストール」](#)
- [第 4.2 項「再インストール」](#)

## 4.1 アンインストール

次の項では、アンインストール手順について説明します。

### 4.1.1 インストーラを使用したアンインストール手順

1. Windows の場合は、アンインストール処理を開始する前に、Oracle サービスをすべて停止します。Linux および Solaris の場合は、アンインストール処理を開始する前に、Oracle プロセスをすべて停止してください。
2. インストーラを起動します。手順の詳細は、[第 2.10.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

---

**注意：** インストーラを起動すると、コンピュータのすべての Oracle ホームにインストールされた Oracle 製品およびコンポーネントが、すべて表示されます。製品およびコンポーネントは、必要なだけアンインストールできます。ここでは、Oracle Developer Suite のアンインストールについてのみ説明します。

Oracle Developer Suite のコンポーネントを、個別にアンインストールすることはできません。Oracle Developer Suite の 1 つのコンポーネントを選択してアンインストールしようすると、Oracle Developer Suite のすべてのコンポーネントが削除されます。

---

インストーラが起動すると、「ようこそ」画面が表示されます。「**製品の削除**」をクリックします。

「ようこそ」画面には、アンインストール処理を行うボタンが 2 つあります。

- **製品の削除：**これをクリックすると、個別に指定した製品がアンインストールされます。
  - **インストールされた製品：**これをクリックすると、現在インストール済の製品の表示やアンインストールが実行されます。
3. 「インベントリ」画面で、インストールされている製品の一覧を確認し、「**Oracle Developer Suite**」を選択します。

「インベントリ」画面は、「ようこそ」画面で「**製品の削除**」をクリックするか、他の画面で「**インストールされた製品**」をクリックすると表示されます。

---

**注意：** 製品名の前に「+」という記号があれば、そこにさらにコンポーネントやファイルがインストールされていることを表します。

「+」記号をクリックすると、コンポーネントやファイルの名前が展開表示されます。

---

「インベントリ」画面は、1 つまたは 2 つの、タブが付いたペインで構成されます。

「**内容**」ペインは必ず表示されます。現在コンピュータにインストールされている Oracle 製品が表示されます。このペインには次のボタンと製品情報が表示されます。

- **場所：**これをクリックすると、選択された製品やコンポーネントの場所が絶対パスで表示されます。
- **空のホームを表示する。**：これをクリックすると、インストールされた製品の表示が切り替わります。このチェック・ボックスを選択すると、現在製品がインストールされていない各 DevSuiteHome のディレクトリ情報が表示されます。
- **削除：**これをクリックすると、チェック・ボックスで選択された製品がすべて、DevSuiteHome からアンインストールされます。確認画面が表示されます。

- **ヘルプ**: これをクリックすると、「インベントリ」画面の機能についての説明が表示されます。
- **別名保存**: これをクリックすると、インストールされた製品名の一覧が、テキスト・ファイルに保存されます。「別名保存」をクリックすると、ファイル保存ダイアログ・ボックスが表示されます。ファイル名を入力し、「保存」をクリックすると、インストールされた製品名の一覧がそのテキスト・ファイルに保存されます。
- **閉じる**: これをクリックすると、「インベントリ」画面が閉じます。

「環境」ペインは、Windows プラットフォームで表示されます。コンピュータにインストールされたすべての DevSuiteHome に現在設定されているパスと環境変数が表示されます。このペインには次のボタンと製品情報が表示されます。

- **セントラル・インベントリの場所**: これは、コンピュータにインストールされたすべての DevSuiteHome に関する情報が含まれているディレクトリです。
  - **Oracle ホーム**: これは、コンピュータにインストールされた ORACLE\_HOME (DevSuiteHomes を含む) の一覧です。Oracle ホームごとの名前とディレクトリ・パスが表示されます。
  - **パス**: これは、Windows の PATH 環境変数の現在値です。
  - **適用**: これをクリックすると、PATH 環境変数に Oracle ホーム・ディレクトリが追加されます。一覧から ORACLE\_HOME (または DevSuiteHome) インスタンスを 1 つ以上選択し、「適用」をクリックすると、PATH 変数に追加されます。PATH 変数に表示される Oracle ホーム・ディレクトリの順序を変更するには、Oracle ホームの一覧の右側にある上矢印ボタンと下矢印ボタンを使用します。
  - **ヘルプ**: これをクリックすると、「インベントリ」画面の機能についての説明が表示されます。
  - **別名保存**: これをクリックすると、ディレクトリ情報がテキスト・ファイルに保存されます。「別名保存」をクリックすると、ファイル保存ダイアログ・ボックスが表示されます。ファイル名を入力します。すべての Oracle ホームと PATH 変数の一覧が、そのテキスト・ファイルに保存されます。
  - **閉じる**: これをクリックすると、「インベントリ」画面が閉じます。
4. 「場所」ボックスに表示されている Oracle Developer Suite の絶対パスをメモしてください。この情報は、インストーラが終了してから、ファイルやフォルダを手動で削除する場合に必要になります。
  5. 準備ができれば「削除」をクリックします。
  6. 「確認」画面で選択内容を確認し、「はい」をクリックします。  
 「確認」画面は、「インベントリ」画面で「削除」をクリックすると表示されます。  
 「確認」画面には、アンインストールの対象として選択した製品名が表示されます。必要に応じてスクロールし、製品名を確認してください。  
 「確認」画面には次のボタンがあります。
    - **ヘルプ**: これをクリックすると、「確認」画面のヘルプが表示されます。
    - **はい**: これをクリックすると、選択した製品のアンインストールが開始されます。
    - **いいえ**: これをクリックすると、「インベントリ」画面に戻ります。選択した製品は Oracle ホームから削除されません。
 「はい」をクリックして、アンインストールを開始します。
  7. アンインストール処理の進行状況を監視します。  
 「削除」プログレス・バー画面は、「確認」画面で「はい」をクリックすると表示されます。選択された Oracle Developer Suite のコンポーネントがすべて検出され、削除されます。  
 「削除」プログレス・バー画面には次のボタンがあります。

- **取消** : これをクリックすると、アンインストールが中断します。アンインストール処理の中断を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックしてアンインストールを中止するか、「いいえ」をクリックしてアンインストールを続行します。
- 8. アンインストールが完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。「閉じる」をクリックしてこの画面を終了し、「ようこそ」画面に戻ります。
- 9. 「ようこそ」画面で「取消」をクリックしてインストーラを終了します。インストーラを終了する確認画面が表示されたら「はい」をクリックします。
- 10. 残っているファイルやフォルダがあれば、手動で削除する必要があります。前の手順でメモした場所で、ファイルやフォルダを削除してください。
- 11. **Windows のみ** : コンピュータを再起動します。

これで Oracle Developer Suite がアンインストールされました。

## 4.2 再インストール

インストーラを使用して、すでにインストールされている Oracle Developer Suite にコンポーネントを追加できます。これには、インストーラをもう一度起動して、必要なコンポーネントがインストールされるインストール・タイプを選択します。すでにインストールされているコンポーネントは上書きされません。

すでにインストールされている Oracle Developer Suite を上書きして完全に再インストールを行う場合は、いったんアンインストールしてから再インストールしてください。

**関連項目：** [第 4.1 項「アンインストール」](#)

---

## アップグレードに関する注意

この付録では、Oracle Developer Suite の旧バージョンからの移行またはアップグレードについての基本的な情報を説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 第 A.1 項「Oracle Developer Suite」
- 第 A.2 項「Oracle10g JDeveloper」
- 第 A.3 項「Oracle Business Intelligence Beans」
- 第 A.4 項「Oracle Reports Developer」
- 第 A.5 項「Oracle Business Intelligence Discoverer」
- 第 A.6 項「Oracle Forms Developer」
- 第 A.7 項「Oracle SCM Repository」
- 第 A.8 項「その他のドキュメント」

## A.1 Oracle Developer Suite

Oracle Developer Suite の旧バージョンは、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4)、Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2)、および Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.4.x でした。Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) のコンポーネントは、表 A-1 に示すように、すべてが新しいバージョンに変わりました。

**表 A-1 Oracle Developer Suite で更新されたコンポーネント**

| コンポーネント                                                                                                    | リリース 1<br>バージョン<br>1.0.2.4.1 | リリース 2<br>(9.0.2)<br>バージョン | 10g (9.0.4)<br>バージョン | 10g リリース 2<br>(10.1.2.0.2)<br>バージョン |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|----------------------------|----------------------|-------------------------------------|
| Oracle JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む)                        | 3.2.3 <sup>1</sup>           | 9.0.2.x                    | 9.0.4.x              | 10.1.2.1.0                          |
| Oracle Reports Developer                                                                                   | 6i リリース 2                    | 9.0.2.x                    | 9.0.4.x              | 10.1.2.0.2                          |
| Oracle Business Intelligence Discoverer (従来の Discoverer Administration Edition に相当)、Discoverer Desktop を含む | 4.1.37                       | 9.0.2.x                    | 9.0.4.x              |                                     |
| Oracle Warehouse Builder                                                                                   | 2.1.1.34.11 および 9.0.2.56.0   | 9.0.2.x                    | N/A <sup>2</sup>     | N/A <sup>3</sup>                    |
| Oracle Forms Developer                                                                                     | 6i リリース 2                    | 9.0.2.x                    | 9.0.4.x              | 10.1.2.0.2                          |
| Oracle Designer                                                                                            | 6i リリース 4                    | 9.0.2.x                    | 9.0.4.x              | 10.1.2.0.2                          |

<sup>1</sup> Oracle9i Business Intelligence Beans は、Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) が最初のリリースです。

<sup>2</sup> Oracle9i Warehouse Builder リリース 2 (9.2) は個別 CD として Oracle Developer Suite に同梱されています。

<sup>3</sup> Oracle9i Warehouse Builder リリース 2 (9.2) は個別 CD として Oracle Developer Suite に同梱されています。

他にも個別にリリースされたコンポーネントがあります。たとえば、Oracle9i JDeveloper は、Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) の後で、リリース 9.0.3 としてリリースされました。各コンポーネントのバージョン履歴は、このマニュアルのコンポーネント別の説明、およびコンポーネントのリリース・ノートにも記載されています。

Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.x から Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) に移行するには、Oracle Developer Suite を新しい Oracle ホームにインストールする必要があります。旧バージョンがインストールされている Oracle ホームへの Oracle Developer Suite のインストールに関する情報は、第 2.6 項「1 つの Oracle ホームでの共存」を参照してください。

Oracle Developer Suite をインストールし、インストール後に必要な作業を実行したら、次の項の説明に従って各コンポーネントを移行します。

## A.2 Oracle10g JDeveloper

JDeveloper 9.0.2/9.0.4 の製品版から JDeveloper 10.1.2.1.0 にユーザー設定を移行できます。システム設定、ライブラリ、および接続情報の移行が可能です。

リリース 3.2.3 から 10.1.2.1.0 に直接移行することはできません。

### A.2.1 リリース 9.0.2 からリリース 10.1.2 への JDeveloper ユーザー設定の移行

---

**注意：** 次の手順に従い、別にインストールした JDeveloper からユーザー設定を移行した場合、移行先の JDeveloper ですでに設定済の内容が失われる場合があります。

---

ユーザー設定を移行するには、次の手順を実行します。

1. コマンドラインまたはシェル・プロンプトから、`-migrate` フラグを指定して JDeveloper を起動します。

```
jdev -migrate
```

「ユーザー設定の移行」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 移行する JDeveloper のバージョンを選択します。

「バージョン」ドロップダウン・リストに何も表示されない場合は、「参照」をクリックしてバージョンを検索します。ディレクトリ `previous_install_home\jdev\system` (Windows) または `previous_install_home/jdev/system` (Linux および Solaris) を選択します。ここで、`previous_install_home` は、移行元の JDeveloper がインストールされているホーム・ディレクトリを表します。

3. 移行する設定およびカスタマイズした設定を選択します。ここではすべてのオプションを選択することをお勧めします。
4. 「OK」をクリックします。ユーザー設定が移行されます。

## A.2.2 移行に関するその他の注意事項

移行に関する注意事項の詳細は、JDeveloper オンライン・ヘルプの「JDeveloper スタート・ガイド」の項のトピック「Oracle10g JDeveloper への移行方法」を参照してください。

## A.3 Oracle Business Intelligence Beans

OracleBI Beans を旧リリースからアップグレードする場合は、既存の OracleBI Beans プロジェクトを旧リリースから移行する必要があります。移行の詳細は、[付録 E「既存の BI Beans プロジェクトの移行」](#)を参照してください。

## A.4 Oracle Reports Developer

- Reports 6i のサーバー用永続ファイルやサーバー構成ファイルを再利用する場合は、これらのファイルを Oracle Reports Server 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) (Reports Server) のディレクトリにコピーできます。Reports Server により、6i のファイルが自動的に Reports Server 10g リリース 2 (10.1.2.0.2) の形式に変換されます。このためには、次のファイルをコピーします。

**Windows の場合：**

- `6i_oracle_home\reports60\server\report_server_name.ora`  
を次の場所にコピーしてください。

```
10g_oracle_home\reports\conf\report_server_name.ora
```

- `6i_oracle_home\reports60\server\report_server_name.dat`  
を次の場所にコピーしてください。

```
10g_oracle_home\reports\server\report_server_name.dat
```

**Linux および Solaris の場合：**

- `6i_oracle_home/reports60/server/report_server_name.ora`  
を次の場所にコピーしてください。

```
10g_oracle_home/reports/conf/report_server_name.ora
```

- `6i_oracle_home/reports60/server/report_server_name.dat`  
を次の場所にコピーしてください。

```
10g_oracle_home/reports/server/report_server_name.dat
```

- 旧バージョンの Oracle Reports から .rdf ファイルを開き、PL/SQL を再コンパイルする必要があります。

## A.5 Oracle Business Intelligence Discoverer

コンピュータに旧バージョンの Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当) がインストールされている場合、Oracle Business Intelligence Discoverer で管理作業を行うには、End User Layer をアップグレードする必要があります (ただし、リリース 10.1.2.0.0 以降がインストールされている場合は、EUL のアップグレードは不要です)。

EUL のアップグレード方法については、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』の第 24 章「古いバージョンの Discoverer からのアップグレード」を参照してください。

## A.6 Oracle Forms Developer

Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Forms Forms 6i からの Forms アプリケーションの移行』を参照してください。

## A.7 Oracle SCM Repository

リリース 6i またはそれ以降のリポジトリからアップグレードする場合は、Oracle Software Configuration Manager Repository のインストレーション・ガイドに説明されているリリース 6i またはそれ以降のリポジトリのアップグレード手順に従ってください。このドキュメントは、SCM クライアントの「**開始**」メニューからアクセスできます。

## A.8 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントにはそれぞれオンライン・ヘルプが付属し、製品とともに自動的にインストールされます。一部のコンポーネントについては、追加のオンライン・ドキュメントが Oracle Developer Suite JP Documentation Library CD-ROM に収録されています。また、DVD の場合はサブディレクトリ /doc\_library に収録されています。Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリの表示およびインストール方法については、[付録 C「ドキュメント・ライブラリのインストール」](#)を参照してください。

リリース・ノートや、コンポーネントごとのインストール後の作業や構成に関するさらに詳しい情報は、リリース・ノートおよびコンポーネント別の管理ガイドまたは構成ガイドを参照してください。

Windows の場合、リリース・ノートや準備作業の情報にアクセスするには、「**スタート**」メニューから次の順に選択します。

- 「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - DevSuiteHome」→「Release Notes」
- 「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - DevSuiteHome」→「Documentation」→「Getting Started」

また、ブラウザから、次のファイルを開くこともできます。

DevSuiteHome/doc/welcome/index.htm

最新版のドキュメント、ホワイト・ペーパー、その他の付属資料は、次の OTN を参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/>

---

## コンポーネント

Oracle Developer Suite では、最新の Oracle アプリケーション開発およびビジネス・インテリジェンス・ツールが 1 つに統合されています。Java や XML などのインターネット標準技術に基づいて、Oracle Developer Suite では、Oracle Application Server や Oracle Database 10g を活用したアプリケーションを効率的に構築する、理想的な開発環境を実現できます。

この付録では、Oracle Developer Suite に付属する開発ツールについて説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 第 B.1 項「Oracle10g JDeveloper」
- 第 B.2 項「Oracle Reports Developer」
- 第 B.3 項「Oracle Business Intelligence Tools」
- 第 B.4 項「Oracle Forms Developer」
- 第 B.5 項「その他のドキュメント」

## B.1 Oracle10g JDeveloper

Oracle10g JDeveloper は、J2EE および XML の開発環境で、E-Business アプリケーションや Web サービスを開発、デバッグ、デプロイするために必要な、様々な支援機能が組み込まれています。開発効率を向上するため、業界最速の Java デバッガや革新的なプロファイラ、そしてコード性能を分析改善する CodeCoach をはじめとする、開発の各工程にわたるツールが統合されています。さらに、アプレット、JavaBeans、JavaServer Pages、サーブレット、Enterprise JavaBeans などの標準 J2EE コンポーネントを容易に開発し、高品質を確保できるよう、ウィザード、エディタ、ビジュアル設計ツール、デプロイ・ツールも組み込まれています。

拡張性や処理性能に優れた J2EE アプリケーションを容易に開発できるよう、JDeveloper には Business Components for Java (BC4J) という、柔軟で拡張可能な J2EE フレームワークが付属しています。BC4J は、Sun 社の J2EE デザイン・パターンを実装するためのオブジェクト・リレーショナル・マッピング・ツールで、品質の高い J2EE アプリケーションを短期間で開発できます。

### B.1.1 対応するデプロイ環境

JDeveloper を使用して、様々な環境においてアプリケーションをデプロイできます。JDeveloper は Sun 社の Java SDK 1.4.1 に基づき、開発したアプリケーションやコンポーネントは、同じ SDK のバージョンが稼動する J2EE 認定プラットフォーム上でデプロイできます。

JDeveloper、および JDeveloper で開発したクライアントは様々な環境で動作しますが、このバージョンの JDeveloper は特に次の環境において認証されています。

- **ブラウザ**
  - Netscape Navigator 4.79 以降
  - Microsoft Internet Explorer 5.5 および 6.0
  - Java WebStart
- **アプリケーション・サーバー**

これらのサポートされているアプリケーション・サーバー・プラットフォームの詳細は、[http://www.oracle.com/technology/products/jdev/collateral/papers/10g/as\\_supportmatrix.html](http://www.oracle.com/technology/products/jdev/collateral/papers/10g/as_supportmatrix.html) を参照してください。

  - Oracle Application Server バージョン 10g リリース 2 (10.1.2)、10g (9.0.4.1)
  - Oracle Application Server Containers for J2EE 10g リリース 2 (10.1.2)
  - WebLogic 8
  - Apache Tomcat 4.1.30、5.x
  - JBoss 4.x、3.2.x
  - WebSphere 6、5.1
- **クライアント側のランタイム・プラットフォーム** (JDeveloper で開発され、適切なアプリケーション / データベース・サーバーにデプロイされたアプリケーション、WebStart および JSP を利用する側のプラットフォーム)
  - Windows 2000/XP
  - Linux x86 (デスクトップ環境として KDE2 または GNOME を使用)
- **JDBC**
  - Oracle Thin JDBC
  - Oracle JDBC-OCI8
  - Oracle Lite JDBC
  - Sun JDBC-ODBC Bridge

- データベース（接続して開発できるデータ・ソース）
  - Oracle Database 10g
  - Oracle9i RDBMS R9.0.1 および R9.2.0.2
  - Oracle8i RDBMS R8.1.7.1 および R8.1.7.2

OracleBI Beans 用にサポートされている Oracle データベースの詳細は、[第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」](#)を参照してください。

## B.1.2 Oracle Business Intelligence Beans

OracleBI Beans は、Oracle OLAP 用に設計された分析に対応するアプリケーションのビルディング・ブロックを提供する、一連の標準ベースの JavaBeans™ です。Oracle JDeveloper と OracleBI Beans を使用すると、Web アプリケーションを短期間で簡単に構築できます。これらのアプリケーションには Oracle データベースの高度な分析機能が備えられ、気軽に情報を見るだけのユーザーと、完全な非定型クエリーや分析機能を必要とする高度なユーザーの両方に対応しています。

---

**注意：** BI Beans をインストールする場合は、Oracle JDeveloper 10g リリース 2 (10.1.2.1) を同じコンピュータにインストールする必要があります。BI Beans のインストール時に、JDeveloper ルート・ディレクトリのパスを指定する必要があります。パスを指定しないと、インストーラでは BI Beans がインストールされません。

---

OracleBI Beans の主なコンポーネントは次のとおりです。

- プレゼンテーション Beans: グラフ、クロス集計、表
- OLAP（データ）Beans: QueryBuilder、CalcBuilder、Dimension List
- BI Beans カタログおよび関連するデータ保存サービス
- ビジネス・インテリジェンス UIX コンポーネント（サーブレット）または JSP タグに基づいた、HTML クライアント用アプリケーション

詳細は、次を参照してください。

- 「Getting Started with BI Beans」: JDeveloper ヘルプ・システムのトピックです。チュートリアルへのリンクも含まれています。
- OracleBI Beans の API リファレンス: JDeveloper ヘルプ・システムからアクセスできます。目次の「Reference」を参照してください。
- OracleBI Beans のサンプル: 一般的なアプリケーション・タスクのコード作成に役立ちます。次の Oracle Business Intelligence Web サイトで公開されています。

<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>

- 付録 E「既存の BI Beans プロジェクトの移行」: OracleBI Beans アプリケーションの旧リリースからの移行に関する情報が掲載されています。
- [第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」](#): OracleBI Beans のデータベース・バージョンに関する情報が掲載されています。

## B.1.3 UIX

JDeveloper には UIX 技術のコンポーネントが統合されているため、サーブレットや JSP を使用する、HTML ベースのクライアントを短期間で構築できます。UIX は、J2EE 準拠の Web アプリケーションを構築するためのオープン・フレームワークです。UIX には、Java クラス・ライブラリ、API、パーサーのほか、ページ単位で画面を遷移する形態の Web アプリケーション（オンライン・ショッピング・アプリケーションなど）を作成するためのソフトウェアなども含まれています。UIX はサーバー・ベースの技術で、Java プログラミング言語で実装されますが、クライアントには Java は不要です。ブラウザさえあれば、UIX アプリケーションを表示できます。UIX は、HTML 準拠のブラウザやモバイル・デバイスなど、様々なクライアントをサポートします。UIX 技術は、`oracle.cabo` パッケージとそのサブパッケージに含まれています。

## B.1.4 Bali

JDeveloper には Bali 技術コンポーネントが統合されており、Java アプレットや Java アプリケーションなど、Java をベースとした従来型のクライアントを短期間で構築するために利用できます。Bali は、Java ベースのクライアント・アプリケーションのプレゼンテーション層を柔軟に構築するためのフレームワークを構成します。Bali 技術は JFC（Java Foundation Classes）のフレームワーク上に構築され、Oracle Look and Feel の実装に活用できます。Java ベースの製品に統合するコンポーネントとして、Oracle Help for Java も提供されます。Bali 技術はすべて Java コードで実装され、`oracle.bali` パッケージおよびそのサブパッケージとしてまとまっています。

## B.2 Oracle Reports Developer

Oracle Reports Developer は、動的データを基に高品質なレポートを作成し、Web 上に表示したり、紙に印刷したりするためのツールです。Oracle Reports Developer を使用して作成されたレポートは、すべて Oracle Application Server にシームレスにデプロイできます。Oracle Reports Developer を使用すると、必要なデータにアクセスし、任意の形式でレポートを作成してどこにでも配布できるので、情報の公開が容易になります。たとえば、SQL データベース、OLAP データベース、XML で記述されたデータ、JDBC に対応したデータ・ソースなどからデータを公開できます。

Oracle Application Server を使用して、HTML、PDF、区切り文字付きテキスト、RTF、PostScript、PCL、XML など、様々な形式のレポートを作成できます。さらに、独自のデータドリブン Java コンポーネントや、Oracle Reports Developer 用のカスタム JSP タグを、ウィザード・インタフェースを使用して HTML 文書に埋め込むことにより、HTML レポート・ページの機能を拡張できます。レポート作成の作業の大部分は、ウィザードによって行われます。また、レポートのテンプレートやデータのプレビュー機能を使用して、レポートの構成を簡単にカスタマイズできます。

## B.3 Oracle Business Intelligence Tools

Oracle Business Intelligence Tools（Discoverer Administrator、Discoverer Desktop、Discoverer EUL Command Line for Java、BI Beans、Spreadsheet Add-in、Reports Developer で構成）は、Oracle Business Intelligence Tools CD に含まれています。Oracle Business Intelligence Tools CD は、Developer Suite CD パックに含まれる別個の CD です。Oracle Business Intelligence Tools をインストールするには、『Oracle Business Intelligence Tools インストール・ガイド』（Oracle Business Intelligence Tools CD の `¥doc` サブディレクトリ）の手順に従ってください。

Oracle Business Intelligence Tools のドキュメントは、Oracle Developer Suite JP Documentation Library に含まれています。

### B.3.1 Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件

Oracle Business Intelligence Tools 10.1.2.1 では、レポート対象のデータを含む次のデータベースのバージョンがサポートされます。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.6 以上)
- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.4 以上)
- Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.1 以上) (保証予定)

次の点に注意してください。

- 多次元分析を実行する場合は、OLAP オプションを指定した Oracle Database Enterprise Edition を使用する必要があります。
- リレーショナル分析を実行する場合は、Oracle Database Standard Edition または Oracle Database Enterprise Edition のいずれかを使用できます。マテリアライズド・ビュー、分析関数、Advanced Security Option (ASO) や Transparent Application Failover (TAF) などのデータベース機能を利用する場合は、Oracle Database Enterprise Edition を使用する必要があります。

サポートされているリリースの最新情報は、<http://metalink.oracle.com/> の「Certify application」で確認できます。

### B.3.2 最新の OLAP パッチのダウンロード

多次元データソースを問い合わせるときは、特定のデータベース・リリースおよびパッチのみがサポートされます。次の手順を使用して、最新の OLAP パッチが適用されていることを確認してください。

**最新の OLAP パッチにアクセスするには：**

1. OracleMetalink (<http://metalink.oracle.com/>) にログインします。
2. 「Patches」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。
4. 「Advanced Search」画面の各フィールドを次のように指定します。
  - **Product or Product Family:** 「Search」アイコンをクリックして、「Search In」フィールドから「Database & Tools」を選択します。「View All」をクリックします。表示されるリストから、「Oracle OLAP」をクリックします。
  - **Release:** ドロップダウン リストから適切なリリース番号を選択します。
  - **Patch Type:** 「Any」を選択します。
  - **Platform or Language:** 該当するサイトのプラットフォームを選択します。
  - 残りのフィールドは空白のままにします。

「Go」をクリックするとパッチのリストが表示されます。パッチ名に「OLAP」が付いているのが OLAP パッチです。

## B.4 Oracle Forms Developer

Oracle Forms Developer は、短期間でアプリケーションを開発するためのツールです。様々な Java インタフェースを備え、データベースを活用した企業クラスのインターネット・アプリケーションを、高い生産性で構築できる環境を提供します。構築ソフトウェア、リエントラント・ウィザード、プロパティ・パレットを統合し、高機能で多言語に対応した対話フォームやビジネス論理を、最小限のコードで開発できます。Oracle Forms Developer を使用して開発したアプリケーションは、Oracle Application Server に付属の Forms サーブレットや Forms Listener サーブレットを使用することにより、ただちにインターネットにデプロイできます。

Oracle Forms Developer には、Oracle Forms や Oracle Reports ファイルの他言語への翻訳を管理するサブコンポーネントが含まれています。このサブコンポーネントは **TranslationHub** と呼ばれ、Windows 版のみで使用可能です。これを使用すると、一貫性を保って効率的に翻訳作業を進めることができます。

## B.5 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントに対してオンライン・ヘルプ・システムが自動的にインストールされます。一部のコンポーネントについては、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリにも追加のオンライン・ドキュメントが収録されています。

Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリの表示およびインストール方法については、付録 C 「ドキュメント・ライブラリのインストール」を参照してください。

### B.5.1 オラクルの Web サイト

オラクル社では、様々な資料やソフトウェアを、Web を介して配布しています。代表的な Web サイトを紹介します。

- オラクル社（米国）のサイト  
<http://www.oracle.com/>
- Oracle10g JDeveloper  
[http://www.oracle.com/tools/jdev\\_home.html/](http://www.oracle.com/tools/jdev_home.html/)
- Oracle Technology Network  
<http://www.oracle.com/technology/>
- Oracle Technology Network の JDeveloper  
<http://www.oracle.com/technology/products/jdev/>
- JDeveloper Oracle Technology Network の会議室（「**Discussions**」をクリック）  
<http://forums.oracle.com/forums/forum.jspa?forumID=83>
- Oracle Forms  
<http://www.oracle.com/technology/products/forms/>
- Oracle Reports  
<http://www.oracle.com/technology/products/reports/>
- Oracle Business Intelligence Beans  
<http://www.oracle.com/technology/products/bib/index.html/>
- Oracle Business Intelligence Discoverer  
<http://www.oracle.com/technology/products/discoverer/>
- Worldwide Customer Support  
<http://www.oracle.com/support/>

---

## ドキュメント・ライブラリのインストール

すべてのコンポーネントに対してオンライン・ヘルプ・システムが自動的にインストールされます。Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリには、一部のコンポーネントに関してのみ、追加のドキュメントが含まれています。ドキュメント・ライブラリのほとんどのドキュメントは、HTML 形式と PDF 形式の両方が用意されています。

次のトピックでは、ドキュメント・ライブラリの内容について説明し、ドキュメントのインストールおよび表示の手順を紹介します。

- [第 C.1 項「ドキュメント・ライブラリのタイトル」](#)
- [第 C.2 項「ドキュメント・ライブラリのインストール」](#)
- [第 C.3 項「ドキュメント・ライブラリの表示」](#)

## C.1 ドキュメント・ライブラリのタイトル

ドキュメント・ライブラリのタイトルは、次の表のとおりです。ドキュメント・ライブラリのほとんどのドキュメントは、HTML 形式と PDF 形式の両方が用意されています。

表 C-1 スタート・ガイド

| 部品番号      | タイトル                                                                                               |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| B16012-04 | 『Oracle Developer Suite 10g (10.1.2.0.2) Installation Guide for Windows, Linux, and Solaris』       |
| B16013-01 | 『Oracle Developer Suite 10g (10.1.2.0.2) Quick Installation Guide for Windows, Linux, and Solaris』 |
| B16010-05 | 『Oracle Developer Suite 10g (10.1.2.0.2) Release Notes for Windows, Linux, and Solaris』            |

表 C-2 J2EE およびインターネット・アプリケーション

| 部品番号      | タイトル                                                                                               |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| B15572-01 | 『Oracle Forms Migrating Forms Applications from Forms 6i to 10g (10.1.2.0.2) for Windows and UNIX』 |
| B14032-03 | 『Oracle Application Server Forms Services Deployment Guide 10g (10.1.2.0.2) for Windows and UNIX』  |
| B14033-01 | 『Oracle XML Developer's Kit Programmer's Guide』                                                    |
| B10789-01 | 『Oracle XML API Reference』                                                                         |
| B12024-03 | 『Oracle XML Java API Reference』                                                                    |
| B14011-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE User's Guide』                                       |
| B14361-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Standalone User's Guide』                            |
| B14012-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Services Guide』                                     |
| B14013-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Security Guide』                                     |
| B14014-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Support for JavaServer Pages Developer's Guide』     |
| B14015-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Support for JavaServer Pages API Reference』         |
| B14016-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE JSP Tag Libraries and Utilities Reference』          |
| B14017-02 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Servlet Developer's Guide』                          |
| B15505-03 | 『Oracle Application Server Containers for J2EE Enterprise JavaBeans Developer's Guide』             |
| B19163-01 | 『Oracle Application Development Framework Case Manual』                                             |
| B14362-02 | 『Oracle Application Development Framework Guidelines Manual』                                       |

表 C-3 Business Intelligence Tools

| 部品番号      | タイトル                                                                             |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------|
| B13919-03 | 『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java User's Guide』 |
| B13917-03 | 『Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop User's Guide』                   |
| B13916-04 | 『Oracle Business Intelligence Discoverer Administration Guide』                   |

表 C-3 Business Intelligence Tools (続き)

| 部品番号      | タイトル                                          |
|-----------|-----------------------------------------------|
| B16378-01 | 『Oracle Business Intelligence Concepts Guide』 |
| B14364-01 | 『Oracle Reports Tutorial』                     |
| B13895-01 | 『Oracle Reports Building Reports』             |
| B14048-02 | 『Publishing Reports to the Web』               |
| B14049-01 | 『Oracle Reports Java API Reference』           |

## C.2 ドキュメント・ライブラリのインストール

ドキュメント・ライブラリは、CD-ROM または DVD から、次のいずれかの方法でインストールできます。

- ファイルをディスクからローカル・コンピュータへコピーする。
- インストーラを使用する。

### C.2.1 ファイルをコピーするインストール方法

最も簡単なインストール方法は、Oracle Documentation Library CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD から使用しているコンピュータへ、ファイルを直接コピーすることです。オペレーティング・システムのコマンドを使用して、CD-ROM の doc ディレクトリまたは DVD の /doc\_library/doc ディレクトリの内容を、コンピュータの適切なインストール・ディレクトリにコピーします。

インストーラで実行するインストールとの整合性のため、内容のコピー先を Oracle Developer Suite がインストールされている Oracle ホームにすることと、ディレクトリの名前を doc/d1 とすることをお勧めします。

CD-ROM または DVD から Oracle ホーム・ディレクトリへドキュメントをコピーする手順は次のとおりです。

---

**注意：** この方法を使用すると、コピー先のディレクトリがすでに存在する場合、ファイルが上書きされることがあります。

---

Windows の場合は、次のコマンドを入力します。

**CD-ROM の場合：**

```
prompt> xcopy /s cdrom_drive¥doc DevSuiteHome
```

**DVD の場合：**

```
prompt> xcopy /s dvd_drive¥doc_library¥doc DevSuiteHome
```

Linux および Solaris の場合は、次のコマンドを入力します。

**CD-ROM の場合：**

```
prompt> cp -r mount_point/doc DevSuiteHome
```

**DVD の場合：**

```
prompt> cp -r mount_point/doc_library/doc DevSuiteHome
```

## C.2.2 インストーラを使用する方法

インストーラを使用して、CD-ROM または DVD から使用しているコンピュータへドキュメントをインストールすることもできます。

---

**注意：** インストーラを使用できるのは、インストーラまたはインストーラを使用する Oracle 製品（Oracle Developer Suite など）が、コンピュータ上にすでに存在する場合のみです。

---

次の手順は、インストーラを使用してドキュメントをインストールする方法を説明しています。

1. ご使用のコンピュータから、Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD に含まれるインストーラを起動します。これは、Oracle Developer Suite のインストールに使用したものと同一ディスクです。

**関連項目：** [第 2.10.4 項「インストーラの起動」](#)

2. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。
3. 「ファイルの場所」画面で、次の操作を行います。
  - a. CD-ROM Disk 1 を使用している場合は、ディスクを取り出して、ドキュメント・ライブラリの CD-ROM に入れ替えます。DVD を使用している場合は、取り出さないでください。
  - b. 「ソース」フィールドで、次の操作を行います。

Windows の場合は、次のように入力します。

**CD-ROM の場合：**

`cdrom_drive:\stage\products.jar`

**DVD の場合：**

`dvd_drive:\doc_library\stage\products.jar`

Linux および Solaris の場合は、次のように入力します。

**CD-ROM の場合：**

`mount_point_directory/stage/products.jar`

**DVD の場合：**

`mount_point_directory/doc_library/stage/products.jar`

これにより、ドキュメント・ライブラリのインストール・ファイルの場所がインストーラに指示されます。

- c. 「インストール先」セクションで、ドキュメントのインストール先の Oracle ホームの名前とパスを入力するか、またはリストから選択します。

ドキュメントは、Oracle ホームの下の doc ディレクトリにインストールされます。
  - d. 「次へ」をクリックして続行します。
4. 「サマリー」画面で、サマリーを確認し、「インストール」をクリックしてインストールを開始します。
  5. インストールが完了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。「終了」をクリックしてインストーラを終了し、「はい」をクリックして選択内容を確認します。

## C.3 ドキュメント・ライブラリの表示

Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリは、CD-ROM や DVD から直接、または使用しているコンピュータのインストール・ディレクトリから表示できます。ドキュメントの表示に必要なツールの詳細は、[第 2.5 項「オンライン・ドキュメンテーションの要件」](#)を参照してください。

ドキュメント・ライブラリを表示する手順は次のとおりです。

1. Windows では、インストーラを使用してドキュメントをコピーした場合は、「スタート」メニューから次のようにしてライブラリにアクセスできます。  
「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - DevSuiteHome」→「Documentation」→ Doc CD  
また、ブラウザを使用して、CD-ROM の doc ディレクトリ、DVD の /doc\_library/doc ディレクトリ、またはインストール後のコンピュータの DevSuiteHome/doc/dl から、index.htm ファイルを開くこともできます。
2. 任意のタブをクリックします。
3. ドキュメント・タイトルの隣にある「HTML」リンクまたは「PDF」リンクをクリックしてドキュメントの内容を表示します。

### C.3.1 ディスクからのリリース・ノートの表示

ドキュメント・ライブラリの CD-ROM または DVD からリリース・ノートを表示する手順は次のとおりです。

1. ブラウザを使用して、CD-ROM の doc ディレクトリまたは DVD の /doc\_library/doc ディレクトリから、index.htm ファイルを開きます。
2. 「スタート・ガイド」タブをクリックします。このページには、Oracle Developer Suite および個々のコンポーネントのリリース・ノートへのリンクが表示されます。



---

# サイレント・インストールおよび 非インタラクティブ・インストール

この章では、Oracle Developer Suite のサイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストールについて説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [第 D.1 項「概要」](#)
- [第 D.2 項「要件」](#)
- [第 D.3 項「インストールの準備」](#)
- [第 D.4 項「レスポンス・ファイルの操作」](#)
- [第 D.5 項「インストールの開始」](#)
- [第 D.6 項「インストール完了後の作業」](#)

## D.1 概要

Oracle Developer Suite には、非インタラクティブ・インストールの方式として、次の 2 つがあります。

- サイレント・インストール
- 非インタラクティブ・インストール

どちらの方式も、Windows と、Linux および Solaris の両方のプラットフォームで利用できます。

### D.1.1 サイレント・インストール

Oracle Developer Suite のサイレント・インストールを実行するには、インストーラにレスポンス・ファイルを与え、コマンドラインで `-silent` フラグを指定します。レスポンス・ファイルは、テキスト・ファイルです。

インストーラは、レスポンス・ファイルに記述された変数やパラメータの値を使用して、インストール時のすべてのプロンプトへのレスポンスを得ます。レスポンス・ファイルには、インストール時のすべてのプロンプトに対するレスポンスを記述します。サイレント・インストールでは、グラフィカルな出力は表示されません。

サイレント・インストールは、複数のコンピュータに同様のインストールを行う場合に使用します。また、サイレント・インストールは、コマンドラインを使用してリモートでインストールを行う場合にも使用できます。サイレント・インストールでは、情報を入力する必要も、注意すべきグラフィカル・ユーザー・インタフェースもないため、インストールを監視しなくても済みます。

### D.1.2 非インタラクティブ・インストール

Oracle Developer Suite の非インタラクティブ・インストールを実行することもできます。その場合は、インストーラにレスポンス・ファイルを与えますが、コマンドラインで `-silent` フラグを指定しません。インストーラは、レスポンス・ファイルに記述された値やパラメータ値を使用して、一部またはすべてのユーザー・プロンプトへのレスポンスを得ます。インストーラのグラフィカル・ユーザー・インタフェースは、通常のインストールと同様です。すべてのプロンプトにレスポンスを指定しない場合は、インストール時に情報を入力できます。

非インタラクティブ・インストールは、特定のインストール画面を表示する必要がある場合や、一部の情報を対話的に入力する必要がある場合に使用します。

また、非インタラクティブ・インストールは、コマンドラインを使用してリモートでインストールを行う場合にも使用できます。

## D.2 要件

インストールの要件の詳細は、第 2 章「インストールする前に」を参照してください。

## D.3 インストールの準備

インストールを実行する前に、次の手順を実行します。

1. 第 2.8 項「インストールの準備」に記載されているインストール前の準備作業を完了します。
2. **Windows XP のみ**: Windows システム・ファイル (WSF) をインストールしておきます。インストールの開始方法については、第 2.10.4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」を参照してください。

3. **Linux および Solaris のみ:** インストーラのインベントリ・ディレクトリを作成します。その場合は、使用する Oracle ホーム・ディレクトリに移動し、DevSuiteHome/oraInventory などのサブディレクトリを作成します。インベントリ・ディレクトリの詳細は、第 2.10.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」を参照してください。
4. **Linux および Solaris のみ:** コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを参照するファイルを作成する必要があります。操作方法は次のとおりです。
  - a. root ユーザーとしてログインします。
  - b. ディレクトリ /var/opt/oracle を作成します (Linux x86 の場合を除きます)。
  - c. /var/opt/oracle ディレクトリ (Linux x86 の場合は、/etc ディレクトリ) で、ファイル oraInst.loc を作成し、次の行を挿入します。

```
inventory_loc=DevSuiteHome/inventory_directory
inst_group=inventory_owner_group
```

ここで、

- DevSuiteHome には、Oracle ホーム・ディレクトリを指定します。
- inventory\_directory には、インベントリ・ディレクトリを指定します。
- inventory\_owner\_group には、inventory\_directory への書き込み権限を持つグループを指定します (第 2.8.6.1 項「インストーラのインベントリのグループ名」を参照)。

たとえば、次のような行を入力します。

```
inventory_loc=/private1/oracle/oraInventory
inst_group=devsuitegrp
```

---

**注意:** Linux x86 では、/var/opt/oracle/oraInst.loc ではなく、/etc/oraInst.loc を作成してください。

---

## D.4 レスポンス・ファイルの操作

サイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールでインストーラに情報を指定するには、レスポンス・ファイルを使用します。

最初は、レスポンス・ファイルのテンプレートを使用します。このテンプレートは、Oracle Developer Suite の製品 CD-ROM の Disk 1 の stage¥Response ディレクトリ (Windows) または stage/Response ディレクトリ (Linux および Solaris) にあります。DVD の場合は、¥developer\_suite¥stage¥Response ディレクトリ (Windows) または /developer\_suite/stage/Response ディレクトリ (Linux および Solaris) にあります。レスポンス・ファイルのテンプレートは、次のように、Oracle Developer Suite のすべてのインストール・タイプ用に用意されています。

**表 D-1 インストール・タイプ別レスポンス・ファイル名**

| インストール・タイプ       | レスポンス・ファイルのテンプレート名                           |
|------------------|----------------------------------------------|
| J2EE Development | oracle.ids.toplevel.development.J2EE.rsp     |
| 完全               | oracle.ids.toplevel.development.Complete.rsp |

テンプレート・ファイルには、レスポンス・ファイルのパラメータの定義が記述されています。

---

**注意：** 誤った構成のレスポンス・ファイルを使用してサイレント・インストールを実行すると、インストールが失敗します。Boolean のパラメータには、true または false を指定してください。

---

## D.4.1 Oracle Developer Suite のインストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプル

次のテンプレート・ファイルのサンプルでは、読みやすさを重視して、パラメータを説明するコメント行は省略してあります。コメント行は、CD-ROM または DVD のテンプレート・ファイルで参照できます。

### D.4.1.1 完全インストール (Windows)

Windows 用のインストール・タイプが完全のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプルは、次のとおりです。イタリックで表示された値は、目的のレスポンスに応じて書き換える必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
FROM_LOCATION="../../stage/products.jar"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Developer Suite 10g"
LOCATION_FOR_DISK2="../../Disk2"
ORACLE_HOME="C:¥DevSuiteHome"
ORACLE_HOME_NAME="DevSuiteHome"
TOplevel_COMPONENT={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=true
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=true
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=true
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=true
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=true
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=true
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Complete"
b_olite_install=true
mailServerName="servername.domainname"
oracle.wsf.verification:PROD_HOME="C:¥DevSuiteHome"
oracle.wsf.install:PROD_HOME="C:¥DevSuiteHome"
oracle.repository.ocxpack90:PROD_HOME="C:¥DevSuiteHome"
oracle.swd.jre:PROD_HOME="C:¥DevSuiteHome"
```

### D.4.1.2 完全インストール (Linux および Solaris)

Linux および Solaris 用のインストール・タイプが完全のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプルは、次のとおりです。イタリックで表示された値は、目的のレスポンスに応じて書き換える必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME=devsuitegrp
FROM_LOCATION="../../stage/products.jar"
```

```

FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Developer Suite 10g"
LOCATION_FOR_DISK2="../../Disk2"
ORACLE_HOME="/private/DevSuiteHome"
ORACLE_HOME_NAME="DevSuiteHome"
TOplevel_COMPONENT={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=true
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=true
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=true
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=true
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=true
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=false
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Complete"
b_olite_install=true
mailServerName="servername.domainname"
PROD_HOME="/private/DevSuiteHome"

```

## D.5 インストールの開始

インストール時にレスポンス・ファイルを使用するには、コマンド・プロンプトからインストーラを起動します。コマンドの種類は、インストール先のプラットフォームおよび、サイレント・インストールと非インタラクティブ・インストールのどちらを実行するかによって異なります。

### D.5.1 サイレント・インストールでのインストーラの起動

インストーラをサイレント・インストールで起動するには、コマンド・プロンプトから次のように入力します。

- Windows:
 

```
setup -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```
- Linux および Solaris:
 

```
./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

### D.5.2 非インタラクティブ・インストールでのインストーラの起動

インストーラを非インタラクティブ・インストールで起動するには、コマンド・プロンプトから次のように入力します。

- Windows:
 

```
setup -responseFile absolute_path_and_filename
```
- Linux および Solaris:
 

```
./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

## D.6 インストール完了後の作業

非インタラクティブ・インストールまたはサイレント・インストールの結果は、`installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールの場合は、`silentInstall.log` ファイルも作成されます。これらのログ・ファイルは、インベントリ・ディレクトリに作成されます。

インストールの終了後は、[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#)で説明されているインストール後の作業を行ってください。

---

## 既存の BI Beans プロジェクトの移行

この付録では、既存の BI Beans プロジェクトを Oracle9i JDeveloper (9.0.4) から移行する手順を説明します。BI Beans 10.1.2 の旧バージョンからプロジェクトを移行する必要がある場合は、[第 E.5 項「BI Beans カタログの移行後の作業（オプション）」](#)で説明しているオプション作業の実行を検討してください。この付録で説明する項目は次のとおりです。

- 第 E.1 項「Oracle OLAP インスタンスの移行（オプション）」
- 第 E.2 項「BI Beans カタログの移行」
- 第 E.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」
- 第 E.4 項「BI Beans 作業領域の移行」
- 第 E.5 項「BI Beans カタログの移行後の作業（オプション）」

## E.1 Oracle OLAP インスタンスの移行（オプション）

BI Beans 10.1.2 アプリケーションは、Oracle9i Enterprise Edition リリース 2 または Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 またはリリース 2 に対して実行できます。その他の移行手順を実行する前に、次のリストで説明するように、どのバージョンのデータベースを使用するか決定する必要があります。

- 現在もっと古いバージョンのデータベースに対して実行している BI Beans アプリケーションを、Oracle9i Enterprise Edition リリース 2 に対して実行するようにアップグレードする場合は、データベースをアップグレードしてからアプリケーションを移行する必要があります。詳細は、Oracle9i OLAP のインストレーション・ガイドを参照してください。
- 現在もっと古いバージョンのデータベースに対して実行している BI Beans アプリケーションを、Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 に対して実行するようにアップグレードする場合は、データベースをアップグレードしてからアプリケーションを移行する必要があります。Oracle OLAP の移行の詳細は、Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 の『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

サポートされているデータベース・バージョンの詳細は、[第 B.3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のデータベース要件」](#)を参照してください。

## E.2 BI Beans カタログの移行

リモートの BI Beans カタログを移行するには、BI Beans に同梱のアップグレード・ユーティリティを実行します。このユーティリティの名前は `bi_upgradecatalog.bat` で、`JDEV_HOME\bibbeans\bin` ディレクトリ（`JDEV_HOME` は JDeveloper のインストール・ディレクトリ）にあります。

**重要：**このユーティリティを使用できるのは、BI Beans リリース 9.0.3 またはリリース 9.0.4 から BI Beans リリース 10.1.2 へアップグレードする場合のみです。必ず、最新リリースの BI Beans に付属のユーティリティを実行してください。

カタログ移行ユーティリティの詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの「BI Beans Catalog Upgrade Utility」を参照してください。

### E.2.1 Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 への移行の追加手順

アップグレード・ユーティリティを実行して既存の BI Beans カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2（10.2.0.1 以上）に移行するほかに、次の手順を実行して、データベース・サーバー上の PL/SQL パッケージも更新する必要があります。

1. 次の手順でパッチをインストールします。
  - a. BI Beans インストール・ディレクトリで `bidatasvr.jar` を探します。
  - b. `bidatasvr.jar` から `bibcoreb.pls` ファイルをローカル・ディレクトリに展開します。`jar` にはパッケージ・スコープがあり、`oracle\dss\persistence\storage\manager\bi\scripts` ディレクトリへ展開されます。
2. 次の手順でパッチを適用します。
  - a. コマンド・プロンプトで、次のように入力します。
 

```
cd oracle\dss\persistence\storage\manager\bi\scripts
```
  - b. `sqlplus` セッションを開きます。たとえば、次のように入力します。
 

```
sqlplus BIBCAT/BIBCAT@mydb
```

`mydb` には接続文字列を、`BIBCAT/BIBCAT` には BI Beans カタログをホストするスキーマの所有者のユーザー名とパスワードを指定します。

- c. sqlplus プロンプトで、次のように入力します。

```
SQL> @bibcoreb.pls
```

次の出力が表示されます。

```
Package body created.
Commit complete.
```

3. 次の手順で、パッケージが有効であることを確認します。

- a. sqlplus セッションを再度開きます。

- b. 次の SQL コマンドを入力します。

```
SQL> column OBJECT_NAME format a30;
SQL> column STATUS format a10;
SQL> select object_name, status from user_objects where object_name='BISM_
CORE';
```

次の表示は、パッチが正常に適用されたことを示します。

| OBJECT_NAME | STATUS |
|-------------|--------|
| BISM_CORE   | VALID  |
| BISM_CORE   | VALID  |

## E.3 旧リリースからのユーザー設定の移行

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の製品版から Oracle JDeveloper10g にユーザー設定を移行できます。Oracle JDeveloper10g を初めて開いたとき、ユーザー設定を旧リリースから移行するか確認する画面が表示されます。デフォルトでは、すべての設定が移行対象としてマークされます。ユーザー設定、特にデータベース接続は、アップグレードを許可する必要があります。データベース接続を移行しない場合は、移行するすべての作業領域に存在する BIDesigner が参照するすべての接続を作成しなおす必要があります。

Oracle JDeveloper リリース 3.2.3 から Oracle9i JDeveloper (9.0.4) 以降に直接移行することはできません。

ユーザー設定の移行の詳細は、[第 A.2.1 項「リリース 9.0.2 からリリース 10.1.2 への JDeveloper ユーザー設定の移行」](#)を参照してください。

## E.4 BI Beans 作業領域の移行

プロジェクトを移行するためには、次の手順を実行します。

1. 作業領域を移行する前に、該当する作業領域のバックアップ・コピーを作成します。
2. [第 E.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」](#)で説明したようにデータベース接続を自動的に移行していない場合は、データベース接続を移行してから作業を進めてください。Oracle JDeveloper10g では、接続ナビゲータを表示し、「データベース」を右クリックして、「**接続のインポート**」を選択します。

必ずこの手順を完了してから、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) からの接続を使用する BIDesigner を開いてください。

3. JDeveloper でプロジェクトを移行できるようにします。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成された作業領域、またはこれから Oracle JDeveloper10g の作業領域に追加しようとしている Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成されたプロジェクトを移行する必要があります。Oracle JDeveloper10g を起動して、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の BI Beans 作業領域を開くと、移行ウィザードが表示されます。このウィザードでは、多くの移行手順を自動的に実行できます。たとえば、Oracle JDeveloper10g の正確なバージョンに作業領域を更新できます。最新の UIX インストール可能コンポーネントや HTML アプリケーションのデータ・バインディング構文など、他のオプションを自動的に実行させることもできます。

ウィザードでは、すべてのローカル・カタログが自動的に移行されるようにしてください。また、移行前にカタログをバックアップするかどうか指定することもできます。特定のローカル・カタログを移行しない場合は、ウィザードで選択を解除できます。リモート・カタログのアップグレードの詳細は、[第 E.2 項「BI Beans カタログの移行」](#)を参照してください。

4. 自動アップグレードが完了したら、コンパイラ・オプションの警告をオンにし、アプリケーション・コードをコンパイルして置換が必要な推奨されないクラスまたはタグを識別し、確認されたエラーを修正します。
5. プロジェクト設定を編集し、次の行を削除してこのオプションが設定されていないことを確認します。このオプションが設定されている場合、JDeveloper では新規のバージョンではなく古いバージョンの JDBC が使用されます。  
`-Djava.ext.dirs=C:\¥Jdev¥JDev904_2.7.5.32.1¥jdev¥lib¥patches`
6. アプリケーションにプレゼンテーションが含まれており、シン QueryBuilder を使用してそのプレゼンテーションを編集する場合は、「開始」ページで何も選択されていないことがあります。この問題を解決するには、次の手順を実行します。
  - a. JDeveloper でプレゼンテーションを編集します。
  - b. プレゼンテーション・エディタの「アイテム」パネルを使用して、「OK」または「適用」をクリックします。
  - c. アプリケーションを設計時カタログからランタイム・カタログに再デプロイします。
7. 所有しているアプリケーションの種類に応じて、次の項で説明している手順を実行します。
  - [第 E.4.1 項「BI Beans JSP アプリケーションの手動による移行手順」](#)
  - [第 E.4.2 項「BI Beans UIX アプリケーションの手動による移行手順」](#)
  - [第 E.4.3 項「BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動による移行手順」](#)
  - [第 E.4.4 項「BI Beans Java サブレット・アプリケーションの手動による移行手順」](#)

**ヒント：** 手動による移行手順の最新情報は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

## E.4.1 BI Beans JSP アプリケーションの手動による移行手順

JSP アプリケーションを手動で移行するには、次の各項で説明する手順を実行します。

### E.4.1.1 ネームスペースの更新

各ページのコードの最初の行でネームスペースを編集します。次の例に示すように、既存のネームスペースに「/jsp」を追加します。

編集前：

```
<% taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibeans" prefix="orabi" %>
```

編集後：

```
<% taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibeans/jsp" prefix="orabi" %>
```

### E.4.1.2 新規の BI JSP タグ機能へのアクセス

このリリースの BI Beans の新機能である JSP タグ機能にアクセスする場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. 移行済アプリケーションのすべての JSP ページの最上部に、次のテキストを追加します。

```
<%@ taglib uri="http://java.sun.com/jstl/core" prefix="c"%>
```

2. 次の手順を実行して、JSTL タグ・ライブラリがプロジェクト内にあることを確認します。
  - a. `<project>¥public_html¥WEB-INF¥lib` ディレクトリに `standard.jar` ファイルが含まれているか確認します。含まれていない場合は、手順 b. および c. を実行します。
  - b. 移行済プロジェクトで任意の JSP ページを開きます。コンポーネント・パレットで、「JSTL Core」を選択します。このページに `out` タグをドラッグします。タグ・エディタで「OK」を選択します。
  - c. JSP ページで、`<c:out></c:out>` タグを探して削除します。  
`<project>¥public_html¥WEB-INF¥lib` ディレクトリを再度確認します。  
`standard.jar` ファイルが存在します。

### E.4.1.3 <body> タグの更新

BIThinSession タグを含む各ページで、HTML `<body>` タグを更新します。ネームスペースの編集後は、BIBody タグおよび InitBITags タグを更新する必要があります。BIBody タグは、ページ上でビジュアル・エディタに表示されているときにドラッグ・アンド・ドロップできます。InitBITags タグは、フォームの最初の子としてドラッグ・アンド・ドロップできます。

ドラッグ・アンド・ドロップ技術が効果的でない場合は、次の手順で説明するように、タグを手動で編集できます。

1. `<body>` タグを削除して、同じ場所に必要な BI タグ（BIBody（HTML `<form>` タグの前）と InitBITags（HTML `<form>` タグの後）を挿入します。
2. `<form>` の `action` 属性を、JSP ページの名前に設定します。
3. `method` 属性を `POST` に設定します。
4. InitBITags の `parentForm` 属性を、`<form>` の名前に設定します。

次のコードは、`biexplorerdetail1.jsp` というページの、これらのタグの例です。

```
<orabi:BIBody>
<form name="BIForm" method="POST" action="biexplorerdetail1.jsp" >
<orabi:InitBITags parentForm="BIForm"/>
```

**注意：**JSP ページの名前の指定には、スラッシュを含めないでください。また、終了タグ `</body>` を `</orabi:BIBody>` に置き換えます。

### E.4.1.4 プレゼンテーションにアクセスするコードの更新

アプリケーションの JSP ページにスクリプトレットが含まれている場合や、ID を利用してプレゼンテーションにアクセスし、ThinDataViewCommon にキャストする Java コードが含まれている場合は、プレゼンテーション Bean にキャストして Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

これを実現するには、次に示すようなコードの行を変更します。

```
ThinDataViewCommon dataView = (ThinDataViewCommon)pageContext.findAttribute(
    "biuntitled1_pres1");
```

次のようにします。

```
ThinDataViewCommon tdvc = null;
Presentation p = (Presentation)pageContext.findAttribute(
    "biuntitled1_pres1");
if (p != null)
    tdvc = p.getView();
```

新しいプレゼンテーション Bean にアクセスするために、次のインポートを追加します。

```
oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;
```

### E.4.1.5 SaveButton JSP タグの更新

SaveButton JSP タグは、SaveLink タグに置き換えられました。アプリケーションで SaveButton JSP タグを使用している場合は、次の手順でアプリケーションを更新できます。

1. BITHinSession で、次のような SaveButton タグを探します。

```
<orabi:SaveButton id="analyze1_SaveButton1"
presentationId="analyze1_Presentation1"
saveConfirmationPage="saveconf1.jsp"
saveConfirmationId="saveconf1_SaveConfirmation1" />
```

次の例に示すように、SaveButton タグを、SaveLink タグを使用するように変更します。

```
<orabi:SaveLink id="analyze1_SaveButton1" mode="Save"
presentationId="analyze1_Presentation1" />
```

2. Render タグを SaveButton タグに変更します。たとえば、次のような Render タグがあるとします。

```
<orabi:Render targetId="analyze1_SaveButton1" parentForm="BIForm"/>
```

Render タグを、次のように編集します。

```
<orabi:Button text="Save" onClick="{analyze1_SaveButton1_data.showDialog}"/>
```

「保存」ボタンをクリックすると、内部の save ページが表示されます。

## E.4.2 BI Beans UIX アプリケーションの手動による移行手順

UIX アプリケーションを手動で移行するには、次の各項で説明する手順を実行します。この手順では、BI Beans によって生成された UIX アプリケーションをカスタム・アプリケーションの基礎として使用したことを前提としています。

### E.4.2.1 イメージのパスの更新

作業領域にイメージが含まれている場合は、次の手順で説明するように、そのイメージをコピーして、BIPageTemplate UIT ファイルとログイン UIX ファイルでイメージのパスを更新する必要があります。

1. BIPageTemplate UIT ファイルおよびログイン UIX ページで、すべてのイメージのソース・パスを更新します。Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、イメージは public\_html¥cabo¥images¥<app\_name> ディレクトリに格納されます。Oracle JDeveloper10g では、イメージは public\_html¥<app\_name> ディレクトリに格納されます。

たとえば、このディレクトリは、UIT ファイルでは次のようなタグで指定されます。

```
<images source="cabo¥images¥<app_name>¥required.gif">
```

このタグを次のように変更します。

```
<images source="<app_name>¥required.gif">
```

2. アプリケーションでカスタム・イメージを使用している場合は、そのイメージを、手順 1 に示した Oracle JDeveloper10g の適切なディレクトリにコピーします。

### E.4.2.2 エラー・ページの更新

移行中に、UIX アプリケーションのエラー・ページの問題を説明するメッセージが表示される場合があります。この問題を解決するには、次いずれかを実行できます。

- BI Beans 10.1.2 で自動的に提供されるデフォルトのエラー・ページを使用する場合は、既存のエラー・ページを削除してから、プロジェクトを BI Beans 10.1.2 へ移行します。

- デフォルトのエラー・ページをカスタマイズしている場合に、変更内容を失わないようにするには、移行前に <bibeans:biPageTemplate> 要素を編集して renderLogoutButton 属性を削除します。たとえば、この要素は次のようになっています。

```
<bibeansTemplate:biPageTemplate
  xmlns="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:ctrl="http://xmlns.oracle.com/uix/controller"
  renderLogoutButton="false"
  renderOpenButton="false"
  pageTitle="BI uiXML Application Error">
```

単純に要素を編集して次のテキストを削除します。

```
renderLogoutButton="false"
```

この要素を編集後に、web.xml ファイルを変更します。エラー・ページのエントリは次のようになります。

```
<init-param>
  <param-name>oracle.cabo.servlet.errorPage</param-name>
  <param-value>cabo/bi/uix/error</param-value>
</init-param>
```

cabo/bi/uix/error の値を、カスタマイズしたエラー・ページを示すように変更します。

### E.4.2.3 部分ページ・レンダリングのための要素の追加

部分ページ・レンダリング (PPR) 機能を使用するテンプレート・ページを編集する必要があります。次の例に示すように、<body> 要素をアプリケーション・コードに追加します。

```
<contents>
  <body>
    <contents>
      <form name="form1" method="POST">
        <contents>
```

必ず </body> タグを適切な場所に追加してください。

### E.4.2.4 dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加

Oracle JDeveloper10g では、dialogLink をボタン、リンク、イメージの onClick 属性にバインドするには、キー showDialog を使用して、dialogLink の dataObject にバインドする必要があります。たとえば、dialogLink の ID が dlgLnk1 であり、BIFinSession で bisession1 と定義されているとします。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="${bibeans:data().bisession1.dlgLnk1}"/>
```

Oracle JDeveloper10g では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="${bibeans:data().bisession1.dlgLnk1_
data.showDialog}"/>
```

### E.4.2.5 プレゼンテーションにアクセスするコードの更新

アプリケーションの JSP ページに、ID を利用してプレゼンテーションにアクセスし、ThinDataViewCommon にキャストする Java コードが含まれている場合は、プレゼンテーション Bean にキャストして Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

これを実現するには、次に示すようなコードの行を変更します。

```
ThinDataViewCommon dataview =
  (ThinDataViewCommon) pageObjects.get("<parameter>");
```

次のようにします。

```

Presentation presentation =
    (Presentation) pageObjects.get("<parameter>");
ThinDataviewCommon dataview = null;
if (presentation !=null)
    dataview=presentation.getView();

```

旧バージョンの UIX アプリケーションの Java コードには、このコード変更が必要なインスタンスが 2 つあります。

新しいプレゼンテーション Bean にアクセスするために、次のインポートを追加します。

```
oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;
```

#### E.4.2.6 SaveDef UIX タグの更新

現在のリリースでは、saveConfirmation タグは廃止され、SaveDef UIX タグに置き換えられています。自動的に提供される内部の save ダイアログ・ページを、saveConfirmation ページの代わりに使用する必要があります。

たとえば、コードの元の行は次のようになっています。

```

<bibeans:saveDef id="saveBtn1"
presentationId="pres1"
saveConfirmationPage="SaveConfirm1.uix"
saveConfirmationId="saveConf1" />

```

このコードを、次のように書き換えます。

```

<bibeans:saveDef id="saveBtn1" presentationId="pres1"
mode="Save" />

```

「保存」ボタンをクリックすると、内部の save ページが表示されます。

### E.4.3 BI Beans Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動による移行手順

Java クライアント・クラスを使用するアプリケーションを手動で移行するには、次の各項で説明する手順を実行します。

#### E.4.3.1 グラフ・コード変更

アプリケーションでグラフを使用する場合は、次のコード変更が必要です。次のコード行を変更します。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((UIGraph) dv);
```

次のようにします。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((Graph) dv);
```

### E.4.4 BI Beans Java サーブレット・アプリケーションの手動による移行手順

サーブレット・アプリケーションを移行する前に、多数のカスタム・ページや機能を追加しているかどうかを確認してください。追加したカスタマイズがそれほど多くない場合は、JSP または UIX アプリケーションを作成し、そこでカスタマイズを再作成することができます。JSP または UIX アプリケーションに切り替えることにより、BI Beans で使用可能な強力な新機能を簡単に利用できます。

サーブレット・アプリケーションを移行する場合は、次の各項で説明する手動の移行手順を実行します。

#### E.4.4.1 Cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルをサーブレット・アプリケーション用に更新

JSP または UIX アプリケーションを移行すると、cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルは自動的に更新されます。これらのインストール可能ファイルは、サーブレット・アプリケーション用には自動的に更新されません。cabo ディレクトリには、UIX および BI Beans のイメージ、スタイル・シート、Javascript ファイルが含まれています。これらは Oracle9i JDeveloper (9.0.4) から Oracle JDeveloper10g への移行の際に更新されたものです。cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルをサーブレット・アプリケーション用に更新するには、次の手順を実行します。

1. アップグレードするプロジェクトの public\_html ディレクトリに移動します。
2. cabo ディレクトリの名前を cabo.9.0.4 に変更します。
3. サーブレット・アプリケーションと同じ BIDesigner を使用して、新規の UIX ページまたは JSP ページを作成します。

ページが生成されると、プロジェクトの新しい cabo ディレクトリが作成されます。

4. 古いディレクトリ (cabo.9.0.4) に、他にもファイルが含まれている場合（新しいスタイルシートや .xss ファイル、アプリケーション固有のイメージ・ファイルを作成していた場合など）は、それらのファイルも新しい cabo ディレクトリにコピーする必要があります。
5. （オプション）新しく作成したページは、削除してかまいません。

#### E.4.4.2 サーブレット・アプリケーションのサンプルの参照

BI Beans には、一連のサーブレット・アプリケーションのサンプルが付属しています。Oracle JDeveloper10g でサーブレット・アプリケーションを処理する場合のベスト・プラクティスとして、これらのサンプルを参照してください。たとえば、ViewToolbar に影響するコードを確認し、それに従ってアプリケーション・コードを変更します。ViewToolbar には、下位互換性はありません。

## E.5 BI Beans カタログの移行後の作業（オプション）

カタログの移行後に、移行後の作業を実行すると、パフォーマンスが向上する場合があります。

### E.5.1 カタログの移行後の作業が有益になる条件

次の条件がすべて満たされている場合は、オプションの移行後の作業の実行を検討してください。

- BI Beans 9.0.3 または BI Beans 10g (9.0.4) から BI Beans 10.1.2 へ移行したアプリケーションを使用している。
- 移行済の BI Beans カタログを、Oracle Database 10g 上で使用している。
- アプリケーションの実行中に、標準の ErrorHandler ログで次の警告メッセージが検出された。

**BIB-9549:** クエリーにレベル情報が挿入されていません。このクエリー、関連する計算および保存された選択の再保存を依頼してください（このメッセージの後には、レベル情報が欠落していたオブジェクトのリストが表示されます）。

**注意:** カタログの移行後の作業は、以前に BI Beans 10g (9.0.4) から移行した BI Beans 10.1.2.1 アプリケーションにも有益な場合があります。

## E.5.2 BIB-9549 メッセージの理由

BI Beans 10.1.2 リリース以降、階層およびレベルの情報は、ディメンション・メンバー参照ごとに、各クエリーと、カタログ内の関連する計算および保存済の選択内容内に格納されます。アプリケーションからカタログにこの情報が格納されていないオブジェクトのロードのリクエストがあった場合、クエリーでは必要な情報の検索を行った後にロード操作が完了します。メッセージ BIB-9549 は、クエリーで欠落している情報の検索が行われた分、ロード操作が遅延したことを示しています。

## E.5.3 移行後の作業

情報が欠落しているオブジェクトをロードするたびに発生する遅延を回避するため、BI Beans 10.1.2 を使用して、カタログ内の各オブジェクトをロードして再保存する 1 回限りの操作を実行できます。

オブジェクトをロードして再保存する手順は次のとおりです。

1. Oracle JDeveloper10g のローカル・カタログの下にある各オブジェクトをダブルクリックします。これでオブジェクトが開きます。
2. 各オブジェクトを再保存します。
3. 各オブジェクトをリモート・カタログにコピーします。

---

## トラブルシューティング

この付録では、Oracle Developer Suite のインストールにおけるトラブルシューティングの方法を一部紹介します。説明する項目は次のとおりです。

- 第 F.1 項「始める前に」
- 第 F.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」
- 第 F.3 項「Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング」

## F.1 始める前に

Oracle Developer Suite のインストール中に発生した問題を解決する前に、次の説明をお読みください。

- 第 F.1.1 項「ハードウェアおよびインストール前の要件の確認」
- 第 F.1.2 項「リリース・ノートの確認」

### F.1.1 ハードウェアおよびインストール前の要件の確認

はじめに、Oracle Developer Suite のハードウェアおよびソフトウェア要件と、インストールの準備作業を確認します。

- 第 2.1 項「ハードウェア要件」で指定されているハードウェア要件を、ご使用のコンピュータが満たしていることを確認します。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) が、ご使用のオペレーティング・システムに対応していることを確認します。サポートされるオペレーティング・システムの一覧は、第 2.2 項「サポートされるオペレーティング・システム」を参照してください。
- オペレーティング・システムがサポートされている場合、第 2.3 項「オペレーティング・システムのソフトウェア要件」で指定されているソフトウェア要件を満たしていることを確認します。
- 第 2.8 項「インストールの準備」の冒頭で指定されている、製品レベルでのインストールの準備作業がすべて完了していることを確認します。

### F.1.2 リリース・ノートの確認

インストールの前に、Oracle Developer Suite のリリース・ノートをお読みください。これらのドキュメントには、Windows、Linux および Solaris の各プラットフォームに対応する、製品レベルおよびコンポーネント・レベルのリリース・ノートが含まれています。このマニュアルは、Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリで入手できます。このマニュアルの表示方法については、第 C.3.1 項「ディスクからのリリース・ノートの表示」を参照してください。このマニュアルは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/>) でも入手できます。

プラットフォーム固有のドキュメントにも、そのプラットフォーム用のリリース・ノートが含まれている場合があります。プラットフォーム固有のリリース・ノートは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/>) から入手できます。

## F.2 インストールに関するトラブルシューティング

Oracle Developer Suite のインストール中にエラーが発生した場合は、次の手順を実行します。

- インストーラは終了しないでください。インストーラを実行したままにしておくほうが、インストール・ログ・ファイルを簡単に検索できます。
- **入力の間違い:** インストール画面のどこかで誤った情報を入力したと考えられる場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を修正してからインストールを続行します。
- **コピーまたはリンクのエラー:** ファイルのコピーまたはリンク時のエラーが報告された場合は、次のようにします。
  1. エラーの内容をメモし、インストール・ログを参照して原因を探ります。インストール・ログは、Oracle インベントリ・ディレクトリのサブディレクトリ `¥logs` (Windows)、または `/logs` (Linux および Solaris) にあり、ファイル名はそれぞれ次のようになっています。

**Windows の場合:**

```
- oracle_inventory¥logs¥installActionstimestamp.log
- oracle_inventory¥logs¥oraInstalltimestamp.err
- oracle_inventory¥logs¥oraInstalltimestamp.out
```

**Linux および Solaris の場合：**

- oracle\_inventory/logs/installActionstimestamp.log
- oracle\_inventory/logs/oraInstalltimestamp.err
- oracle\_inventory/logs/oraInstalltimestamp.out

文字列 *timestamp* は、インストールの開始時にファイル名に付加される値です。  
*timestamp* の形式は、*yyyy-mm-dd\_hh-mm-ss*[AM|PM] です。ここで、

- *yyyy* は、2003 のように、現在の年を表します。
- *mm* は、現在の月を表します。7 月の場合は 07 になります。
- *dd* は、現在の日付を表します。15 日の場合は 15 になります。
- *hh*、*mm* および *ss* は、それぞれ、インストールが開始された時間、分、秒を表します。
- [AM/PM] は、インストールが開始された時刻の AM または PM を表します。

oracle\_inventory ディレクトリの場所は、コンピュータに最初に Oracle 製品をインストールするときに指定されます。ディレクトリおよびディレクトリの検索方法の詳細は、[第 2.7 項「インストーラによって使用されるディレクトリ」](#)を参照してください。

2. インストールに失敗した場合は、[第 4 章「アンインストールと再インストール」](#)の手順に従って、インストールした内容を削除してください。
3. エラーの原因となる問題を修正します。
4. もう一度 Oracle Developer Suite のインストールを開始します。

## F.3 Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーに対してトラブルシューティングを行うには、次の手順を実行します。

- [第 F.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」](#)のインストール・ログ・ファイルを確認します。
- DevSuiteHome/cfgtoollogs ディレクトリで、Oracle Developer Suite Configuration Assistant の特定のログ・ファイルを確認します。[表 F-2](#)に、特定の Configuration Assistant のその他のログ・ファイルの場所を示します。エラーの原因となった問題を修正してください。
- 「致命的エラー。再インストール」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを分析して原因を発見してください。手順の詳細は、[第 F.3.3 項「致命的エラーへの対応」](#)を参照してください。

### F.3.1 Configuration Assistant の実行状態の判別

Oracle Developer Suite Configuration Assistant のエラーは、インストール画面の下部に表示されます。場合によっては、Configuration Assistant インタフェースにより、追加情報が表示されます。Configuration Assistant の実行状況は、結果で判断します。[表 F-1](#)に、結果コードを示します。

**表 F-1 Configuration Assistant の結果コード**

| ステータス                       | 結果コード |
|-----------------------------|-------|
| Configuration Assistant の成功 | 0     |
| Configuration Assistant の失敗 | 1     |

表 F-1 Configuration Assistant の結果コード（続き）

| ステータス                       | 結果コード |
|-----------------------------|-------|
| Configuration Assistant の中止 | -1    |

結果コードは、次のログ・ファイルに書き込まれます。  
 oraInventory/logs/installActionstimestamp.log

## F.3.2 Configuration Assistant のエラーの修正

インストール中、Configuration Assistant の画面が表示されているときには、Configuration Assistant が実行されています。Configuration Assistant が失敗した場合は、次の手順を実行して問題を修正してください。

1. 該当するインストール・セッションのインストール・ログ・ファイルを確認します。
2. 各 Configuration Assistant のログ・ファイルを、DevSuiteHome/cfgtoollogs ディレクトリで確認します。デフォルトのログ・ファイルの場所については、表 F-2 を参照してください。
3. 表 F-2 の Configuration Assistant に関する項を参照します。
  - a. 失敗した Configuration Assistant に依存関係がある場合は、依存する Configuration Assistant を再度実行します。依存する Configuration Assistant の実行が成功している場合であっても、再度実行する必要があります。
  - b. オプションの Configuration Assistant が失敗しても、依存性がない場合は、残りの Configuration Assistant を実行します。中止されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、次に表示されている Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。
  - c. 失敗した Configuration Assistant を再度実行します。インストーラを使用している場合は、該当する Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。

---

**注意：** 表 F-2 の Configuration Assistant の説明に、依存する事前作業の説明が含まれている場合は、該当する Configuration Assistant を実行する前に、これらの作業を実行する必要があります。

---

## F.3.3 致命的エラーへの対応

Configuration Assistant のエラーの一部は、致命的エラーです。致命的エラーは、問題を修正して続行してもリカバリできません。現在インストールされている内容を削除して、Oracle Developer Suite を再インストールする必要があります。リカバリ手順は、次のとおりです。

1. 失敗したインストールの内容を削除します。手順については、第 4.1 項「アンインストール」を参照してください。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle Developer Suite を再インストールします。
4. 致命的エラーが再発する場合は、インストールしたすべての Oracle 製品をコンピュータから削除します。手順については、第 4.1.1 項「インストーラを使用したアンインストール手順」を参照してください。

## F.3.4 Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明

表 F-2 に、Oracle Developer Suite のインストール中に実行される Configuration Assistant を示します。インストール・タイプによって、使用する Configuration Assistant が異なります。

---

**注意：** 一部の Configuration Assistant は、ユーザー・インタフェースが表示されないサイレント・モードで実行されます。

---

表 F-2 Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明

| Configuration Assistant            | 説明                                                                                                                       | ログ・ファイルの場所                                   |
|------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| Oracle Net Configuration Assistant | Oracle Net Configuration Assistant は、データベース・リスナーと中間層の Oracle Application Server インスタンスを構成し、デフォルトで LDAP ネーミングを使用するようにします。 | STDOUT/STDERR（すべてのメッセージはインストーラのウィンドウに表示されます） |



---

---

# 索引

## A

---

Access Bridge  
  JDeveloper の設定, 3-16  
  インストール, 2-19, 3-10

## B

---

Bali, B-4  
BI Beans、「Oracle BI Beans」を参照

## C

---

Cabo, B-4  
CD-ROM のマウント  
  Linux, 2-27  
  Solaris, 2-26  
CLASSPATH 環境変数, 2-18

## D

---

DISPLAY 環境変数, 2-20  
DVD のマウント  
  Solaris, 2-26

## E

---

End User Layer のアップグレード, A-4  
EUL のアップグレード, A-4

## F

---

font.properties, 3-12  
Forms Developer 用の OC4J  
  インスタンスの起動と停止, 3-9  
  ポート番号, 3-9

## H

---

HTTP リスナー, 3-9

## J

---

Java Access Bridge  
  JDeveloper の設定, 3-16  
  インストール, 2-19, 3-10  
Java Object サポート, 3-19  
JDeveloper の拡張機能

  インストール, 3-11  
  ダウンロード, 3-11  
  有効化, 3-11  
JDeveloper 用の OC4J  
  非埋込みモード, 3-15  
  ポート番号, 3-9  
JDK, 2-19, 3-10  
JMS, 3-9  
JRE, 2-19, 3-10

## L

---

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数, 2-18  
Linux86-64  
  コンポーネントの起動, 3-20  
Linux、Solaris にインストールされるコンポーネント、  
  「インストールできるコンポーネント」を参照  
Linux オペレーティング・システム  
  フォントの問題, 3-12

## M

---

Merant JDBC ドライバ, 3-18

## N

---

Net Configuration Assistant, 3-6, F-5  
Net Services, 3-8  
NLS\_LANG 環境変数, 3-7

## O

---

OC4J リスナー, 3-4  
Oracle Business Intelligence Beans  
  起動, 3-20  
Oracle Database  
  OracleBI Beans の構成, 3-16  
  OracleBI Tools のサポートされているバージョンおよびパッチ, B-5  
Oracle Designer  
  起動, 3-21  
Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリ、「ドキュメント・ライブラリ」を参照  
Oracle Developer Suite のコンポーネント, B-1  
Oracle Forms Developer  
  インストール完了後の作業, 3-19  
  起動, 3-21  
  説明, B-5

Oracle Net Configuration Assistant, 3-6, F-5  
Oracle OLAP Server, 3-18  
Oracle Reports Developer  
インストール完了後の作業, 3-18  
起動, 3-20  
説明, B-4  
Oracle Universal Installer, 2-23  
起動 (Linux、Solaris), 2-26  
起動 (Windows), 2-25  
ORACLE\_HOME 環境変数, 2-19  
(「Oracle ホーム」も参照)  
Oracle10g JDeveloper  
インストール完了後の作業, 3-10  
起動, 3-20  
説明, B-2  
ドキュメントのホスティング, 3-12  
非埋込みモードの OC4J, 3-15  
マルチユーザー環境, 3-13  
OracleAS Containers for J2EE, 3-4  
OracleAS Forms Services, 3-4  
OracleAS Portal の統合, 3-18  
OracleAS Reports Services  
インストール, 3-4  
起動と停止, 3-18  
OracleBI Beans  
Oracle Database の構成、OracleBI Beans, 3-16  
Oracle9i JDeveloper からのプロジェクトの移行  
, E-1  
インストール完了後の作業, 3-16  
インストール前の要件, 2-22  
説明, B-3  
OracleBI Discoverer, B-4  
oracle アカウントの属性, 2-21  
Oracle データベースの互換性、「共存」、「データベース」  
を参照, 2-15  
Oracle ホーム  
共存, 2-15  
設定, 2-19  
設定解除, 2-19  
ディレクトリ, 2-15  
oraInventory ディレクトリ, 2-24

## P

PATH 環境変数, 2-18  
pkginfo コマンド, 2-5  
portlist.ini ファイル, 3-9

## R

Reports Developer 用の OC4J  
インスタンスの起動と停止, 3-9  
ポート番号, 3-9  
Reports Server 構成ファイル, 3-18  
Repository Administration Utility, 3-11  
RMI, 3-9

## S

Solaris オペレーティング・システム, 2-4  
Solaris 8 および 9 のサポート, 1-4  
サポートされる Oracle Developer Suite コンポーネン  
ト, 2-3

パッケージ要件, 2-5  
パッチセット要件, 2-4  
フォントの問題, 3-12  
sqlnet.ora, 3-8  
startinst.bat, 3-9  
startinst.sh, 3-9  
stopinst.bat, 3-9  
stopinst.sh, 3-9  
Sun Solaris オペレーティング・システム、「Solaris オペ  
レーティング・システム」を参照

## T

Terminal Server クライアント  
JDeveloper 用の構成, 3-14  
TMP 環境変数、設定, 2-20  
TNS\_ADMIN 環境変数, 2-20  
tnsnames.ora, 3-8

## U

UNIX, B-4  
UNIX、「固有のプラットフォーム」を参照  
UNIX アカウント、「ユーザー」を参照  
UNIX グループ、「グループ名」を参照

## V

var/opt ディレクトリ, 3-3

## W

Windows オペレーティング・システム  
Developer Suite のコンポーネント, 2-3  
バージョン要件, 2-3  
パッチセット要件, 2-3  
Windows システム・ファイルのインストール, 2-25  
Windows にインストールされるコンポーネント、「イン  
ストールできるコンポーネント」を参照

## X

x86-64 での起動, 3-20

## あ

アップグレード  
End User Layer, A-4  
(「移行」も参照), 1-1  
アンインストール, 4-2  
移行  
Oracle Forms Developer, A-4  
Oracle Reports Developer, A-3  
Oracle10g JDeveloper, A-2  
OracleBI Beans プロジェクトを Oracle9i から, E-1  
OracleBI Discoverer, A-4  
一時ディレクトリ  
設定, 2-20  
必要な領域, 2-2  
インストール  
Windows システム・ファイル, 2-25  
言語, 3-4  
サイレント, 1-5, D-2

- 製品、概要, 1-2
- 製品、操作手順, 3-2
- 手順、全般, 1-3
- トラブルシューティング, F-2, F-3
- ドキュメント・ライブラリ, C-3
- 非インタラクティブ, 1-5, D-2
- 必要な情報, 2-22
- レスポンス・ファイル, D-3
- インストール完了後
  - OracleBI Beans の作業, 3-16
- インストール完了後の作業, 3-7
  - Oracle Forms Developer, 3-19
  - Oracle Reports Developer, 3-18
  - Oracle10g JDeveloper, 3-10
- インストールできるコンポーネント
  - Linux、Solaris, 1-2, 3-20
  - Windows, 1-2
- インストールの準備, 2-17
- インストール前
  - OracleBI Beans の要件, 2-22
  - コンポーネント固有の作業, 2-22
- インストール要件
  - OracleBI Beans, 2-22
  - コンポーネント固有, 2-22
- インベントリ・ディレクトリ, 2-24
- エラー
  - Windows システム・ファイル, 2-25
  - インストール（「トラブルシューティング」を参照）
- オペレーティング・システム
  - Developer Suite のコンポーネント, 2-3
  - ソフトウェア要件, 2-3
- オンライン・ドキュメンテーション
  - インストール, C-2
  - 要件, 2-15

## か

- 拡張機能、「JDeveloper の拡張機能」を参照
- 環境変数
  - 設定、Linux、Solaris, 2-19
  - リスト, 2-19
- 共存
  - Oracle Application Server, 2-15
  - Oracle ホーム, 2-15
  - 旧バージョン, 2-15
  - データベース, 2-15
  - リリース 9.0.2, 2-15
- グループ名, 2-21
- 言語
  - コンポーネントの実行時, 3-7
  - 選択, 3-4
  - フォント, 3-8
- 構成ツール
  - Oracle Net Configuration Assistant, 3-6, F-5
- 互換性、「共存」を参照

## さ

- 再インストール, 4-4
- サイレント・インストール、「インストール」、「サイレント」を参照
- サポートされるオペレーティング・システム, 2-3
- システム・ファイル・エラー（Windows）, 2-25

- ストアド Java オブジェクト, 3-19
- 前提条件の確認, 1-4, 2-23
- ソース・コード管理, 3-11
- ソフトウェア要件
  - OracleBI Tools に対応する Oracle Database, B-5
  - ソフトウェア要件、オペレーティング・システム, 2-3

## た

- タイトル、ドキュメント・ライブラリ, C-2
- ディスプレイの要件, 2-2
- デブロイ
  - Forms, 3-20
  - Reports, 3-18
  - 対応する環境
    - JDeveloper, B-2
- トラブルシューティング, F-2, F-3
- ドキュメント
  - オンライン, C-2
  - 製品のヘルプ, A-4
- ドキュメント・ライブラリ
  - インストール, C-3
  - タイトル, C-2
  - 表示, C-5

## な

- 認定ソフトウェア, 2-15

## は

- ハードウェア要件
  - CPU, 2-2
  - TMP 領域, 2-2
  - スワップ領域, 2-2
  - ディスク領域, 2-2
  - ディスプレイ, 2-2
  - ページファイル・サイズ, 2-2
  - メモリー, 2-2
- バージョン要件
  - Solaris, 2-4
  - Windows, 2-3
- パッケージ要件
  - Solaris, 2-5
  - Windows, 2-3
- パッチセット要件
  - Solaris, 2-4
  - Windows, 2-3
- 非インタラクティブ・インストール、「インストール」、「非インタラクティブ」を参照
- フォント
  - 追加言語, 3-8
  - 問題、Linux、Solaris, 3-12
- ブラウザ要件
  - ドキュメント, 2-15
  - プロセッサ要件、「ハードウェア要件」を参照, 2-2
  - ホストされたドキュメント、JDeveloper, 3-12
  - ポート番号, 3-9

## ま

- メール・サーバー, 3-5
- メモリー要件, 2-2

## や

---

ユーザー、作成, 2-21

ユーザー補助機能, 2-19, 3-10

要件

CPU (「ハードウェア要件」を参照), 2-2

オペレーティング・システム・ソフトウェア (「ソフトウェア要件」を参照)

オンライン・ドキュメンテーション, 2-15

ハードウェア (「ハードウェア要件」を参照)

## ら

---

ランタイム・サービス, 3-4

リスナー、OC4J, 3-4

リリース・ノート、CD-ROM からの表示, C-5

レスポンス・ファイル、操作, D-3

ロケール、Oracle Universal Installer の設定, 2-18